

平成13年度 浪岡町文化財紀要 II

- I 平成13年度川原館遺跡試掘調査報告書
- II 平野遺跡発掘調査報告書
- III 平成13年度 浪岡城跡（新館地区）発掘調査報告書X II
- IV 平成13年度 野尻（4）遺跡発掘調査概報
- V [資料紹介] 野尻（4）遺跡出土のヒスイについて
- VI 平成13年度 文化財パトロール調査概報
- VII 浪岡町文化財一覧
- VIII 平成13年浪岡町文化財日誌・他

2002. 3. 29

浪岡町教育委員会

平成13年度 浪岡町文化財紀要 II

- I 平成13年度川原館遺跡試掘調査報告書
- II 平野遺跡発掘調査報告書
- III 平成13年度 浪岡城跡（新館地区）発掘調査報告書X II
- IV 平成13年度 野尻（4）遺跡発掘調査概報
- V [資料紹介] 野尻（4）遺跡出土のヒスイについて
- VI 平成13年度 文化財パトロール調査概報
- VII 浪岡町文化財一覧
- VIII 平成13年浪岡町文化財日誌・他

2002. 3. 29

浪岡町教育委員会



平野遺跡出土の土壙墓



野尻(4)遺跡出土の馬の線刻画を有する土器

発刊にあたって

本年度の町内における発掘調査箇所は、当教育委員会が川原館遺跡、平野遺跡、浪岡城跡新館の3ヶ所、大釈迦工業団地調査会が野尻(4)遺跡、県文化財保護課が宮元遺跡、県埋蔵文化財調査センターが野尻(1)遺跡と、総計6ヶ所の遺跡が対象となりました。

本紀要では、町教育委員会関係の遺跡報告・概報を掲載し、さらに平成13年における文化財行政の動向などを付け加えて、年度内の成果として公表いたします。

特に、大釈迦工業団地調査会が実施しました野尻(4)遺跡は、約3万㎡の調査面積に加え、平安時代の集落が全域で検出されたのみならず、「馬の刻画を施した土器」が出土するなど、浪岡あるいは津軽の古代史解明にあたって重要な資料を提供できました。

また、平野遺跡では縄文時代後期・晩期から弥生時代と想定される石棺墓や土壌墓が多数検出され、赤色顔料を施した製品や藍胎漆器らんたいしつぎの出土は、葬送儀礼を考える上で重要な出土品として評価されるに至っています。調査前は中世の遺跡として想定していました川原館遺跡は、試掘調査の結果、平安時代後半の遺物が主体を占め、若干近世や近代の遺構・遺物が見られました。しかしながら、地元に言い伝えられていた「川原御所」として、浪岡御所(史跡浪岡城跡)と対峙する「御所」と認定できる状況には至りませんでした。試掘面積や試掘箇所の関係もあり、「川原御所」の所在確認は今後に残された課題となりました。浪岡城跡新館に関しては、昨年に引き続き中世の遺構や遺物が検出され、広範囲に城館期の遺構が広がっていることを確認できました。

最後に、平成13年1月29日に国史跡指定となった高屋敷館遺跡は、現在公有化事業を実施しており、今後発掘調査・環境整備を経て史跡公園化の道を歩むことになりました。浪岡城跡とともに、我が町の貴重な遺産として保存しながら活用の方向性を模索してみたいと思います。

関係各位の旧に倍してのご指導・ご協力をお願い申し上げます。

平成14年3月29日

浪岡町教育委員会

教育長 成 田 清 一

例 言

- 1 本書は、平成13年度に浪岡町教育委員会が実施した文化財関係事業の報告である。
- 2 川原館遺跡、平野遺跡、浪岡城跡新館の報告は、補助事業である「町内遺跡発掘調査事業」の成果報告である。
- 3 本書の構成は以下の通りであり、それぞれの編集及び主な執筆担当を（ ）内に記した。
 - 1) 平成13年度川原館遺跡試掘調査報告書（木村浩一・工藤清泰）
 - 2) 平野遺跡発掘調査報告書（工藤清泰・木村浩一）
 - 3) 平成13年度 浪岡城跡（新館地区）発掘調査報告書Ⅱ（木村浩一・工藤清泰）
 - 4) 平成13年度 野尻（4）遺跡発掘調査概報（高杉博章）
 - 5) 【資料紹介】野尻（4）遺跡出土のヒスイについて（長内孝幸）
 - 6) 平成13年度 文化財パトロール調査概報（小田桐勝昭）
 - 7) 浪岡町文化財一覧（工藤清泰）
 - 8) 平成13年浪岡町文化財日誌・他（工藤清泰）
- 4 図版・写真・表などの番号は、各報告で独立しているため、全体としての統一は図らなかった。
- 5 平野遺跡の発掘調査及び報告書の作成に関しては、次の方々からのご指導を賜った。（敬称略・順不同）
成田滋彦、岡村道雄、山口義伸、市川金丸、藤沼邦彦、関根達人、三浦圭介、工藤大、成田誠治、福田友之、大田原潤、藤原弘明、笹森一朗、一町田工、相馬信吉、木村鐵次郎



対象遺跡位置図

目 次

発刊にあたって

例言・目次

I	浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第6集 川原館遺跡試掘調査報告書	
	第1章 調査に至る経緯	2
	第2章 調査経過	4
	第3章 検出遺構	6
	第4章 出土遺物	19
	第5章 まとめ(発掘抄録)	22
II	浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第7集 平野遺跡発掘調査報告書	
	第1章 調査に至る経緯	30
	第2章 調査経過	32
	第3章 検出遺構	33
	第4章 出土遺物	61
	第5章 まとめ(発掘抄録)	69
III	平成13年度 浪岡城跡(新館地区)発掘調査報告書XII	
	第1章 調査に至る経緯	94
	第2章 調査経過	96
	第3章 検出遺構	98
	第4章 出土遺物	111
	第5章 まとめ(発掘抄録)	114
IV	平成13年度 野尻(4)遺跡発掘調査概報	
	第1章 調査概要	120
	第2章 遺跡の概要と調査経過	120
	第3章 検出遺構の概略	123
	第4章 出土遺物の特徴	127
	第5章 まとめ(発掘抄録)	128
V	資料紹介 野尻(4)遺跡出土のヒスイについて	134
VI	平成13年度 文化財パトロール調査概報	142
VII	平成13年度 浪岡町文化財一覧	148
VIII	平成13年浪岡町文化財日誌・他	149

浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第6集

川原館遺跡試掘調査報告書

I 調査に至る経緯

平成12年9月13日教育委員会に対し、浪岡農業協同組合（代表理事組合長 工藤敏昭）より、本遺跡内に位置する農協所有地（旧浪岡支所・倉庫等）を開発するにあたり、試掘調査の依頼を受けた。教育委員会としては、平成12年度内における事業計画に組み込むことは予算的に無理であるとの回答を提出し、早急に実施したいのであれば、原因者負担で実施すべきであるとの協議を続けた。その結果10月17日に、双方で試掘調査に関する確認書を締結し10月23日頃から調査を実施する段取りとなっていた。

しかしながら、浪岡農協側では10月20日の理事会にて原因者負担を伴う支出行為に関しては、赤字財政の関係で応じられないとの姿勢を示したことにより、試掘調査は中断を余儀なくされた。そのため、10月31日に開催された理事会に生涯学習課長と文化班長が参考人として出席し、埋蔵文化財保護行政への協力を依頼した。

その後、11月1日付けで再度確認書に基づく試掘調査の依頼を受けることとなったが、平成12年度中は無理な状況下にあるため、平成13年度事業に組み込むために検討を重ねた。その結果、当教育委員会における平成13年度町内遺跡発掘調査事業の一部に組み込むことが可能となったため、下記調査要項に基づき試掘調査を実施することとなった。

平成13年度 川原館（川原御所）試掘調査要項

浪岡町教育委員会生涯学習課

1 調査の目的と経緯

周知の埋蔵文化財包蔵地である川原館（川原御所）については、国史跡浪岡城跡に関連する遺跡としてもっとも重要視される遺跡である。その中心となる部分に、浪岡農協浪岡支所があるが、今回、同農協の整理統合に伴い同所の開発が計画された。この場所は、明治時代には郡役所、その後も浪岡尋常小学校から浪岡農協支所として時代を超えて地域の中心地としての利用をされてきている。

同所については、これまで調査の手が入っておらず、文献からのアプローチしかなかった。この度の試掘調査で、埋蔵文化財（遺構・遺物）の保存状態が良ければ浪岡町にとどまらず青森県史上からも重要視されるものであるが、度重なる施設の建設にあたり遺構等が破壊されている可能性も否めない。

したがって、今回の試掘調査を実施し遺構の保存状態を確認し、遺跡の開発・記録保存・保護の方策を探るものである。

2 調査地及び所有者

調査地地番等 南津軽郡浪岡町大字浪岡字浅井130の1 他

所有者 浪岡農業協同組合

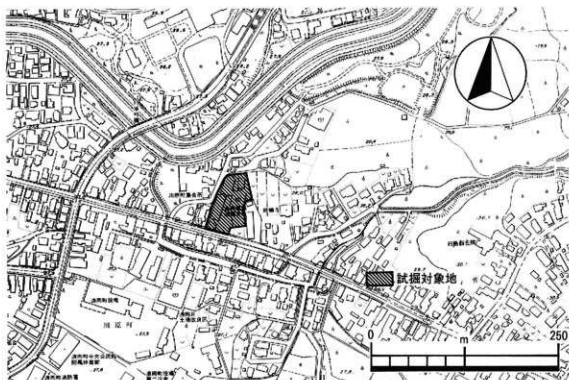


図1 試験箇所の位置

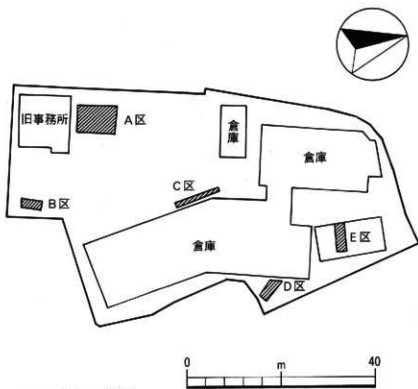


図2 試験区の位置

3 調査面積

対象面積3,000.65㎡のうち約7%にあたる200㎡を対象とする。

対象地及び試掘箇所は図1・図2を参照。

4 調査期間等予定（期間中に所定の日数を行う）

準備作業 平成13年4月16日から平成13年5月9日

調査作業 平成13年5月10日から平成13年5月30日（内10日程度）

整理作業 平成13年10月9日から平成13年10月31日（内3日程度）

報告書作成作業 平成13年12月3日から平成14年2月28日

5 調査体制

浪岡町教育委員会 生涯学習課（文化班）

教育長 成田清一

生涯学習課長 常田典昭

文化班長 工藤清泰

文化班主任主査 木村浩一（主担）

文化班主査 小田桐勝昭

調査補助員 斎藤とも子・藤本直子

調査作業員 藤本範子・長谷川輝子・乗田キヨエ・成田真佐子・田村広江

6 調査協力機関

南津軽郡浪岡町浪岡字細田87

浪岡農業協同組合 代表理事組合長 工藤敏昭

7 調査方法

トレンチ方式により試掘箇所を設定し、重機によって表土及び攪乱層を除去した後、遺構の確認と遺物の検出に努める。

遺構については、確認を主たる目的とするが、時代・時期判断等で掘り下げを行う場合もある。確認後は、平板実測及び写真撮影等を行い記録の保存に努める。

8 調査報告書の作成

調査報告書は「浪岡町文化財紀要」の中に掲載し、成果を公表する。

（工藤清泰）

II 調査経過

現場の試掘調査は、平成13年5月7日（月）から開始し、同年5月29日をもってほぼ終了した。以下調査日誌によって調査経過を概述する。

5月7日 試掘箇所3箇所（A・B・C区）の表土をバックホーによって除去。2箇所からコ

ンクリートの基礎を検出。さらにA区に関しては、90cmほどから井戸と思われる遺構も検出される。

5月8日 原点レベル設定のため、浪岡城跡検校館の基準点からレベル移動を行う。試掘調査区の隣接地に4点のベンチマーク(B.M.)を設定する。平板ポイントの設定作業。

5月9日 調査区全体と試掘箇所を平板によって測量開始。A区からE区までの5箇所に関して終了。

5月10日 本日より作業員を入れて掘り方を始める。A区の試掘箇所をジョレンにて精査すると井戸跡(SE01)と柱穴群が検出される。西側部分には攪乱箇所あり。B区のジョレンがけ。表土下30cmでも炭化物内からナイロン等が出土する。C区、旧浪岡尋常小学校の校舎と想定される基礎跡が検出。D区表土はゴミの山であり、ナイロン・貝殻・動物の頭蓋骨など出土。

5月11日 A区の南壁・西壁の精査。D区ゴミの部分はほぼ除去終了。E区スコップ半分ぐらいの深さ(約20cm)で、砂利が敷き詰められた状況が認められる。

5月14日 A区遺構確認面での平板測量(1/20)。B区掘り下げ開始。溝跡らしき遺構を確認。C区掘り下げずと寛永通宝出土。ベンチマークに誤差が生じていることを確認したことから再度標高移動を行う。

5月15日 A区ジョレンがけ後遺構確認。SX01・柱穴・SE01を確認後実測(1/20)。SX01の西壁を掘り下げると焼土(SF01)を検出。B区遺構の平板実測とレベリング。C区東側掘り下げ。D区本来の遺構面を確認。E区北側掘り下げ。

5月16日 A区南壁層序図作成。C区東側掘り下げ。本来のI層(黒色土)確認。E区地山まで掘り下げ完了。南東隅に遺構らしき痕跡が見えるも倉庫のため暗くて確認できない。

5月17日 A区東壁層序図実測。B区SX02と東壁側を掘り下げ。C区地山まで掘り下げ。柱穴を確認。D区西側に粘土の層あり。堀かと思われたが未確認。E区遺構の平板実測とレベリング。

5月18日 A区SX01・SE01の掘り下げ。B区東壁・南壁面を地山まで掘り下げ。C区東壁層序図実測。D区平板実測。

5月21日 SE01から現代の陶磁器出土。SX01掘り下げ。SF01から丸釘をはじめとする鉄製品出土。D区西側より柱穴検出。E区北・南壁の層序図作成。柱穴の掘り下げと平板実測。

5月22日 A区SE01掘り下げと層序図の実測。SX01掘り下げ、一部床面まで掘り下げると湧水になる。柱穴は面的に5cmだけ掘り下げる。E区柱穴のレベリング。

5月23日 A区5cm掘り下げた段階の覆土注記を行う。SX01は溝であり箱薬研堀の形態であることを確認。SX03掘り下げ。B区地山まで掘り下げ。北側よりSX04検出。D区層序実測と注記作業。E区全体写真を撮影して試掘終了。

5月24日 A区柱穴の注記と掘り下げ。B区層序実測。C区地山面の精査。D区層序図の注記。写真撮影。平面実測とレベリングを終了し、試掘を終了。E区玉石の埋め戻し。

5月24日 A区柱穴掘り下げ。B区層序図注記、精査、写真撮影。平面実測とレベリング。C

区柱穴掘り下げ、精査、写真撮影、層序図注記、平面実測とレベリング。D・E区埋め戻し作業。

5月28日 A区平面実測。

5月29日 A区の遺構を平面実測とレベリング。SX01は湧水が激しいため水掻きをした後に実測。試掘終了。

なお、整理作業は本年度すべての発掘・試掘調査が終了した11月から平成14年2月に行った。

(工藤清泰)

III 検出遺構

今回の調査区及び調査面積は、A区54㎡、B区9㎡、C区10㎡、D区6㎡、E区12㎡の合計91㎡となった。これは、敷地面積約3,000㎡の3%程度の試掘調査となっている。検出遺構は、A区からは井戸跡(SE01)、溝跡(SX01・検出時性格不明遺構)、性格不明遺構(SX02・SX03)、焼土遺構(SF01)。B区からは性格不明遺構(SX04)、D区からは溝跡(SD02)を検出した。なお、C区、E区については、柱穴のみの検出となったため、遺構名・番号を付記していない。A区～E区までの柱穴については、建物の有無及び規模について検討を試みたが、建物に関する柱穴列は確認できなかった。出土遺物は、土師器、須恵器を中心にテンバコ4箱程度を数えた。

1. A区(図3・写真1-(1)、(2)、(3))

敷地の南西部、旧農協事務所北側の碎石敷きとなっている建物跡付近を調査した。当初は、建物跡を避けて調査区を設定したが、表土除去を行うと、コンクリートのタタキ層や基礎の栗石層が検出され、建物に付随する駐車場的な部分の存在が判明した。この建物による攪乱は、表土から50cmまでの深さに及んでいた。一部調査区の南側では、トイレ等の配管工事と思われる塩化ビニール管の埋設してある遺構も検出したが、近年のものであるため平面図では範囲を省いた。地山からは柱穴が検出されたものの、時期・建物規模等については不明である。

また、かなり広い範囲で農協関係施設の建設以前の攪乱と思われる焼土を検出した。この焼土に時期を同じくして、南東部で側溝と思われるコンクリート施設と土管を検出した。遺構及び出土した遺物は、近代以降のものばかりであったことから、この焼土層や施設も尋常小学校以降の何らかの施設の立て替え等に際し、木材等を現地で焼却処分したものかもしれない。なお、隣接する敷地との比高差からは、本用地が部分的に数10cm盛土してある模様である。

SE01 A区の南半部から検出された直径220cmの円形の掘り込みである。掘り方が人力ではなく機械的な切り口であったため、当初から現代の井戸の可能性を考慮して調査を進めた。覆土は、確認した段階から砂質土(いわゆるシラス)であり、地山面から80cm掘り下げた部分から

現代磁器の花瓶の破片及びガラスピンの底部が出土した。出土遺物の時代及び井戸全体の埋土が単層であり一時期の埋め戻しであること。井戸内の部分的な攪乱も見られないことから井戸の年代を昭和期と考え、掘下げを途中で終了した。このため、深さについては明確になっていない。

なお、後日近隣の方から、以前、浪岡農協でこの場所に育苗棟を建設し、付属施設として鑿井したことがあったとご教示いただいた。

SX01 A区の北端で検出したもので、平安時代の溝跡と考えられる。検出当初は性格不明遺構と分類していた。形態は、側面が底面に向かってせばまる、いわゆる箱薬研堀状である。確認した上幅が約220cm、底部幅が約140cm、確認面からの深さが約154cmとなる。覆土中から土師器・須恵器・把手付土器を出土しており、底部床面直上からも土師器が出土している。

SF01 A区の北側SX02の覆土上に検出された焼土遺構である。当初、平安時代又は中世のカマドの可能性も考えられたが、焼土床面直下の土中から近現代の丸釘が検出されたことから、前出した近現代の焼土層に伴う遺構と思われる。穴を掘って木材等を焼却した跡であろうと推察した。

SX02 A区の北東側で検出した遺構で、西側の端部でSX01に合流する溝跡状の形を呈している。検出面で幅約120cm、下幅で約90cm、深さ約40cmであった。SX01との新旧関係は確認できなかった。出土遺物は土師器・須恵器のみであり、平安時代の遺構と考えられる。SX03は、SX02と平行して北側に位置する遺構で規模・時代ともに明確となる出土遺物はない。しかし、SX02よりも古い遺構であることが土層から確認されたため、同時期以前の遺構であると思われる。

2. B区 (図4・写真2-(1)、(2))

県道浪岡黒石線に隣接した敷地南東部に調査区を設定した。出入り口付近であることから攪乱が少ないのではないかと推察し、深さ30cmほどでタタキ状の硬化面にSX04を検出したが、現代のものであることが判明。さらに掘り下げたところ、地山直上で土師器・須恵器と共にビニール等が出土したため、攪乱も重ねられていることが判明した。

SX04 B区の南側で検出した遺構である。遺構は攪乱層上層から確認できた。浪岡農協時代に整備された堀状の施設の基礎と思われる。覆土中からは、軌立貝の殻やビニール等が検出され、掘り方床面からは木材(現代の丸釘の打たれた)が出土している。遺構は、西側に更に伸びているが、調査区外であるため規模等は不明である。

3. C区 (図4・写真2-(3), (4))

調査対象地のほぼ中央、旧尋常小学校舎の一部を改修したと思われる倉庫沿いにトレンチを設定した。これは、建物の建築に際し、地下への影響を調査する目的である。調査の結果、攪乱等の影響は地下50cm程度にまで達し、地山直上でかろうじて数cmの層が残るのみである。

トレンチ北側で、現場打ちのコンクリート側溝と思われる桶状の施設を検出した。これは、倉庫の一部(旧施設の改築部分)の雨落としの側溝と思われる。この近辺からは、現代の陶磁器(徳利や出前のどんぶり等)が出土しているため、近年倉庫の拡張等を行ったことが推察された。地山からは柱穴を検出したが、時期等については不明である。

4. D区 (図5・写真3-(1), (2), (3))

調査区の東側で土壘状の盛り上がり確認できる部分である。川原館の伝承から、周辺部に残る土壘状の盛り上がりは、中世城館の土壘が残存している可能性もあるものとして調査をした。結果、盛り上がった部分は周囲の耕作のときに用いた農事用ビニールやいわゆるゴミの類であり、この層を除去すると平坦面となった。平坦面から、さらに50cm程度の深さからも板ガラスの破片が出土したことから、深部まで攪乱されていることが判明した。地山からは柱穴も検出されたが、時期等については不明である。

SD02 D区で検出した溝跡である。地山までの掘り込みはなく、平面実測図にはあらわれていない。セクション図では暗褐色土中の掘り込みとして北側で検出されているが、時代・規模等については明確となっていない。

5. E区 (図4・写真4-(1))

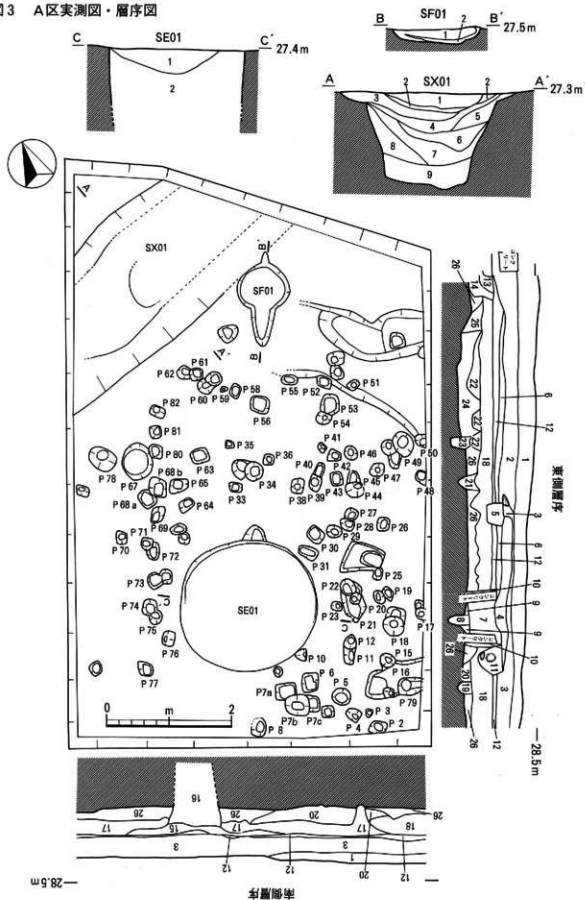
調査区北側については、攪乱の可能性が少なくと推測して初穀倉庫内を調査した。表層は初穀と黒色土であったが、すぐに碎石と栗石層になり、一部地山まで栗石基礎が入り込むことにより、地山自体も削平されていることが判明した。最も保存状態の良好と思われた箇所ではあるが攪乱されたことになる。攪乱層直下からの掘り込みや柱穴が見られたが、時期については不明である。

川原館遺跡注記

A区 南側・東側層序注記 (図3対応)

1. 碎石・ダスト舗装。φ0～40mm程度の切石碎石と一部割栗石を含む。農協倉庫後の整地に伴うもの。
2. 塗コンクリート層。下部に栗石(15～20cm)を敷く。農協倉庫のタタキと思われる(厚さ約10cmのコンクリート層)。
3. 黒褐色土(7.5YR3/2)を基本とした攪乱層。にぶい褐色粘質土(7.5YR5/4)を部分的に3～5cmの層状に含む。また、タイル、五寸釘、炭化物粒、にぶい黄褐色砂(10YR4/3)を部分的に多量に含む。農協倉庫タタキ打設時の整地に伴うものと思われる。しまりが強い。転圧によると思われる。

图3 A区实测图·层序



4. シラス層。浅黄色(2.5YR7/4)の単層。倉庫タキ打設時の整地に伴うもの。
5. タタキの先端部の基礎掘り込み。玉砂利とシラスを主に転圧している。炭化物粒が混入する。
6. 褐色粘質土(7.5YR4/6)と暗赤灰色粘質土(2.5YR3/1)との5:5の混層。(にぶい褐色粘質土(7.5YR5/4)が火を受けたものかもしれない)。極小～小塊状の炭化物を層状に20%。
7. 赤黒色土(2.5YR1.7/1)に赤褐色焼土(2.5YR4/6)を極小粒状に3%、褐色粘質土(7.5YR4/6)を極小粒状に5%、極小粒～小粒状の炭化物を5%、にぶい黄褐色砂(10YR4/3)を10%含む。しまり強い。倉庫以前に排水等の施設があったものと思われる。ちなみにコンクリートはこの層序図が西端となる。
8. 黒褐色土(7.5YR2/2)ににぶい赤褐色焼土(2.5YR4/6)を極小粒状に3%含む。しまりあり。(柱立)
9. 黒褐色粘質土(7.5YR2/2)ににぶい褐色粘質土(7.5YR5/4)を小塊状に30%含む。しまりあり。
10. 黒色土(7.5YR1.7/1)ににぶい褐色粘質土(7.5YR5/4)を小粒状に1%含む。しまりあり。
11. 黒褐色土(10YR2/2)ににぶい褐色粘質土(7.5YR5/4)を極小粒～大塊状に5%、極小粒～中粒状の炭化物を2%含む。土管の下には栗石で基礎とし土管周囲の土は焼土となり、にぶい赤褐色(5YR4/4)を呈する。
12. 黒褐色土(10YR2/2)に極小粒状の灰白色浮石(パミス)(2.5Y8/1)を1%、にぶい褐色粘質土を極小粒を1%含む。しまり強い。
13. 黒色土(7.5YR2/1)に黒色灰(7.5YR1.7/1)を20%、灰白色パミス(2.5Y8/1)、にぶい褐色粘質土(7.5YR5/4)、にぶい赤褐色土(5YR4/4)をそれぞれ極小粒状に3%含む。上部しまり強い。倉庫建物の布基礎の掘り方と思われる。
14. 黒褐色土(10YR2/2)に灰白色パミス(2.5Y8/1)、にぶい褐色粘質土(7.5YR5/4)を小粒に5%、にぶい赤褐色土(5YR4/4)を極小粒に1%含む。13層と同様に倉庫建物の基礎掘り込みか。
15. 黒褐色土(7.5YR2/2)ににぶい褐色粘質土(7.5YR5/4)を極小粒状に2%、明褐色砂質土(10YR6/6)を極小～小粒状に5%含む。しまり強い。
16. 褐色砂質土(10YR4/4)と黒色土(10YR2/1)との6:4の混層。混入は層状に何層にもわたって行われている(埋め戻し土)。しまりあり。
17. 黒色土(7.5YR2/1)に暗褐色粘質土(10YR3/3)を中～大粒状に1%、にぶい赤褐色土(5YR4/4)を極小粒状に1%、炭化物を極小～小粒状に2%含む。しまり強い。
18. 黒色土(7.5YR2/1)に暗褐色粘質土(10YR3/3)を極小粒～大粒状に7%、にぶい赤褐色土(5YR4/4)を極小粒に3%、灰白色パミス(2.5Y8/1)を極小粒に3%、極小粒状の炭化物を2%含む。しまり強い。
19. 黒褐色土(7.5YR3/2)と褐色砂質土(10YR4/6)との5:5の混層。
20. 黒土(7.5YR1.7/1)に灰黄褐色粘質土(10YR4/2)を極小～大塊状に15%、にぶい赤褐色土(5YR4/4)を極小粒状に2%、褐色砂質土(10YR4/6)を極小粒状に10%含む。しまり強い。
21. 黒色土(7.5YR2/1)に褐色砂質土(7.5YR4/4)を極小粒状に30%含む。しまりゆるい。
22. 黒褐色土(7.5YR2/2)ににぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)を極小粒状に30%、にぶい赤褐色土(5YR4/4)を極小粒状に5%含む。しまり強い。
23. 黒褐色土(7.5YR3/2)に赤褐色土(2.5YR4/6)を極小粒状に15%、にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)を極小粒～大塊状に5%含む。しまりあり。
24. 黒褐色土(7.5YR2/2)に灰黄褐色シルト質土(10YR4/2)を極小粒～大塊状に15%、赤褐色土(2.5YR4/6)を極小～小粒状に3%、炭化物を極小～小粒状に1%含む。しまりややあり。
25. 黒褐色土(7.5YR2/2)に黒褐色灰(10YR2/2)を10%(大粒～一部厚板状)、灰黄褐色シルト質土(10YR4/2)を極小粒に3%、赤褐色土(2.5YR4/6)と炭化物を極小粒状に1%含む。しまりややあり。
26. 黒色土(10YR1.7/1)と地山(黄褐色砂質土(10YR5/6))との漸層。上半は黒色土となるが、地山に近くなるにつれ黄褐色を呈す。

A区SE01 北壁層序 注記(図3対応)

1. 黒褐色土(10YR2/3)に赤褐色焼土(5YR4/8)を小粒状に1%、灰白色パミス(10YR8/2)を極小～小粒状に1%含む混層。しまりなし。
2. にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3)に黒褐色土(10YR2/3)を大～極大粒状に3%、黄褐色砂質土(10YR5/6)を中～極大粒状に2%、2cm～10cmまでの礫を5%含む混層。しまりなし。

SF01 東壁層序 注記(図3対応)

1. 黒色土(10YR2/1)ににぶい黄褐色土(10YR5/3)(粘性有り)を小～極大粒状に7%、暗赤褐色焼土(5YR3/6)を極小～小粒状に2%、褐色砂質土(10YR4/6)を小～大粒状に1%含む混層。炭化物有り。灰白色パミス(7.5Y8/2)を極小～中粒状に1%含む。
2. 暗赤褐色焼土(5YR3/6)。

SX01 西壁層序 注記(図3対応)

1. 黒褐色土(10YR2/2)に灰黄褐色粘土(10YR4/2)を極小～中粒状に2%、灰白色パミス(2.5Y7/1)を極小～小粒状に1%、黒色灰(5Y2/1)を全体に5%、明赤褐色焼土(5YR5/8)を極小粒状に1%、黄褐色

- 砂質土(10YR5/6)を極小～中粒状に1%、炭化物を極小～中粒状に3%含む混層。しまりあり。
2. 黒褐色土(10YR2/2)に黒色灰(5Y2/1)を40%、明赤褐色焼土(5YR6/5)を小～中粒状に3%、炭化物を極小～大粒状に3%、黄褐色砂質土(10YR5/6)を極小～小粒状に1%含む混層。
 3. 黒褐色土(10YR2/2)に黒色灰(5Y2/1)を小～中粒状に3%、黄褐色砂質土(10YR5/6)を極小～中粒状に3%、灰黄褐色粘土(10YR4/2)を極小～中粒状に1%、灰白色バミス(2.5Y7/1)を極小～小粒状に1%、明赤褐色焼土(5YR5/8)を極小～小粒状に1%含む混層。
 4. 黒褐色土(10YR2/2)に黄褐色砂質土(10YR5/6)を極小～大塊状に15%、黒色灰(5Y2/1)を10%、灰黄褐色粘土(10YR4/2)を大粒状に3%、灰白色バミス(2.5Y7/1)を極小粒状に1%含む混層。しまりやや弱い。
 5. 黒褐色土(10YR2/2)に黒色灰(5Y2/1)を小粒状に1%、灰白色バミス(2.5Y7/1)を極小粒状に1%、黄褐色砂質土(10YR5/6)を極小～中粒状に3%、明赤褐色焼土(5YR5/8)を極小粒状に1%含む混層。
 6. 黒褐色土(10YR2/2)に黒色灰(5Y2/1)を極小～中粒状に5%、黄褐色砂質土(10YR5/6)を極小～大粒状に1%、明赤褐色焼土(5YR5/8)を極小～小粒状に1%、灰黄褐色粘土(10YR4/2)を極小～小粒状に1%、炭化物を極小～中粒状に1%含む混層。
 7. 黒褐色土(10YR2/2)に黄褐色砂質土(10YR5/6)を極小～大粒状に5%、黒色灰(5Y2/1)を小粒状に1%、灰白色バミス(2.5Y7/1)を極小粒状に1%、明赤褐色焼土(5YR5/8)を極小～小粒状に1%含む混層。
 8. 黒褐色土(10YR2/2)に黄褐色砂質土(10YR5/6)を極小～大塊状に25%、灰白色バミス(2.5Y7/1)を極小～中粒状に3%、炭化物を極小～小粒状に1%、明赤褐色焼土(5YR5/8)を極小～小粒状に1%含む混層。
 9. 黒褐色土(10YR2/2)に黄褐色砂質土(10YR5/6)を極小～大塊状に10%、明赤褐色焼土(5YR5/8)を極小粒状に1%、灰白色バミス(2.5Y7/1)を極小粒状に1%含む混層。粘性有り。

A区柱穴注記表 (図3対応)

No.	大きさ (cm)			土 色 注 記 等	備 考
	長径	短径	深さ		
1	14	12.5	—	黒褐色土(10YR2/2)に明赤褐色焼土(2.5YR5/6)の小粒を3%含む。しまりあり。	角
2	21.0	18.5	15.2	黒色土(7.5YR2/1)に橙色砂質土(2.5YR6/6)を極小粒～小粒状に15%、明赤褐色焼土(2.5YR5/6)を極小粒～小粒に2%、浅黄橙色粘土(10YR8/4)を極小粒～小粒状に1%、炭化物の小粒を1%含む。しまりゆるい。	角
3	13.0	13.0	6.7	黒色土(10YR1.7/1)に黄褐色砂質土(10YR5/6)を極小粒～中粒に10%、浅黄橙色粘土(10YR8/4)を極小～大粒に15%、明赤褐色焼土(2.5YR5/6)を極小粒に1%、炭化物を極小粒に1%含む。しまりあり。	
4	(13.0) 22.0	(13.0) 17.0	14.4	柱痕は暗赤褐色土(5YR3/2)に褐色砂質土(7.5YR4/4)の極小粒を3%含む。柱痕周囲には炭化物が回る。周囲は黒褐色土(10YR3/1)に黄褐色砂質土(10YR5/6)の極小～小粒を20%含む。しまりあり。	柱痕有(丸) 振り方角
5	24.0	24.0	15.0	黒褐色土(10YR3/1)に暗赤褐色土(5YR3/2)の小粒を3%、浅黄褐色粘土(10YR8/4)の極小粒を5%、炭化物の極小粒を3%、黄褐色砂質土(10YR5/6)の中粒を1%含む。しまりあり。	隅丸方形
6	30.0	26.0	7.2	黒色土(7.5YR1.7/1)に浅黄褐色粘土(10YR8/4)を極小～大粒状に15%、炭化物の極小粒を2%含む。しまりあり。	
7-a	29.0	23.0	5.7	黒色土(7.5YR1.7/1)に浅黄褐色粘土(10YR8/4)の極小粒～小粒を3%、炭化物の極小粒を2%、赤色焼土(10R4/6)の極小粒を1%含む。しまり強い。	四角形
7-b	(19.0) 45.0	(17.0) 27.0	36.0	黒色土(7.5YR1.7/1)に浅黄褐色粘土(10YR8/4)の極小～小粒を2%、炭化物の極小～中粒を3%、黄褐色砂質土(10YR5/6)の極小～大粒を2%含む。柱痕は暗赤褐色土(5YR3/2)が主となる。	柱痕?(丸)
7-c	24.0	20.0	12.1	暗赤褐色土(5YR3/2)に黒色土(7.5YR1.7/1)が小～中粒状に20%混入する。黄褐色砂質土(10YR5/6)の中粒を5%、炭化物の小粒を2%含む。しまりあり。	

8	23.0	20.0	16.4	暗赤褐色土(5YR3/2)が主となり、黒褐色土(7.5YR2/2)と6:4の混層となる。橙色砂質土(5YR6/6)の極小粒を3%、炭化物の極小粒を3%含む。しまり弱い。	
9	28.0	26.0		にぶい黄橙色砂(シラス)(10YR6/3)。	井戸より新
10	20.0	17.5	13.4	黒褐色土(10YR2/2)に暗赤褐色土(5YR3/2)を10%混入。暗赤褐色焼土(2.5YR5/6)の小～中粒を15%、炭化物の小粒を3%含む。しまりあり。	
11	22.0	23.0	18.6	黒褐色土(10YR2/2)に赤褐色土(5YR4/8)を5%、灰黄褐色粘土(10YR4/2)を小～大粒状に2%、明赤褐色焼土(2.5YR5/6)を極小粒状に1%、炭化物を1%含む混層。	
12	22.0	19.0	9.7	黒褐色土(7.5YR3/2)に黒褐色土(10YR2/2)と明褐色土(7.5YR5/6)を含む混層。炭化物あり。	
13	欠番				
14	欠番				
15	18.0	18.0	22.1	黒褐色土(10YR2/2)に暗赤褐色土(5YR3/6)を中～大粒状に5%、明赤褐色焼土(2.5YR5/6)を極小粒状に2%、明褐色土(7.5YR5/6)を小～大粒状に2%含む混層。炭化物あり。	
16	75.0	45.0	10.2	層序図にあり。	
17	30.0	20.0	30.0	層序図にあり。	
18	44.0	30.0	35.1	黒褐色土(10YR2/2)に暗赤褐色土(5YR3/6)を中央に20%、明褐色土(7.5YR5/6)を小～中粒状に3%、明赤褐色焼土(2.5YR5/6)を中粒状に2%含む混層。炭化物あり。	
19	15.0	20.0	29.0	暗赤褐色土(5YR3/6)に黒褐色土(10YR2/2)を10%、灰黄褐色粘土(10YR4/2)を2%含む混層。	
20	18.0	20.0	11.8	黒褐色土(10YR2/2)に暗赤褐色土(5YR3/6)を中央に20%、灰黄褐色粘土(10YR4/2)を中～極大粒状に3%含む混層。炭化物あり。	
21	30.0	22.0	14.3	黒褐色土(10YR2/2)に暗赤褐色土(5YR3/6)を20%、灰黄褐色粘土(10YR4/2)を中～極大粒状に3%含む混層。炭化物あり。	
22	30.0	35.0	16.5	黒褐色土(10YR2/2)に黄褐色砂質土(10YR5/6)を極小～大粒状に5%、灰黄褐色粘土(10YR4/2)を中粒状に3%、明赤褐色焼土(2.5YR5/6)を小粒状に2%含む混層。炭化物あり。	
23	16.0	14.0	10.0	不明。	
24	22.0	18.0		不明。	
25	20.0	16.0	17.4	黒褐色土(10YR2/2)に暗赤褐色土(5YR3/6)を中央に20%、明褐色土(7.5YR5/6)を小～中粒状に3%、明赤褐色焼土(2.5YR5/6)を中粒状に2%含む混層。	8cm柱板が炭化物で残る。
26	20.0	18.0	17.6	柱穴No18と同じ。	
27	18.0	18.0	7.9	柱穴No21と同じ。	
28	20.0	18.0	10.6	柱穴No20と同じ。	
29	25.0	15.0	11.1	柱穴No18と同じ。	
30	26.0	21.0	24.0	柱穴No20と同じ。	
31	31.0	16.0	13.1	黒褐色土(10YR2/2)に灰黄褐色粘土(10YR4/2)を小～中粒状に5%、黄褐色砂質土(10YR5/6)を小～中粒状に5%、明赤褐色焼土(2.5YR5/6)を小粒状に1%含む混層。炭化物あり。しまりあり。	
32	37.0	-	12.6	柱穴No31と同じ。	
33	20.0	15.0	29.6	柱穴No18と同じ。	
34	30.0	29.0	20.5	柱穴No31と同じ。	
35	13.0	10.0	8.6	柱穴No18と同じ。	
36	17.0	15.0	8.0	柱穴No18と同じ。	
37	欠番				
38	23.0	19.0	19.8	柱穴No18と同じ。	

39	24.0	17.0	18.2	柱穴No20と同じ。
40	22.0	14.0	6.0	柱穴No31と同じ。
41	14.0	11.0	8.3	柱穴No20と同じ。
42	19.0	16.0	7.9	柱穴No31と同じ。
43	21.0	18.0	4.8	覆土なし。
44	28.0	23.0	30.6	柱穴No20と同じ。
45	19.0	16.0	13.9	柱穴No18と同じ。
46	23.0	22.0	8.4	柱穴No20と同じ。
47	20.0	19.0	21.0	柱穴No18と同じ。
48	19.0	—	39.2	層序図にあり。
49	40.0	30.0	33.9	柱穴No18と同じ。
50	20.0	—	23.9	層序図にあり。
51	33.0	29.0	11.7	黒褐色土(10YR2/2)に灰黄褐色粘土(10YR4/2)を小～中粒状に5%、黄褐色砂質土(10YR5/6)を小～中粒状に5%、黒褐色灰(2.5Y3/1)を2%、明赤褐色焼土(2.5YR5/6)を小粒状に1%含む混層。炭化物あり。しまりあり。
52	26.0	16.0	12.8	柱穴No51と同じ。
53	33.0	27.0	11.7	柱穴No31と同じ。
54	24.0	21.0	22.9	柱穴No18と同じ。
55	26.0	14.0	10.5	柱穴No20と同じ。
56	28.0	27.0	15.4	柱穴No31と同じ。
57	29.0	25.0	22.0	柱穴No20と同じ。
58	20.0	15.0	4.4	覆土なし。
59	12.0	7.0	5.4	柱穴No20と同じ。
60	21.0	20.0	16.2	柱穴No31と同じ。
61	21.0	20.0	16.2	暗赤褐色土(5YR3/6)に黄褐色砂質土(10YR5/6)を小～中粒状に3%、明赤褐色焼土(2.5YR5/6)を小粒状に1%含む混層。炭化物あり。しまりあり。
62	21.0	19.0	6.6	黒褐色土(10YR3/2)に灰黄褐色粘土(10YR4/2)を小～大粒状に5%、黄褐色砂質土(10YR5/6)を中粒状に3%、黒褐色灰(2.5Y3/1)を3%含む混層。しまり強い。炭化物あり。
63	30.0	22.0	6.2	不明
64	23.0	15.0	10.6	柱穴No18と同じ。
65	30.0	21.0	29.4	柱穴No20と同じ。
66	欠番			
67	60.0	47.0	5.6	覆土なし。
68	30.0 28.0	20.0 23.0	5.9 29.0	A：柱穴No20と同じ。 B：黒褐色土(10YR2/2)に黄褐色砂質土(10YR5/6)を小～中粒状に7%、明赤褐色焼土(2.5YR5/6)を小粒状に1%、含む混層。炭化物あり。しまりあり。
69	25.0	19.0	7.5	柱穴No18と同じ。
70	18.0	16.0	23.0	柱穴No20と同じ。
71	19.0	16.0	16.3	柱穴No18と同じ。
72	27.0	20.0	6.9	柱穴No68Bと同じ。
73	28.0	23.0	6.9	柱穴No20と同じ。
74	25.0	22.0	8.6	覆土なし。
75	24.0	20.0	8.5	覆土なし。
76	23.0	19.0	3.5	柱穴No20と同じ。
77	22.0	19.0	5.5	覆土なし。

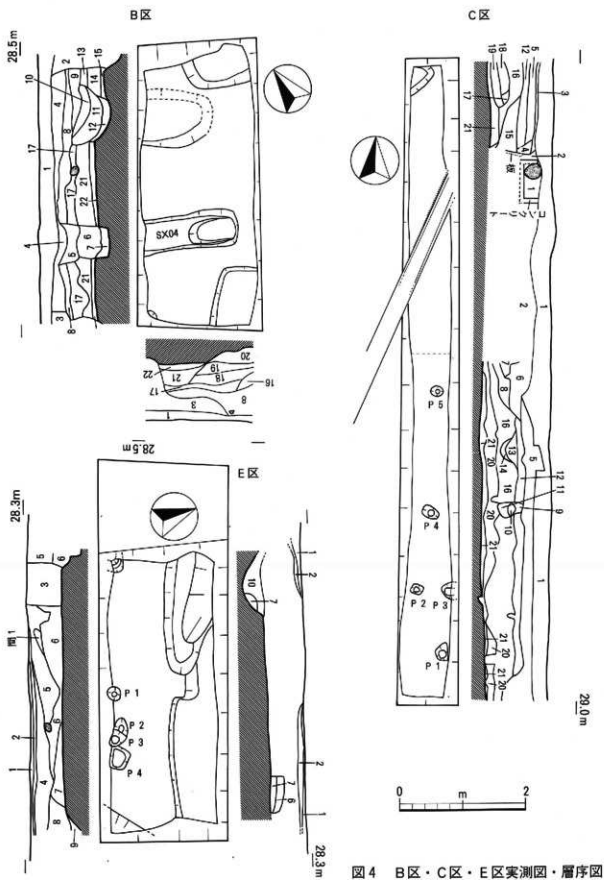
78	19.0	18.0	3.9	暗赤褐色土(5YR3/6)に明赤褐色焼土(2.5YR5/6)を20%、黄褐色灰(2.5Y4/1)と黒色灰(2.5Y2/1)が互層に入り込む混層。
79	40.0	28.0	12.1	層序図にあり。

B区 西側・南側層序 注記(図4対応)

1. 塗装面。アスファルト2cm。シラス+0～40mmの砕石。
2. 黒色土(7.5YR2/1)に明褐色粘性土(7.5YR5/6)を極小粒～小塊状に25%、明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒～大塊状に10%、黒色灰(10YR1.7/1)の小粒を1%、灰白色バミス(10YR8/1)を極小粒状に1%含む。ビニール入る。攪乱。
3. 黒褐色土(10YR2/2)に明黄褐色粘性土(7.5YR5/6)を極小～中粒状に15%、明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒～中粒状に5%含む。木片・小石が混入する。
4. 黒色土(7.5YR3/1)と明黄褐色砂質土(10YR6/6)。小石等が極厚い層状に相互に重なる。整地によるもので、ビニール袋が混入する。
5. 黒褐色土(10YR2/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒～大粒状に7%、明黄褐色粘性土(7.5YR5/6)を極小粒～小粒状に5%、赤褐色土(2.5YR4/6)を極小粒状に3%、黒褐色粘土(10YR3/2)を小粒状に1%含む。ホタテ貝、ビニール袋が混入する。
6. 黒褐色土(10YR2/2)に赤褐色粘土(7.5YR5/4)を中～大粒状に15%、明黄褐色砂質土(10YR6/6)を中～大粒状に2%含む。板材が埋められていた層。
7. 明黄褐色砂質土(10YR6/6)に黒褐色土(10YR2/2)を極小～大粒が5%含まれる。
8. 黒褐色土(7.5YR2/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒状に1%、赤褐色土(2.5Y4/6)を極小粒状に1%、灰白色バミス(10YR8/1)を極小粒状に1%含む。しまり強い。
9. 黒褐色土(7.5YR2/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒～大粒状に5%、明黄褐色焼土(2.5YR5/8)を極小粒状に5%、赤褐色土(2.5YR4/6)を極小粒状に5%、極小粒の炭化物を3%、灰白色バミス(10YR8/1)を極小粒状に3%含む。しまり強い。
10. 黒褐色土(10YR2/3)に明黄褐色土(2.5YR5/8)を極小粒状に3%、赤褐色土(2.5YR4/6)を極小粒～中粒状に30%、極小粒の炭化物を3%含む。層全体に粘性が強く、固くしまっている。
11. 黒色土(N1.5/0)に赤褐色粘土(10YR5/4)を厚い板状に20%、明赤褐色焼土(2.5YR5/8)を小～中粒状に2%含む。土師器・須恵器の出土が多量にあった。
12. 黒色土(10YR1.7/1)に明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小～大粒状に5%、赤褐色土(2.5YR4/6)を極小～中粒状に5%含む。
13. 黒褐色土(7.5YR2/2)に灰白色バミス(10YR8/1)を極小粒状に3%、赤褐色土(2.5YR4/6)を極小粒状に1%含む。
14. 黒褐色土(7.5YR2/2)に黒色土(10YR1.7/1)を小～大粒状に15%、赤褐色土(2.5YR5/8)を極小～大粒状に15%、明赤褐色土(2.5YR5/8)を極小～小粒状に5%含む。
15. 黒褐色土(7.5YR3/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒状に1%含む。
16. 赤褐色土(2.5YR4/6)に黒色土(N1.5/0)が薄い板状に5%、明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小～小粒に3%含む。
17. 黒色土(7.5YR1.7/1)に赤褐色粘性土(10YR5/4)を極小粒状に1%、明赤褐色土(2.5YR5/8)を極小粒状に1%、灰白色バミス(10YR8/1)を極小粒状に1%、明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒状に1%含む。粘性有り。
18. 黒色土(7.5YR1.7/1)に黒褐色土(7.5YR3/2)状に30%、明赤褐色土(2.5YR5/8)を極小粒状に1%含む。
19. 黒色土(7.5YR1.7/1)に赤褐色粘土(10YR5/4)を大塊状に3%、灰白色バミス(10YR8/1)を極小粒状に1%含む混層。
20. 赤褐色土(2.5YR4/6)に明赤褐色土(2.5YR5/8)を極小粒状に1%、極小～中粒の炭化物を3%、明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒状に1%、灰白色バミス(10YR8/1)を極小粒状に1%含む。
21. 黒色土(7.5YR1.7/1)に明赤褐色土(2.5YR5/8)を極小粒状に1%、灰白色バミス(10YR8/1)を極小粒状に1%、明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒～小粒状に3%、赤褐色土(2.5YR4/6)を中粒状に1%含む。
22. 黒褐色土(10YR2/3)に明赤褐色土(2.5YR5/8)を極小粒状に微量、灰白色バミス(10YR8/1)を極小粒状に1%含む。赤褐色土(2.5YR4/6)を中粒状に5%含む。

C区 東側層序 注記(図4対応)

1. 黒褐色土(10YR2/2)と灰黄褐色シラス(10YR6/2)の混層。建物建設時の整地となる(表土)。切り砕石やビニール・現代のラーメン井等を含む。
2. 暗褐色粘質土(10YR3/3)に赤褐色焼土(5YR6/6)を極小粒状に5%含む。しまり強い。コンクリート舗装? 打設時の裏返めと思われる。



3. 灰黄褐色砂(10YR4/2)の単層。
4. 黒褐色土(7.5YR3/1)に灰黄褐色粘性土(10YR5/2)を極小～中粒状に5%、橙色焼土(5YR6/8)を極小粒状に1%含む。しまり強い。
5. 黒褐色土(10YR3/2)に玉石を(砕石とともに)多量に含む。南側底面では ϕ 20cmを超える栗石が層底面に見られる。
6. 明褐色粘性土(7.5YR5/8)の小塊～大塊のブロックと黒褐色土(7.5YR2/2)との6:4の混層。灰黄褐色粘性土(10YR5/2)を小粒状に1%、灰白色バミス(10YR8/1)を極小粒状に1%含む。しまり強い。
7. 黒褐色土(10YR2/2)にぶい黄褐色粘性土(5YR4/4)を極小～小粒状に5%、灰黄褐色粘性土(10YR5/2)を極小粒～大塊状に3%、極小粒状の炭化物を1%含む。
8. 黒褐色土(10YR2/2)にぶい赤褐色粘性土(5YR4/4)を極小～小粒状に3%、黄褐色粘性土(10YR5/2)を極小～小粒状に1%、炭化物の極小粒を1%含む。
9. 黒褐色土(7.5YR3/1)に黒褐色土(10YR3/1)状に20%混入。明黄褐色砂質土(10YR6/2)を極小粒状に3%、灰白色バミス(10YR8/1)を極小粒状に3%含む。
10. 黒色土(10YR3/1)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小～小粒状に1%、灰白色バミス(10YR8/1)を極小粒状に1%含む。
11. 黒色土(10YR3/2)に黒褐色土(7.5YR3/1)を小粒状に1%、灰黄褐色粘性土(10YR5/2)を極小～小粒状に3%、炭化物を極小粒状に1%含む。
12. 黒褐色土(10YR3/1)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に1%、灰白色バミス(10YR8/1)を極小粒状に3%含む。ぶい赤褐色粘性土(5YR4/4)を極小～小粒状に1%含む。
13. 黒褐色土(7.5YR2/2)に灰黄褐色粘性土(10YR5/2)を極小粒状に5%、ぶい赤褐色粘性土(5YR4/4)を極小～小粒状に3%含む。層中に土師器器片が大量に含まれるが、攪乱層と思われる。
14. 黒色土(10YR1.7/1)灰が混ざるため、灰層である。ぶい赤褐色粘性土(5YR4/4)を極小～中粒状に3%、炭化物を極小粒状に3%含む。
15. 黒褐色土(7.5YR3/2)に黒色灰(10YR1.7/1)が30%混入する。灰黄褐色粘性土(10YR5/2)を極小～中粒状に10%、ぶい赤褐色粘性土(5YR4/4)を極小～中粒状に3%、灰白色バミス(10YR8/1)を極小粒状に1%、炭化物を極小粒状に1%含む。
16. 黒褐色土(7.5YR2/2)に灰黄褐色粘性土(10YR5/2)を極小粒状に7%、ぶい赤褐色粘性土(5YR4/4)を極小～大粒状に5%、灰白色バミス(10YR8/1)を極小粒状に1%、炭化物を極小粒状に1%含む。
17. 黒褐色土(7.5YR2/2)に灰黄褐色粘性土(10YR5/2)を極小粒状に3%、ぶい赤褐色粘性土(5YR4/4)を極小粒状に2%、灰白色バミス(10YR8/1)を極小粒状に1%含む。
18. 黒褐色土(7.5YR2/2)と灰黄褐色粘性土(10YR5/2)を極小粒～大塊との5:5の混層。ぶい赤褐色粘性土(5YR4/4)を極小粒状に1%、灰白色バミス(10YR8/1)を極小粒状に1%含む。
19. 灰黄褐色粘性土(10YR5/2)に黒色灰(10YR1.7/1)を中板状に15%含む。ぶい赤褐色粘性土(5YR4/4)を極小粒と、灰白色バミス(10YR8/1)を極小粒状にそれぞれ1%含む。
20. 黒色土(7.5YR1.7/1)に灰黄褐色粘性土(10YR5/2)を極小粒と灰白色バミス(10YR8/1)を極小粒状に2者合わせて1%含む。一部植物の根の痕跡に鉄分が凝集し、焼土状になっている。
21. 暗褐色土(10YR3/4)に明黄褐色砂質土(10YR6/8、地山)を極小粒状に3%、灰白色バミス(10YR8/1)を極小粒状に1%含む。地山との漸移層となる。

C区柱穴記表(図4対応)

No.	大きさ (cm)			土 色 注 記 等	備 考
	長径	短径	深さ		
1	24.0	17.0	13.7	黒褐色土(10YR2/2)にぶい黄褐色粘土(10YR4/3)を中～大粒状に5%、黄灰色灰(2.5Y4/1)を10%含む混層。もろい。	
2	16.0	14.0	15.7	黒褐色土(10YR2/3)にぶい黄褐色粘土(10YR4/3)を小～大粒状に2%、黄褐色土(10YR5/6)を中～大粒状に2%、黒色土(10YR2/1)を中粒状に1%含む混層。炭化物あり。	
3	27.0	—	11.1	黒褐色土(10YR2/3)に黒色土(10YR2/1)を10%、黄褐色土(10YR5/6)を中粒状に2%含む混層。	
4	29.0	19.0	17.8	黒褐色土(10YR2/3)にぶい黄褐色粘土(10YR4/3)を小粒状に3%、黒色土(10YR2/1)を中粒状に1%、黄褐色土(10YR5/6)を小粒状に1%含む混層	
5	20.0	15.0	21.3	柱穴No.4と同じ。	

D区 東側層序 注記 (図5対応)

1. ゴミ。黒褐色土(7.5YR2/2)。
2. 黒褐色土(7.5YR2/2)に褐色粘土(7.5YR4/4)を30%含む混層。(ゴミ含む)
3. 黒褐色土(7.5YR2/2)に明褐色焼土(7.5YR5/8)を極小粒状に2%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に1%を含む混層。炭化物有り。しまりあり。
4. 黒褐色土(7.5YR2/2)に明褐色焼土(7.5YR5/8)を小～大粒状に5%、にぶい黄褐色土(10YR4/3)を小粒状に2%、上層に黒色灰(10YR2/1)を5%含む混層。炭化物有り。
5. 黒褐色土(7.5YR2/2)と黒色灰(10YR2/1)の混層に、にぶい黄褐色土(10YR4/3)を中粒状に2%、明褐色焼土(7.5YR5/8)を小粒状に1%、炭化物を含む。
6. 黒褐色土(7.5YR2/2)に褐色砂質土(10YR4/4)を極小～中粒状に10%、明褐色焼土(7.5YR5/8)を小～中粒状に2%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小～小粒状に1%含む混層。炭化物有り。
7. 黒褐色土(7.5YR2/2)に褐色砂質土(10YR4/4)を極小～中粒状に10%、明褐色焼土(7.5YR5/8)を小～中粒状に1%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小～小粒状に1%含む混層。炭化物有り。しまりあり。
8. 黒褐色土(7.5YR2/2)に褐色砂質土(10YR4/4)を極小～小粒状に5%、にぶい黄褐色土(10YR4/3)を中～大粒状に3%、明褐色焼土(7.5YR5/8)を小～中粒状に3%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小～小粒状に2%含む混層。炭化物あり、下層に黒色灰(10YR2/1)を板状に含む。
9. 極暗褐色粘土(7.5YR2/3)ににぶい黄褐色粘土(10YR5/4)を大粒状に2%含む混層。しまり強い。
10. 黒褐色土(7.5YR2/2)に褐色砂質土(10YR4/4)を極小～極大粒状に15%、にぶい黄褐色粘土(10YR5/4)を小～大粒状に5%、明褐色焼土(7.5YR5/8)を極小～中粒状に3%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小～小粒状に1%含む混層。しまりあり。炭化物有り。
11. 黒褐色土(7.5YR2/2)ににぶい黄褐色粘土(10YR5/4)と黒色灰(10YR2/1)の混層に、明褐色焼土(7.5YR5/8)を小粒状に2%含む。粘性あり。炭化物有り。
12. にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3)を下層に。上層に黒褐色土(7.5YR2/2)と黒色灰(10YR2/1)の混層に、にぶい黄褐色粘土(10YR5/4)を大粒状に2%含む。湿性あり。
13. 黒褐色土(7.5YR2/2)に黄褐色砂質土(10YR5/6)を大～極大粒状に7%、にぶい黄褐色粘土(10YR5/4)を大粒状に3%含む混層。
14. 黄褐色砂質土(10YR5/6)。
15. 黒色土(10YR2/1)に灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に2%含む混層。
16. 黒褐色土(7.5YR2/2)に明褐色焼土(7.5YR5/8)を大～極大粒状に2%、にぶい黄褐色粘土(10YR5/3)を大粒状に1%、黄褐色砂質土(10YR5/6)を中粒状に1%含む混層。
17. 黒褐色土(7.5YR2/2)ににぶい黄褐色粘土(10YR5/4)を中～極大粒状に7%、黄褐色砂質土(10YR5/6)を小粒状に3%、明褐色焼土(7.5YR5/8)を極小～小粒状に2%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に1%含む混層。
18. 黒色土(10YR2/1)ににぶい黄褐色粘土(10YR5/4)を小粒状に2%含む混層。
19. 黒色土(10YR2/1)と黄褐色砂質土(10YR5/6)の混層。
20. 黄褐色砂質土(10YR5/6)。

E区 北側・南側層序 注記 (図4対応)

1. 暗赤褐色土(5YR2/4)。(初の高菜土)
2. 灰黄褐色砂質土(10YR6/2)。(シラス)
3. 黒色土(7.5YR2/1)に灰褐色土(7.5YR4/2)を中～極大粒状に5%、褐色焼土(7.5YR4/6)を小粒状に3%、炭化物を2%含む混層。上層しまりあり。15～2cmまでの礫を多量に含む。
4. 3と同じ。全体的にしまりが強く、5cmの礫を2%含む、下層に褐色土(7.5YR4/3)を薄い板状に含む混層。
5. 黒褐色土(7.5YR3/2)に灰褐色土(7.5YR4/2)を中～大粒状に3%、褐色焼土(7.5YR4/6)を小～大粒状に3%、炭化物を2%、褐色砂質土(7.5YR4/4)を小～中粒状に1%含む混層。
6. 褐色砂質土(7.5YR4/4)。
7. 黒色土(10YR2/1)に褐色焼土(7.5YR4/6)を小～中粒状に5%、灰褐色土(7.5YR4/2)を小～中粒状に2%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に1%、炭化物を1%含む混層。しまりなし。
8. 黒褐色土(7.5YR1.7/1)に灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に3%、明褐色土(7.5YR5/6)を中粒状に1%、下層に暗褐色土(7.5YR3/3)(地山)を含む混層。
9. 極暗褐色土(7.5YR2/3)に暗褐色土(7.5YR3/3)を小～大粒状に15%、灰褐色土(7.5YR4/2)を極小粒状に1%、明褐色土(7.5YR5/6)を小粒状に1%、炭化物を1%含む混層。
10. 黒褐色土(7.5YR2/2)に暗褐色土(7.5YR3/3)を極小～中粒状に3%、灰褐色土(7.5YR4/2)を極小～小粒状に1%含む混層。しまりなし。
11. 黒色土(7.5YR1.7/1)に暗褐色土(7.5YR3/3)を小～中粒状に2%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に1%含む混層。しまりなし。

— 29.5m

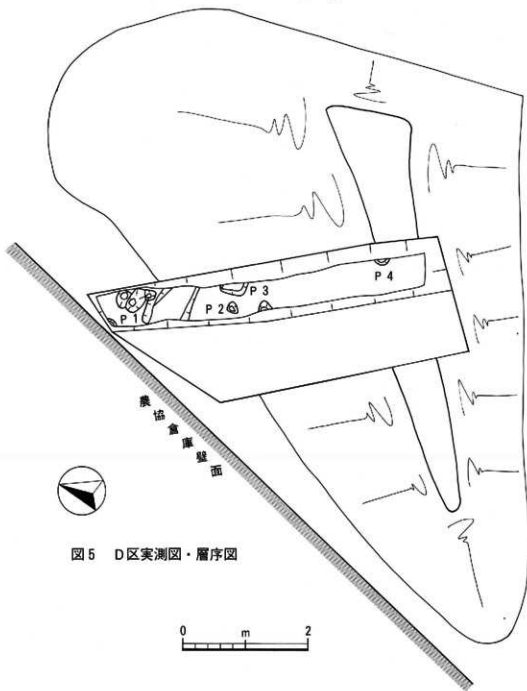
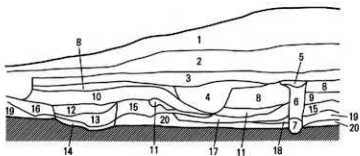


图5 D区实测图·层序图

D区柱穴注記表

No.	大きさ (cm)			土 色 注 記 等	備 考
	長径	短径	深さ		
1	40.0	20.3	30.3	黒褐色土(7.5YR2/2)に黄褐色砂質土(10YR5/6)を極小～極大粒状に20%、明褐色焼土(7.5YR5/8)を中粒状に2%、にぶい黄褐色粘土(10YR5/4)を大粒状に1%含む混層	
2	20.0	14.0	—	褐色砂質土(10YR4/4)	
3	43.0	—	4.7	褐色砂質土(10YR4/4)	
4	24.0	—	9.3	層序図にあり	

E区柱穴注記表

No.	大きさ (cm)			土色注記等	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
1	20.0	17.0	18.2 径10cm の付痕 あり	黒色土(7.5YR2/1)に黒褐色砂質土(7.5YR2/2)が10%、黒色灰(N2/0)の中粒を1%含む。柱根しまりなし。	土師器 2	兩丸四角
2	22.0	20.0	33.2	黒色土(7.5YR2/1)に灰褐色砂質土(7.5YR4/2)の小粒を1%、明褐色焼土(2.5YR4/6)を極小粒状に1%含む。しまりあり。	土師器 1	
3	20.0	?	16.5	黒褐色土(5YR2/1)に灰褐色土(7.5YR4/2)を極小粒状に1%含む。しまりあり。		
4	30.0	30.0	18.1	黒褐色土(5YR2/1)に褐色砂質土(7.5YR4/3)を極小～大粒状に20%、橙色砂質土(5YR6/8)の小粒を1%含む。しまりあり。		

IV 出土遺物

出土した土師器・須恵器などの中でA区SXO1から出土したものに関して詳細を報告する。

1 土 師 器

土師器の器種としては、甕・坏・把手付土器がある。しかしながら、口縁から底部まで接合する例がほとんどなく、それぞれの部位の観察による分類から特徴を示す。

1) 甕

甕は口径の大きさから二類に分かれるが、すべて輪積成形でロクロを使用しない。胴部の調整はケズリによるもの以外なくほぼ同様の特徴を有する。また底部の成形・調整状況を見ると、砂底の例はなく、菰縄庄痕(図6-15)やヘラケズリ(図6-13・14・16)の例だけでケズリ後の線刻状の部分のみられる。また、底径に関しては、6～10cmのものが多く、一部に6cm以下(図6-16)の例も見られる。

I類：口径20cm以上のもの。口縁の外反部から下はすべてケズリの調整が認められ、おそらく胴部から底部上半までケズリ調整が行われていると推定される。

I a類：口縁が「く」字状に外反する例(図6-1・2・3)。

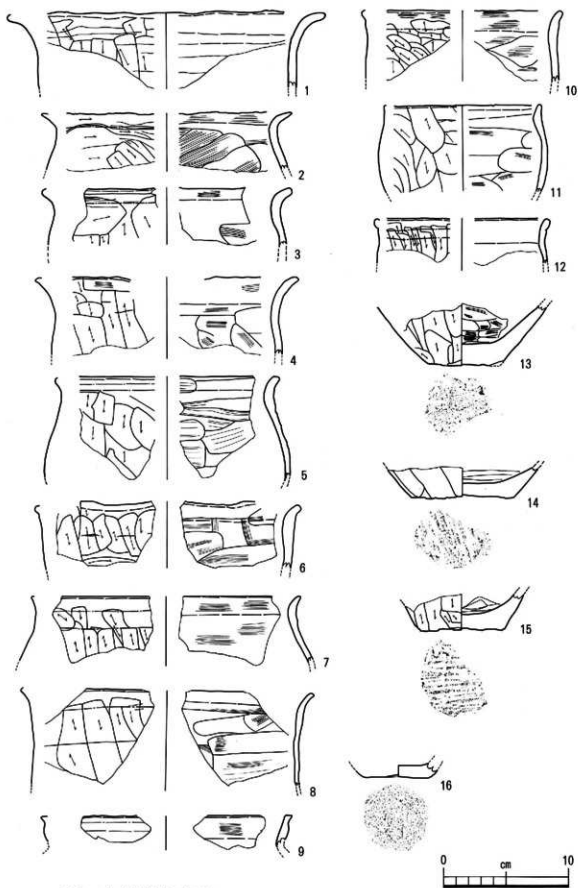


图6 出土遺物実測図(1)

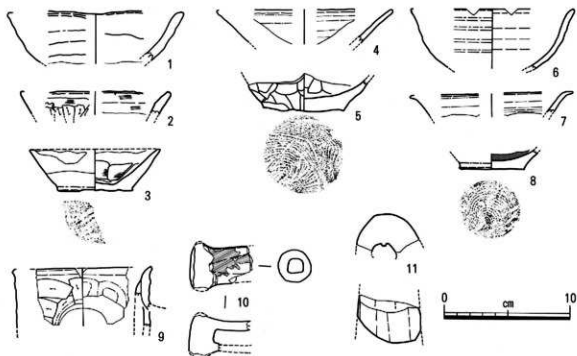


図7 出土遺物実測図

I b類：口縁の外反が緩い例（図6-4）。

I c類：口縁の外反がほとんど見られず、直線的な立ち上がりをする例（図6-6・7・8）。

I d類：口縁が外反して一条の沈線が巡る例（図6-9）。

II類：口径が16cm以下のもの。

II b類：口縁の外反が緩い例（図6-10・11・12）。

2) 坏

坏は、ロクロ成形の有無で二類に分類される。

I類：ロクロ成形のもの。底部は糸切底で口縁から底部までロクロ調整だけで他の調整は認められないが、内面を内黒処理した底部片（図7-8）がある。口縁は外反する例（図7-6・7）や、直行する例（図7-4）も見られる。なお、一部に歪みのある例がある。

II類：輪積・てづくね成形の例で、口縁下にケズリ調整を施す例（図7-2）、やや内湾しながら輪積み痕が明瞭に認められる例（図7-1）、そして内面にケズリ状のえぐりを横位に施す例（図7-3）、底部に静止糸切の痕跡が残る（図7-5）が存在する。

3) 把手付土器

把手の部分（図7-10）と胴部破片（図7-9）の2点が存在する。胴部片は小鉢状を呈し把手をソケット状に装着する例と思われる。

4) 須恵器

甕の破片4点が出土した。色調は赤色の例が多く、煤の付着するものや、焼き締めのため黒色を呈する例も見られる。

5) 支脚

内部が中空の破片(図7-11)が1点出土している。

6) その他

弥生時代の土器が1点出土している。

(工藤清泰)

V ま と め

川原館(川原御所)は、浪岡城主の近親であり「御所」との異称もある一族の居館であると推測されていたため、遺構・遺物ともに「史跡浪岡城跡」と同様な傾向を推定した調査を開始した。

しかし、結果は、中世の遺物が一片も出土しなかった。隣接の畑の耕作土から表採した結果からも中世の遺物はなく、「川原館」の同地域での存在について、今回の調査の結果からは確認できなかった。

また、近世には川原町と呼称された町があったと記録上残されているにもかかわらず、近世の遺物もほとんど検出できなかった。地山上5~10cmまで削平・攪乱の手が及んでいることが確認できたことから、この地で近代以降に公的機関が設置を繰り返した結果も考慮する必要があるかもしれない。

ただし、平安時代の遺構のうち地山を掘り込んだものについては確認できた(住居跡等は検出できなかった)。

また、検出した柱穴については、ほとんどが年代を特定できなかったことから中世・近世の遺構の可能性もあり、中世の遺跡である川原館の遺構がないとは言いきれない。

以上のことから、

- ① 今回の試掘調査では、川原館としての遺構・遺物が明確には確認できなかったこと
- ② 平安時代の遺構については、一部が残っていること

の二点が確認された。また、川原館に由来する土塁の名残ではないかと推定されたD区の盛土については、戦後のゴミ捨てによりできたいわゆる「ごみ山」であることが確認できた。

試掘調査したA~E区は敷地の東西南北周辺部をほぼ網羅する形で設定したものである。その調査区で現地表から地下1m程までは削平等の攪乱が行われていることから、この傾向は、敷地全面に及ぶものと思われる。

このため、今後の対応としては、前述のように敷地全域で平安時代の遺構及び遺物が地山面

に保存されていると思われることから、開発行為（造成・盛土その他）等に際しては、確認調査（発掘調査）の必要があると思われる。なお、既存の建物を取壊す際にも文化財担当職員の立会い措置が必要と思われる。

（木村浩一）

発掘調査抄録

ふりがな	かわほらだていせきしくつちようさほうこくしょ							
書名	川原館遺跡試掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書							
シリーズ番号	第6集							
執筆者名	木村浩一・工藤清泰							
編集機関	浪岡町教育委員会							
所在地	038-1311 青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字稲村101-1 Tel0172-62-1111							
発行年月日	西暦 2002年 3月 29日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号					
川原館遺跡	青森県南津軽郡浪岡町浪岡字浅井130番地の1	229	29050	40度 42分 32秒	140度 36分 4秒	91m ²	20020507 ～ 20020529	開発行為に伴う遺構確認試掘調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
川原館遺跡	城館 集落	平安時代 江戸時代 明治以降	溝跡4条 柱穴 井戸跡1基		土師器 須恵器 近世・近代磁器			



(1) A区調査前状況
(南東から)



(2) A区完掘状況
(北から)



(3) A区SX01調査状況
(北から)

写真2



(1) B区調査前状況
(西から)

(2) B区完掘状況 (南から)



(4) C区完掘状況
(北から)

(3) C区調査前状況
(南から)





(1) D区調査前状況
(東から)

(2) D区調査状況
(南から)

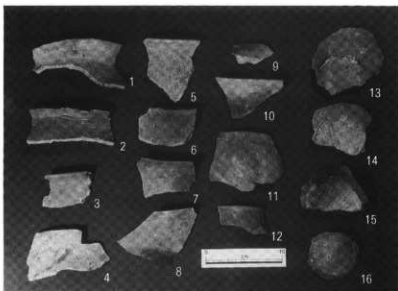


(3) D区完掘状況 (北から)





(1) E区完掘状況
(西から)



(2) 出土した土師器(甕類)
(図6に対応)



(3) 出土した土師器
(坏・把手付土器、他)
(図7に対応)

浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第7集

平野遺跡発掘調査報告書

I 調査に至る経緯

平成12年度

平成12年10月20日、県教育委員会文化課を経由して、文化班に周知の遺跡である平野遺跡で重機が動いているとの連絡があった。すぐに、工藤が現地へ駆けつけたところ、山印造園のエンボーが稼働しており、黒土を排除していた。部分的に平安時代の堅穴建物跡が露出していたことから工事の中止勧告をしたところ、業者は即座に工事を中止し、双方対応策を講じることで合意した。

地主は、もし教育委員会で発掘調査を実施するのであれば、その後に工事を進めたいとの意向であり、当教育委員会としても破壊した部分は別として早急に遺構等の確認をしなければならないと感じた。

この時点では、堅穴建物跡1棟のみの調査と考え、4日ほどの試掘調査で概要は理解できると踏んでいた。試掘調査は10月30日から11月2日までを予定し、教育委員会と町史編纂室が合同で対応することとした。

ところが、堅穴建物跡の周辺を精査したところ、土壌がかなりの数発見され、そのうちの幾つかを掘り下げて遺構確認をしていた。そうするうちに、11月1日の午前11時頃、土壌の一つから漆器らしい遺物が出土していることを確認、さらに赤色顔料の付着した遺物が随所に存在したことから、その重要性を認識し、試掘を一旦中止した。さらに縄文時代の土壌墓に詳しい青森大学教授村越深氏等に連絡して、類例等の存在などに関して所見を賜った。

同日、教育委員会にもどった工藤と木村は、この遺跡の重要性を考慮して本年の試掘だけでなく、来年に向けた調査対応を講じることとした。並行して、このような出土遺物の類例を各地の教育委員会に連絡して教示を得たところ、極めて珍しいことを確認。文化班内における日程が詰まっていることから、2日に記者発表を行って遺跡の重要性を広報することとした。

11月8日には町文化財審議会委員の視察を実施。11月9日には、保存処理をするため出土した漆器を土ごと切り取り、暫定保存を行った。

以上のように、平成12年度は試掘調査によって遺構の広がり、遺跡の主体となる性格を把握するところとなった。その概要は「平成12年度浪岡町文化財紀要Ⅰ」の中で示している。

平成13年度は、前年度の対応を踏まえ、以下の調査要項に則して実施した。

平成13年度 平野遺跡 発掘調査要項

1 調査の目的及び経緯

平成12年10月浪岡町大字五本松字平野地内で、果樹園において民間業者による土取り作業が行われているとの連絡を受け、地権者と工事業者の承諾を得て、遺跡の範囲確認をするため、平成12年10月30日から11月2日までの4日間で約300㎡の試掘調査を実施した。その結果、平

安時代の竪穴建物跡1軒、縄文時代晩期と推定される土壌墓約30基、縄文時代後期と推定される集石遺構1基を確認した。

土壌墓の一部を半裁したところ、漆器の皮膜が残っており、低湿地以外の遺跡でかつ土壌墓の中からの出土は非常に稀であったことから、地権者と工事業者の了解の下、年度を改めて本調査することとした。

調査に当たっては、地権者が、果樹園から菜園へ移行させるために掘削を始めたものであり、調査後は削平してしまう計画である。このため、本調査を行って記録保存を図ることを目的とする。

2 調査地及び所有者

調査地番等 青森県南津軽郡浪岡町大字五本松字平野207-30 地内

所有者 青森県南津軽郡浪岡町大字五本松字野脇22 山内幸博

3 調査面積と位置

約700㎡ (図1参照)

4 調査期間等予定

準備作業 平成13年6月1日から平成13年6月3日

調査作業 平成13年6月4日から平成13年9月5日

整理作業 平成13年11月1日から平成13年11月30日

報告書作成作業 平成13年12月3日から平成14年1月31日

5 調査体制

調査指導員 葛西 勳 (青森大学考古学研究所 所長)

浪岡町教育委員会

教育長 成田清一

生涯学習課課長 常田典昭

文化班長 工藤清泰 (発掘調査副担当)

文化班主任主査 木村浩一 (発掘調査主担当)

文化班主査 小田桐勝昭 (発掘調査副担当)

調査補助員 斎藤とも子

調査作業員 藤本範子・長谷川輝子・乗田キヨエ・成田真佐子・田村広江・吉川瑠枝・斎藤エリカ

整理作業員 小笠原聖子・武田秀美

6 調査方法

グリッド方式により調査区を設定し、昨年度確認した遺構を中心に記録保存を図る。

また、遺構の広がりについてさらに検証し、昨年度未確認部分の遺構確認と遺物の検出に努める。

7 調査報告書の作成

調査報告書は「浪岡町文化財紀要」に掲載し、成果を公表する。

本報告は、平成12・13年度の試掘・発掘調査を踏まえて、全容を報告することとした。なお、平成13年12月1日に行われた青森県埋蔵文化財発掘調査報告会では木村浩一が遺跡概要のスライド報告と若干の出土遺物展示を行った。

(工藤清泰)

II 調査経過

本遺跡の調査経緯に関しては前章で触れており、平成12年度分は「浪岡町文化財紀要Ⅰ」の中で述べている。本章では平成13年度の調査経過に関して調査日誌をもとに概説する。

6月4日 現場にテント・仮設トイレを設置し、発掘準備が整った段階でジョレンにて重機で掘削されたレベルまで残土の除去を開始する。

6月5日 グリッド設定。ベンチマーク(B.M.)1は88.4mである。土壌の確認作業。

6月6日 昨年度試掘した土壌の層序図を精査して写真撮影を行う。

6月8日 土壌の掘り下げ。SK37からヒスイの玉2点出土。SI01覆土南壁層序図の実測作業。

6月11日 SK05南側床面直上からグリーンタフの玉出土。SI01覆土西壁層序図の実測作業。

6月13日 土壌の層序図実測・注記作業。SIF01の北壁と西壁層序図の実測。SK12床面直上から石炭6点出土。

6月14日 SK15の床面から赤色顔料が出土しており、注意深く掘り下げる。

6月22日 SK30の赤色顔料精査。SK15出土の赤色顔料にバインダー処理。SK30の西側で三つ編み状態の赤色顔料遺物を検出。帝京大学学生・葛西学芸員実習参加。

6月26日 青森大学考古学研究所所長・葛西勲先生、発掘調査指導のため来訪。SK11の赤色顔料精査。

6月27日 SK11の赤色顔料遺物の中に漆器を確認。肉眼観察では籃胎漆器の可能性が極めて強い。弘前大学関根達人助教授見学。

6月28日 再度全面の遺構確認を開始。

7月3日 土壌墓の数は80以上であることを確認。SIF01平面実測。

7月4日 調査区西側に盛土となっていた部分を除去。

7月6日 土壌墓は100基まで確認。集石遺構(SX04)を確認、後に石棺墓となる。

7月10日 土壌墓の覆土層序実測作業進む。

7月11日 フラスコ状土坑(SK42・SK43)の覆土層序実測作業。

7月13日 SK81から玉出土。弘前大学名誉教授・村越潔先生来訪、SX04を石棺墓と認定する。

- 7月14日 SK91からSX04覆土の石組みと同質の板状石を確認。石棺墓の可能性高い。
- 7月18日 青森大学考古学研究所所長・葛西勲先生、発掘調査指導のため来訪。石棺の調査法に関して指導を賜る。調査区西側から集石遺構（SS01・SS02・SS03）を3基確認。
- 7月19日 SX04の平面実測およびレベリング。
- 7月24日 土壌墓の掘り下げ進む。SX04・SS01・SS02の平面実測とレベリング。
- 7月25日 SX04の精査、写真撮影。
- 8月1日 SK17北側より漆器と紐状の赤色顔料出土。SK81から玉と紐状赤色顔料出土、玉は紐に連なっていることを確認。
- 8月2日 SK09の紐状赤色顔料精査。
- 8月3日 SK15の赤色顔料を取り上げる。SK09・SK23・SK81の赤色顔料を精査する。SS02の埋設土器を取り上げる。
- 8月7日 発掘成果の報道発表を行う。
- 8月8日 SK11・SK24の赤色顔料遺物を精査。
- 8月10日 SK11の藍胎漆器を取り上げる。平面実測（遣り方）の開始。文化庁岡村主任調査官現場見学。
- 8月20日 D9区D8区の平面実測。
- 8月28日 SK91の覆土層序実測。
- 9月5日 実測が終了したことから、各土壌墓から出土した赤色顔料関係遺物を取り上げる。発掘現場の終了。

なお、整理作業は平成13年度の調査箇所が終了した11月から始め翌年の2月段階まで実施した。また、出土した赤色顔料関係遺物や藍胎漆器の暫定的な保存処理を実施するため、補助金の増額申請を行い300万の増額を得た。

(工藤清泰)

Ⅲ 検出遺構

本遺跡から検出された遺構は、縄文時代の石棺墓・集石遺構・埋設土器・土壌墓・フラスコ状土坑があり、一部弥生時代に属する土壌墓もあると思われる。

なお、遺構ごとの規模及び出土遺物については別表1を参照されたい。また、縄文・弥生時代以外の遺構として、平安時代の竪穴建物跡1棟がみられた。以下、遺構別に記述する。

1 土壌墓（図3から図9・写真4から写真18）

土壌墓（フラスコ状ピット含む）は当初110基を数えたが、風倒木及び現代の攪乱による土坑等を差し引くと土壌墓は94基程度となる。

1) 縄文時代の土壌墓

今回検出した土壌墓からは、縄文時代前期の円筒下層式深鉢形土器胴部片をはじめ、縄文時代中期、後期、晩期、弥生後期までの各時期の土器片が覆土中に混入または周辺から表採された。しかし、遺構の時期決定可能な出土状態を示す遺物は乏しく、土壌墓の形状が、近隣に位置する源常平遺跡の例と類似していることや、緑色凝灰岩製の小玉の出土等から縄文時代晩期の墓墳ではないかと推測するにとどまった。

土壌墓は長軸方向や規模等によりいくつかのタイプに分類できる。長軸方向での時期および配置区分が可能と考え4時期に分類し配置を検討したが(図15)、規則的な配列は認められなかった。この検討については、小結で述べる。

典型的なタイプとしては、長楕円形を呈し、長径120cmから140cm程度のもが多く、この大きさの範囲に入る遺構からは赤色紐状製品、赤色遺物、緑色凝灰岩製玉等が多く出土する傾向にある。また、長軸の磁北に対する傾きも北東方向へ70度前後(60~80度)と、斜面の東西方向にそって長軸を設定する土壌墓が主となるようである。また、表1中深さが10cmに満たないものや底面からの立ち上がりのはっきりしないものは、覆土ごと上部を削平されている可能性が高いため実際の規模は計測値以上に大きくなり、上記の土壌墓群の範囲に含まれる可能性もある。

2) 弥生時代の土壌墓

円形を呈するもので、SK02、SK12、SK27、SK73、SK101、SK102などがこの一群に入ると思われる。SK101では床面直上から天王山式土器に並行すると思われる土器片が出土した。出土遺物の比較では、長楕円形の土壌墓から玉や赤色紐状製品を出土するのに対して、円形の土壌墓からは石鏃を出土する率が高く、赤色紐状製品も出土していない。

2 石 棺 墓 (図10・写真2)

西側の平坦面から斜面へと移行する部分で検出したSX04、SK91の2遺構が該当する。遺構上面は重機により破損していると思われる。蓋石は、墓坑内に落ち込んでいるとはいえ、床面に接することなく、地山と一定の空間が生じている。石棺墓を形成する石材は、両者とも堆積岩を用いており、石質はもろく簡単に粉砕してしまう。2基共に縄文時代後期初頭の遺構と思われる。

SX04 石棺の形態及び規模の確認できる遺構で、150×75cmの長方形を呈する。周囲は、長辺を3枚、短辺を1枚の扁平な石を用い、蓋石は4枚の石を用いている。蓋石は、すべて墓坑内に落ち込んでいる。出土遺物は無柄の石鏃1点と北東端の角にはベンガラと思われる加工石1点が設置(埋設?)されていた。長軸方向は東西に向いており、この軸線上に岩木山の山稜を望むことができる。

SK91 155×90cmの長方形であった可能性が高い遺構で、石棺の一部と蓋石1枚を残すのみと

なっていた。当初は、機械による掘削時に抜き取られたものと考えたが、覆土層序の検討からは現代の攪乱ではなく、石棺墓が露出していた時期に抜き取られた可能性がある。縄文時代後期であれば他の石棺墓へと転用されたのかもしれない。長軸方向はSX04とほぼ同様に東西に向いている。出土遺物はない。

3 集石遺構（写真3）

石棺墓から西南側に斜面を降りた箇所、舌状に張り出した丘陵の先端に近い部分で3基の集石遺構を検出した。遺構はいわゆる川原石を用いているが、遺跡の南側を流れる浪岡川から運び上げたものと思われる。時期は出土土器等からも縄文時代後期初頭と思われる。

SS01（図2） 直径40cm程度の範囲の小規模な集石。機械による掘削時に遺失した可能性もある。形状も不定で、残存状態も悪かったため詳細は確認できなかった。

SS02（図11） SS02は1基の集石遺構として扱ったが、確認後精査すると、2基のほぼ同心円状に並んだ集石遺構と思われる。両者とも、SS01と同様に重機による掘削時または、農業の耕作時に集石の一部が遺失したのかもしれない。

SS02の南側は、残存している部分が直径100cm程度の集石で、中心からは、縄文時代後期初頭の深鉢形土器が、胴部上半から口縁部にかけて外側に割れ落ちた形のまま正立状態で出土した。

北側の集石は残存状態で直径130cm程度の集石であり、南側と比較すると整った形状を呈している。この遺構からは、土器の散布・埋設共に確認できなかった。

SS02は共に推定復元時直径150cm程度の規模と推測される。ただし、高さについては、平面的な配石のみかケルン状の高さを有するものかは不明である。また、2基の集石の新旧関係も不明である。

SS03（図2） 調査区の最も西端で、斜面が急な傾斜となる後線部から検出した遺構で、集石と浅い掘り方の痕跡が確認された。調査結果では集石内からの出土遺物及び遺構は確認できず、遺構形成時にできた痕跡がおぼろげに残されていたものと判断した。規模は残存する石範囲で70×50cmであるが、痕跡はほぼ120cmの円形を呈している。

4 埋設土器遺構

前出のSS02（図11、写真3）及び、土壙墓（SK07）に隣接して検出されたSM01の2基がある。両者共に縄文時代後期初頭の遺構と推察できる。SM01（図3）は、小規模な土壙墓であるSK07の東側に隣接した遺構である。焼成後に底部全体を割り取った状態の深鉢形土器下半部を正立状態で埋設しているもので、検出時にはすでに他の部位は検出されなかった。SK07とSM01の新旧関係は不明である。（木村浩一）

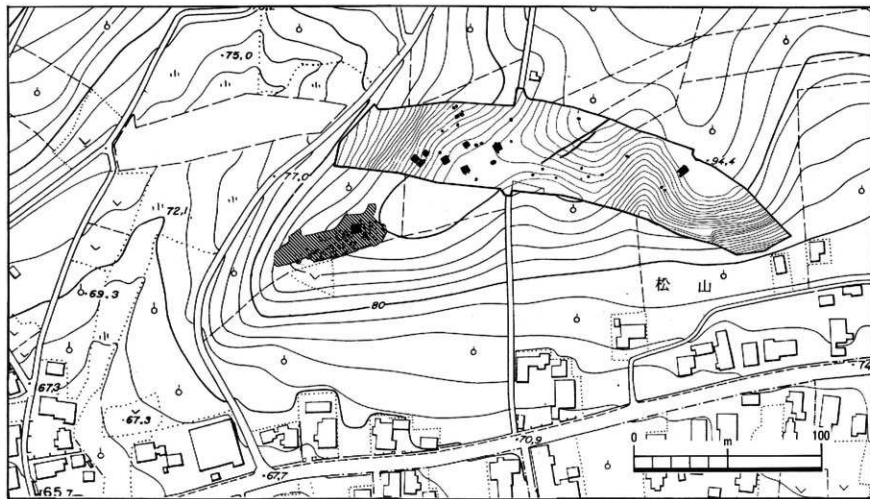


図1 遺跡の位置と調査区

- 平成13年度 調査区
- 平成6年度 青森県埋蔵文化財調査センター調査区

図2 遺構配置図

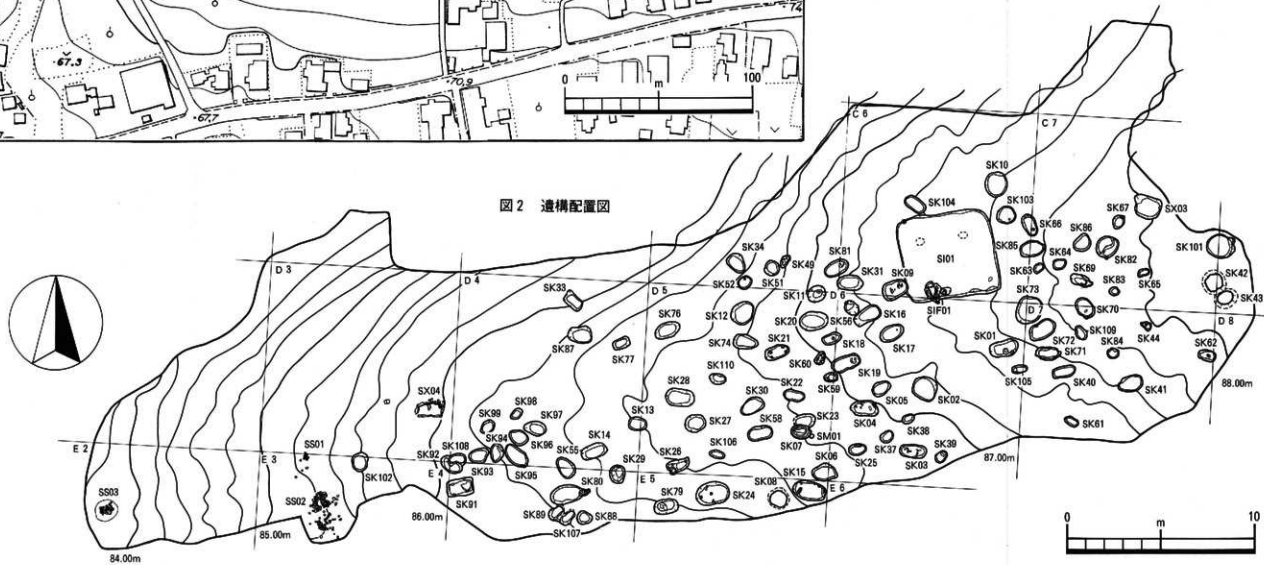


表1 検出遺構一覧表(単位:cm)

遺構番号	上部		底部		深さ	形状	出土遺物(赤色遺物等)	備考
	長径	短径	長径	短径				
SK01	150	78	114	54	20	楕円形		
SK02	140	122	124	106	32	円形	赤色遺物	
SK03	139	71	120	60	24	楕円形	赤色紐状製品	
SK04	146	78	118	56	14	楕円形	赤色遺物	
SK05	105	63	84	48	20	楕円形	玉5、赤色遺物、土器1	
SK06	132	90	106	64	40	楕円形	赤色紐状製品	
SK07	102	71	61	17	18	楕円形	隣接して埋設土器	SK23旧
SK08	98	86	107	108	46	円形		プラスチック状
SK09	134	89	123	66	30	隅丸方形	赤色紐状製品	
SK10	133	117	103	98	46	円形	石鏝1、土器	
SK11	99	78	54	41	17	円形	藍胎漆器、赤色遺物、土器	
SK12	130	111	117	94	36	不定円形	石鏝9、土器	
SK13	94	61	77	54	23	隅丸方形	赤色遺物	
SK14	138	70	106	48	40	隅丸方形	石鏝1、土器	
SK15	180	97	159	81	35	楕円形	赤色紐状製品、赤色遺物	
SK16	150	68	114	66	20	隅丸方形		
SK17	131	80	110	59	14	楕円形	赤色紐状製品、赤色遺物、玉3、漆器	
SK18	100	56	83	38	15	楕円形		
SK19	152	66	142	53	26	隅丸方形	藍胎漆器、赤色遺物	
SK20	154	96	122	62	54	楕円形	フレック2、土器(円筒上層式)	
SK21	128	66	106	48	13	楕円形		
SK22	113	56	95	40	19	楕円形	土器	
SK23	(120)	(80)	(85)	(55)	(9)	楕円形	赤色遺物	SK07新
SK24	171	116	150	88	43	楕円形	赤色遺物	
SK25	94	58	73	42	10	楕円形	赤色遺物	
SK26	130	62	95	39	21	不定形	赤色遺物、フレック2、土器	
SK27	111	92	88	69	43	楕円形		
SK28	153	87	112	59	55	隅丸方形	土器(円筒下層式)	
SK29	96	74	58	38	25	不定形	土器	
SK30	128	78	121	67	15	楕円形	赤色紐状製品	
SK31	132	76	98	57	35	楕円形	赤色遺物、土器	
SK32			欠番					
SK33	118	61	78	39	26	方形		
SK34	108	70	95	56	22	不定形		
SK35			欠番					
SK36			欠番					
SK37	70	53	57	39	10	不定形	ヒスイ玉2	
SK38	63	42	51	28	8	楕円形		
SK39	68	49	54	42	9	不定形		
SK40	122	56	108	46	17	隅丸方形		
SK41	132	86	121	78	33	不定形		
SK42	102	80	102	86	66	円形	土器	プラスチック状
SK43	90	67	108	86	61	円形	フレック1、土器(十腰I式)	プラスチック状
SK44	53	28	48	22	11	不定形		
SK45			欠番					
SK46			欠番					
SK47			欠番					
SK48			欠番					
SK49	78	38	37	28	16	不定形		
SK50			欠番					
SK51	85	78	64	58	22	円形		
SK52	78	64	68	50	18	円形		
SK53			欠番					
SK54			欠番					
SK55	118	76	102	72	24	楕円形	赤色遺物	
SK56	86	65	48	28	14	不定形	赤色遺物	

SK57	欠番						
SK58	132	71	117	53	5	隅丸方形	玉2、赤色遺物
SK59	70	46	46	34	15	楕円形	
SK60	70	29	56	25	22	楕円形	赤色遺物、酸化鉄塊
SK61	74	40	64	28	42	楕円形	
SK62	95	56	84	41	17	楕円形	
SK63	58	37	50	32	6	不定形	
SK64	78	56	64	49	11	不定形	
SK65	63	32	57	24	12	隅丸方形	
SK66	122	66	102	48	35	楕円形	
SK67	78	58	55	44	35	不定形	
SK68	欠番						
SK69	122	52	66	30	18	楕円形	
SK70	116	78	95	70	50	楕円形	赤色遺物
SK71	122	64	100	40	54	隅丸方形	石蔵1
SK72	148	86	133	68	48	楕円形	
SK73	150	130	134	116	39	隅丸方形	フレーク1、土器
SK74	132	72	106	46	19	隅丸方形	
SK75	欠番						
SK76	129	78	96	56	62	楕円形	土器
SK77	92	52	68	36	46	方形	
SK78	欠番						
SK79	123	76	93	46	22	楕円形	
SK80	170	94	144	62	55	楕円形	
SK81	134	72	117	59	32	楕円形	玉6、赤色紐状製品、赤色遺物
SK82	124	104	111	89	26	円形	
SK83	50	44	36	30	15	不定形	
SK84	60	46	48	30	4	不定形	
SK85	130	82	114	72	31	楕円形	
SK86	96	76	82	58	22	不定形	
SK87	127	89	98	70	27	隅丸方形	フレーク1
SK88	81	59	52	48	9	円形	
SK89	80	42	81	37	26	楕円形	
SK90	欠番						SK107旧
SK91	155	90	124	58	20	方形	石棺墓
SK92	119	64	104	54	19	楕円形	SK108旧
SK93	100	92	92	68	14	不定形	玉1
SK94	97	66	80	38	23	不定形	
SK95	148	76	134	66	16	楕円形	
SK96	108	79	94	72	20	不定形	土器
SK97	118	77	74	50	32	楕円形	石蔵1、赤色遺物
SK98	71	48	54	38	20	不定形	
SK99	82	61	64	56	6	不定形	
SK100	欠番						現代か?
SK101	128	116	116	106	29	円形	フレーク1、土器
SK102	98	78	76	64	26	円形	
SK103	104	90	86	76	17	円形	
SK104	120	62	108	46	25	隅丸方形	
SK105	78	36	52	26	22	楕円形	
SK106	80	40	52	26	20	楕円形	
SK107	90	36	80	33	18	楕円形	
SK108	100	41	86	30	12	不定形	土器
SK109	77	48	66	30	18	不定形	
SK110	88	52	68	30	8	楕円形	
SX03	133	115	115	90	48	方形	
SX04	150	75	-	-	35	方形	石蔵1、フレーク2、赤色遺物
SS01	40	28	-	-			石棺墓
SS02	200	100	-	-			集石遺構
SS03	75	55	-	-			集石遺構

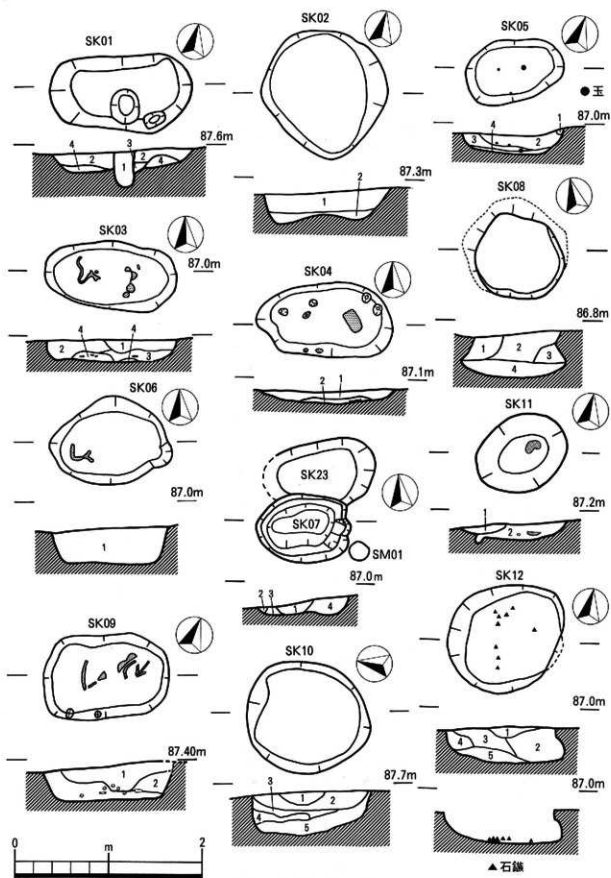


图3 土墳墓実測図(1)

平野遺跡注記

1) 土 壌 基

SK01南壁層序注記 (図3対応)

1. 黒褐色土(7.5YR3/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～中粒状に3%、にぶい黄褐色粘土(10YR5/4)を小粒～大塊状に40%含む。しまり弱い。
2. 褐色土(10YR4/4)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～大塊状に10%含む。しまりあり。
3. 黒褐色土(10YR3/2)の単層。しまり弱い。やや粘性がある。
4. 褐色粘性土(10YR4/6)に極小粒状の炭化物を1%、明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に1%含む。しまりあり。

SK02南壁層序注記 (図3対応)

1. にぶい黄褐色土(10YR4/3)(粘性あり)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小～小粒状に3%含む。しまり弱い。
2. にぶい黄褐色粘土(10YR5/4)に、にぶい黄褐色土(10YR4/3)を小塊状に3%。明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に1%含む。しまり弱い。

SK03南壁層序注記 (図3対応)

1. 暗褐色土(10YR3/4)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小粒～大粒状に7%含む。しまりやや弱い。
2. 褐色土(10YR4/6)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小粒状に5%、極小粒の炭化物状に1%含む。しまりやや弱い。
3. 褐色土(10YR4/6)に黄褐色砂質土(10YR7/8)と炭化物の極小粒状にそれぞれ1%含む。
4. 褐色土(7.5YR4/4)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小粒状に7%含む。赤色顔料状に塗布したものが面で検出されている。(4層全体から)。

SK04南壁層序注記 (図3対応)

1. 暗褐色土(10YR3/3)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～大粒状に15%、褐色粘性土(10YR4/4)を極小粒～小粒状に10%含む。しまりあり。
2. にぶい黄褐色粘性土(10YR4/3)に極小粒状の明黄褐色砂質土(10YR6/8)を1%含む。しまりあり。赤色顔料を含む部分が見られる。

SK05南壁層序注記 (図3対応)

1. 黄褐色砂質土(10YR7/8)のブロック。
2. 暗褐色土(10YR3/4)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小粒～大粒状に10%、極小～小粒の炭化物が3%含まれる。
3. 棕色粘性土(7.5YR6/6)に暗褐色土(10YR3/4)を10%混入する。黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小粒～小粒状に3%、極小粒の炭化物を1%含む。3層下面から主として赤色顔料が検出されている。
4. 棕色粘質土(7.5YR6/6)に極小粒状の黄褐色砂質土(10YR7/8)を1%含む。

SK06南壁層序注記 (図3対応)

1. にぶい棕色土(7.5YR6/4)。ローム粒2mm以下中量。ロームブロック5mm～40mm少量混入。黒褐色土(10YR2/2)極微量混入。しまりややあり。

SK07南壁層序注記 (図3対応)

1. 暗褐色土(10YR3/3)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～小粒状に3%。褐色粘土(10YR4/4)を小粒～小塊状に5%含む。しまりあり。
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3)の単層。しまりあり。
3. 褐色土(7.5YR4/4)の単層。しまりあり。
4. にぶい黄褐色土(10YR4/3)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～小粒状に2%。褐色粘土(10YR4/4)を小～大塊状に10%含む。しまりあり。

SK08南壁層序注記 (図3対応)

1. 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒微量混入。粘性・しまり共になし。
2. 黒褐色土(10YR3/2)。炭化物粒少量混入。ローム粒少量混入。粘性・しまり共になし。
3. 黒褐色土(10YR2/3)。ローム粒少量混入。炭化物粒微量混入。粘性・しまり共になし。
4. 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒中量。褐色土(10YR4/4)がまばらに少量混入。粘性なし。しまりあり。

SK09南壁層序注記 (図3 対応)

1. 黒褐色土(7.5YR3/2)に橙色砂質土(7.5YR6/8)を小粒～大塊状に20%、褐色粘質土(7.5YR4/6)を中～大粒状に7%含む混層。
2. 褐色土(10YR4/4)に橙色砂質土(7.5YR6/8)を極小～中粒状に2%含む混層。(1・2層と床面に赤色遺物あり。床面に赤色紐状製品あり)

SK10西壁層序注記 (図3 対応)

1. 褐色土(10YR4/4)に橙色砂質土(7.5YR6/8)を小～中粒状に5%、炭化物を1%含む混層。
2. 褐色土(10YR4/4)に橙色砂質土(7.5YR6/8)を中粒状に3%、オリープ灰色土(10Y4/2)状に大粒状に1%、炭化物状に1%含む混層。
3. 黄褐色土(10YR5/6)にオリープ灰色土(10Y4/2)を大粒状に1%含む混層。
4. 褐色粘質土(7.5YR4/6)。
5. 明褐色土(7.5YR5/8)にオリープ灰色土(10Y4/2)を小～大粒状に3%、炭化物を2%含む混層。

SK11南壁層序注記 (図3 対応)

1. 褐色土(10YR4/4)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小粒～中粒状に15%、極小粒～小粒の炭化物を1%含む。
2. 褐色土(7.5YR4/4)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小粒～小粒状に10%、極小粒状の炭化物を3%、極小粒状の赤色顔料を3%含む。層下部床面直上には赤色顔料の繊維状の遺物が見られる。

SK12南壁層序注記 (図3 対応)

1. 暗褐色土(10YR3/4)。ローム粒微量。浮石(φ3mm～1cm)微量。粘性あり。しまりあり。
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒多量。炭化物粒微量。浮石(φ3mm～5mm)微量。粘性しまりあり。
3. 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒。ローム(φ1mm～5mm)中量。浮石微量。炭化物粒少量。粘性しまりあり。
4. にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ロームLB(φ5mm～3cm)多量。浮石BL(φ4cm)微量。粘性しまりあり。
5. 暗褐色土(10YR3/4)。ローム粒少量。炭化物粒微量。浮石微量。粘性しまりあり。

SK13南壁層序注記 (図4 対応)

1. 黄褐色土(10YR5/6)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を小粒状に2%、褐色粘土(7.5YR4/6)を中塊状に2%含む混層。炭化物有り。
2. 黄褐色土(10YR5/6)に暗褐色土(10YR3/4)の混層に黄褐色砂質土(10YR7/8)を小～大粒状に3%含む。
3. 黄褐色土(10YR5/6)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を小粒状に1%含む混層。

SK14南壁層序注記 (図4 対応)

1. 褐色土(10YR4/4)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を小～大粒状に5%、褐色粘土(7.5YR4/4)を中～大塊状に2%、小粒状の礫を1%含む混層。炭化物有り。
2. 暗褐色土(10YR3/4)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を小～中粒状に3%、褐色土(10YR4/4)を2%含む混層。炭化物有り。しまりなし。

SK15南壁層序注記 (図4 対応)

1. 褐色土(10YR4/6)。ローム粒2mm以下中量。(黒褐色土(10YR2/2)がまだらに少量混入)。しまりなし。

SK16南壁層序注記 (図4 対応)

1. 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒(φ1～5mm)中量混入。粘性なし。しまりあり。
2. 褐色土(10YR4/4)。ローム粒(φ1～10mm)中量混入。
3. 明褐色ローム(7.5YR5/6)をブロックで混入。粘性なし。しまりあり。

SK17南壁層序注記 (図4 対応)

1. 黒褐色土(10YR2/3)と暗褐色土(10YR3/4)の混合土。ローム粒(φ1～5mm)少量混入。粘性あり。しまりなし。
2. 褐色土(10YR4/4)。炭化物粒(φ1～5mm)が層東側粉々少量混入。赤色遺物がわずかに検出。粘性あり。しまりなし。
3. 暗褐色土(10YR3/4)。ローム粒(φ1～3mm)微量混入。粘性なし。しまりあり。

SK18南壁層序注記 (図4 対応)

1. 褐色土(10YR4/4)。ローム粒2mm～5mm少量。しまりなし。黒褐色土(10YR2/2)がまだらに少量混入。
2. 褐色土(10YR4/6)。ローム粒2mm以下中量。しまりなし。

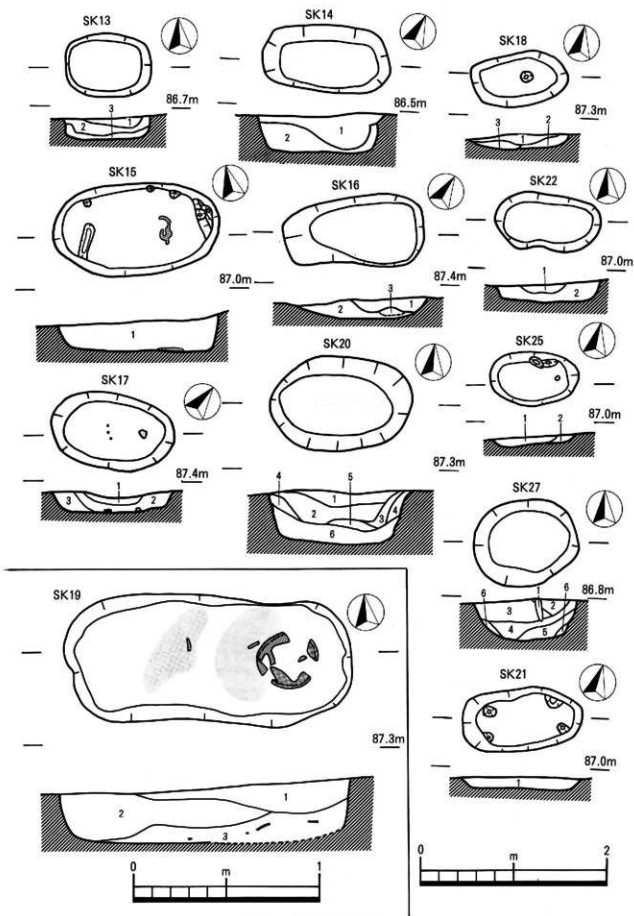


图4 土壤基实测图(2)

3. 明黄褐色土(10YR6/6)。(黒褐色土(10YR2/2)がまだらに少量混入)。しまりあり。

SK19南壁層序注記 (図4対応)

1. 褐色土(10YR4/4)。ローム粒2mm以下中量。ロームブロック5mm~10mm少量。しまりがあり。
2. 暗褐色土(10YR3/4)。ローム粒2mm以下中量。ロームブロック10mm~40mm少量。しまりなし。黒褐色土(10YR2/2)微量混入。
3. 暗褐色土(10YR3/4)。ローム粒2mm以下多量混入。しまりあり。

SK20南壁層序注記 (図4対応)

1. 暗褐色土(10YR3/4)。ローム粒少量。浮石(φ3mm~1cm5mm)少量。焼土粒、炭化物粒微量。イ粘性しまりあり。
2. 暗褐色土(10YR3/4)。ローム粒、ローム(1mm~5mm)少量。浮石(φ5mm~3cm)中量。小礫(1mm~)微量。炭化物粒微量。粘質土BL(φ3cm)微量。粘性しまりあり。
3. 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒微量。浮石(φ2mm~5mm)微量。粘質土少量。粘性あり。しまりやや有り。
4. 黒褐色土(10YR3/2)。浮石(φ3mm~1cm)微量。小礫(φ3mm)微量。粘性あり。しまりやや有り。
5. 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒。ローム(φ1mm~3mm)微量。浮石(φ3mm~1cm)少量。粘性しまりあり。
6. 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒少量。浮石(φ2mm~8mm)中量。炭化物(φ5mm)微量。焼土粒微量。粘性しまりあり。

SK21南壁層序注記 (図4対応)

1. 褐色土(10YR4/4)。ローム粒2mm以下中量。ロームブロック5mm~30mm少量混入。しまりなし。

SK22南壁層序注記 (図4対応)

1. 暗褐色土(10YR3/4)。ローム粒(φ1~5mm)中量。炭化物粒(φ1~3mm)少量混入。粘性なし。しまりあり。
2. 暗褐色土(10YR3/4)。ローム粒(φ1~3mm)少量。ロームブロック(φ40mm)が大きく混入。粘性なし。しまりあり。

SK24南壁層序注記 (図5対応)

1. 攪乱層。
2. 暗褐色土(10YR3/4)。ローム粒2mm以下多量混入。しまりなくもろい。
3. におい黄褐色土(10YR6/4)。しまりなし。
4. 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒2mm以下中量混入。しまりなくもろい。
5. 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒2mm以下少量。しまりなし。
6. 黒褐色土(10YR2/3)。ローム粒2mm以下少量混入。しまりなし。

SK25南壁層序注記 (図4対応)

1. におい黄褐色土(10YR5/4)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に1%含む。しまりあり。
2. 褐色粘土(10YR4/4)の単層。しまりあり。

SK26南壁層序注記 (図5対応)

1. 褐色土(10YR4/4)に黄褐色土(10YR5/6)を中~大粒状に3%、褐色粘土(7.5YR4/6)を5%、黄褐色土(10YR7/8)を小~中粒状に2%含む混層。
2. 明褐色土(7.5YR5/6)に、におい褐色粘土(7.5YR5/4)を大塊状に10%、黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小粒~中塊状に10%。極小粒状の炭化物を1%含む。

SK27南壁層序注記 (図4対応)

1. 暗褐色土(10YR3/4)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小粒状に1%含む。攪乱か?
2. 褐色土(7.5YR4/4)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小粒~大粒状に15%。極小粒の炭化物を1%含む。
3. 明褐色土(7.5YR5/6)に、におい褐色粘土(7.5YR5/4)を大塊状に10%、黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小粒~中塊状に10%。極小粒状の炭化物を1%含む。
4. 褐色土(10YR4/6)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小粒~中塊状に7%、極小粒の炭化物を1%含む。
5. 褐色土(10YR4/4)に褐色土(10YR4/6)を10%、黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小粒と炭化物を小粒に1%含む。
6. 褐色土(10YR4/6)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を1%含む。

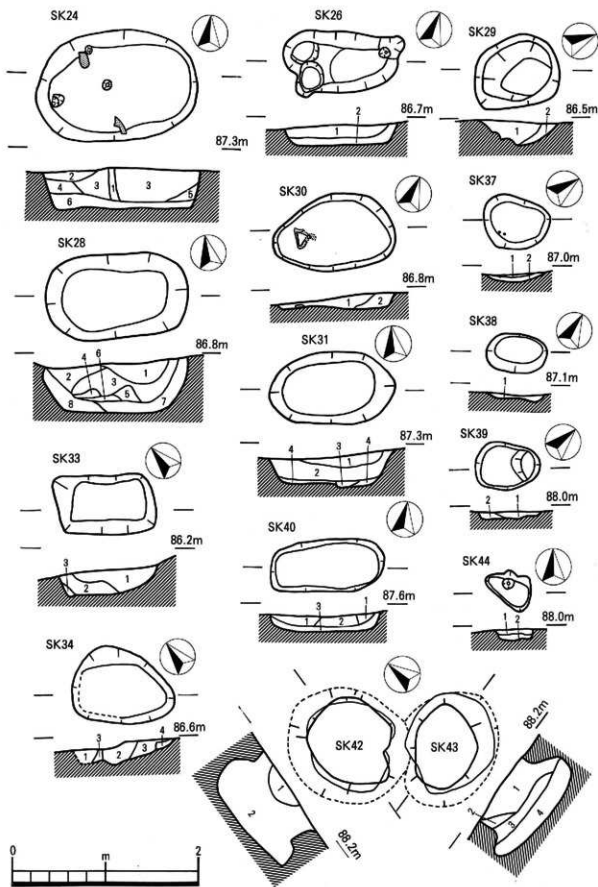


图5 土墓基实测图(3)

SK28南壁層序注記 (図5 対応)

1. におい黄褐色土(10YR4/3)と暗褐色土(10YR3/3)との5:5の混層。におい黄褐色粘土(10YR5/4)を小粒～大粒状に5%、黄褐色土(10YR7/8)を極小～中粒状に3%含む。しまりゆるい。
2. におい黄褐色土(10YR4/3)とにおい黄褐色土(10YR5/4)との5:5の混層に黄褐色土(10YR7/8)を極小粒状に3%含む。
3. におい黄褐色粘土(10YR5/4)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を大塊状に5%、におい黄褐色土(10YR4/3)を3%含む。しまり強い。
4. におい黄褐色粘土(10YR5/4)と黄褐色砂質土(10YR7/8)との5:5の混層。
5. におい黄褐色土(10YR4/3)と明黄褐色土(10YR6/6)の5:5の混層に、黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小～小粒に10%含む。
6. 褐色粘土(7.5YR4/4)の単層。しまり強い。
7. 暗褐色土(10YR3/4)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小粒～中粒に7%、におい黄褐色粘土(10YR5/4)を中粒～大粒状に3%含む。
8. 黒褐色土(7.5YR3/2)におい黄褐色粘土(10YR5/4)を極小粒～中塊状に20%、黄褐色砂質土(10YR7/8)を細小粒に5%含む。

SK29東壁層序注記 (図5 対応)

1. 褐色土(10YR4/4)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を小～中粒状に2%含む混層。しまりなし。
2. 褐色土(10YR4/4)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を大～極大粒状に10%含む混層。しまりなし。

SK30南壁層序注記 (図5 対応)

1. 暗褐色土(10YR3/4)。ローム粒少量含む。炭化粒微量混入。粘性あり。しまりなし。
2. におい黄褐色土(10YR5/4)。ローム粒極微量。炭化粒極微量混入。粘性あり。しまりなし。

SK31南壁層序注記 (図5 対応)

1. 褐色土(10YR4/6)に暗褐色土(10YR3/4)を10%、黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小粒に7%、極小粒の炭化物を1%含む。
2. 暗褐色土(10YR3/4)に褐色土(10YR4/6)を10%、黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小粒～大粒に10%、炭化物を極小粒に1%含まれる。
3. におい黄褐色土(10YR4/3)におい褐色土(7.5YR5/4)を20%混入。赤色遺物が混入。
4. におい褐色土(7.5YR5/4)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小粒に1%含む。4層中(又は上面)から赤色遺物検出。

SK33南壁層序注記 (図5 対応)

1. 褐色土(10YR4/4)に黄褐色土(10YR7/8)を極小～小粒状に7%含む混層。しまりなし。
2. 褐色土(10YR4/4)に黄褐色土(10YR7/8)を小～中粒状に3%含む混層。しまりなし。
3. 褐色土(10YR4/4)に褐色粘土(7.5YR4/6)の混層。
地山 褐色粘土(7.5YR4/6)

SK34南西壁層序注記 (図5 対応)

1. 褐色土(10YR4/4)に黄褐色土(10YR7/8)を極小粒状に1%含む混層。しまりなし。
2. 褐色土(10YR4/4)に黄褐色土(10YR7/8)を極小粒～中粒状に5%含む混層。しまりなし。
3. 褐色土(10YR4/4)に黄褐色土(10YR7/8)を極小粒～小粒状に10%含む混層。しまりなし。
4. 黄褐色土(10YR7/8)。しまりあり。

SK37南壁層序注記 (図5 対応)

1. 明褐色土(7.5YR5/6)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小粒に10%含む。赤色遺物がこの層から検出されている。
2. 黄褐色砂質土(10YR7/8)。

SK38南壁層序注記 (図5 対応)

1. 褐色土(7.5YR4/4)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小粒状に15%、橙色粘性土を小塊状に5%含む。

SK39南壁層序注記 (図5 対応)

1. 褐色土(7.5YR4/4)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を小～極大粒状に3%含む混層。
2. 褐色土(10YR4/6)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を中粒状に2%含む混層。

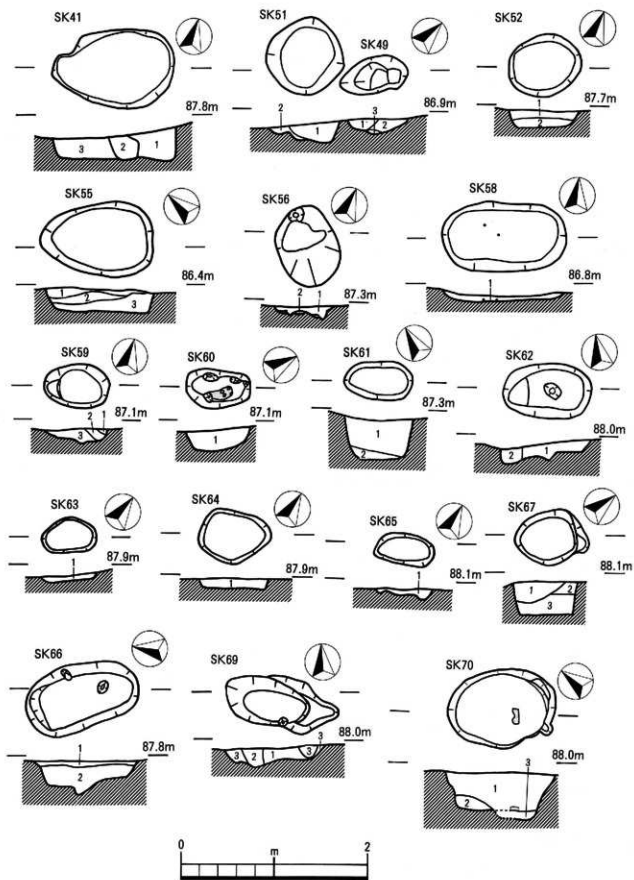


图6 土坟墓实测图(4)

SK40南壁層序注記 (図5 対応)

1. 褐色土(10YR4/4)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小粒に3%含む。しまりなし。
2. 褐色土(10YR4/4)ににぶい褐色粘性土(7.5YR5/3)を極小粒～大塊状に30%、黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小粒～小粒に5%含む。しまり弱い。
3. 明褐色土(7.5YR5/6)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小粒に3%、極小粒の炭化物を1%含む。しまりなし。

SK41南壁層序注記 (図6 対応)

1. 黒褐色土(7.5YR3/2)と暗褐色土(10YR3/4)との混層ににぶい褐色粘性土(7.5YR5/3)を極大粒に7%、黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小粒～小粒状に10%含む。
2. 暗褐色土(10YR3/4)ににぶい褐色粘性土(7.5YR5/3)の極小粒～大塊との5:5の混層。極小粒～大粒の黄褐色砂質土(10YR7/8)を3%含む。
3. にぶい褐色粘性土(7.5YR5/4)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を小粒～大粒状に1%含む。

SK42西壁層序注記 (図5 対応)

1. 褐色粘性土(7.5YR4/4)と褐色土(7.5YR4/3)との5:5の混層。明褐色砂質土(7.5YR5/6)を極小粒に1%含む。
2. 暗褐色土(7.5YR3/3)に褐色粘性土(7.5YR4/4)を小塊～大塊状に15%、極小粒状の明褐色砂質土(7.5YR5/6)を1%含む。極小粒の炭化物を1%含む。

SK43南壁層序注記 (図5 対応)

1. 暗褐色土(7.5YR3/3)と褐色土(7.5YR4/4)との7:3の混層に、明褐色砂質土(7.5YR5/6)を極小粒～大粒に5%、にぶい褐色粘性土(7.5YR6/4)を大粒状に3%、極小粒の炭化物を5%含む。
2. 黄褐色土(10YR5/8)に暗褐色土(7.5YR3/3)を中塊～大塊状に15%含む。
3. 褐色粘性土(7.5YR4/4)に暗褐色土(7.5YR3/3)を大塊状に5%、黄褐色土(10YR5/8)を小粒に1%含む。
4. 黒褐色土(7.5YR3/2)に褐色粘性土(7.5YR4/4)の小塊～中塊を7%、極小粒状の黄褐色土(10YR5/8)と炭化物をそれぞれ1%含む。

SK44南壁層序注記 (図5 対応)

1. 褐色土(7.5YR4/4)に明褐色砂質土(7.5YR5/6)を極小粒に5%含む。
2. 褐色粘性土(7.5YR4/6)の単層。

SK-49南壁層序注記 (図6 対応)

1. 黒褐色土(10YR2/3)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を小～大粒状に5%、褐色粘質土(7.5YR4/6)を小～大塊状に2%含む混層。しまりなし。
2. 黒褐色土(10YR2/3)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を小～中粒状に2%含む混層。しまりなし。
3. 黄褐色土(10YR5/8)。

SK51南壁層序注記 (図6 対応)

1. 極暗褐色土(7.5YR2/3)に褐色土(7.5YR4/4)を10%、明黄褐色砂質土(10YR6/8)を小～極大粒状に7%、褐色粘質土(7.5YR4/6)を大粒状に3%含む層。
2. 褐色土(7.5YR4/4)と褐色粘質土(7.5YR4/6)の5:5の混層。

SK52南壁層序注記 (図6 対応)

1. 褐色土(10YR4/4)に黄褐色土(10YR7/8)を小～中粒状に5%含む混層。しまりなし。
2. 褐色土(10YR4/4)に黄褐色土(10YR7/8)を小～大粒状に10%、褐色粘土(7.5YR4/6)を下層に2%含む。混層。

SK55南壁層序注記 (図6 対応)

1. 褐色土(10YR4/6)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を小～大粒状に3%、小粒状の礫を1%含む混層。
2. 褐色粘質土(7.5YR4/6)。
3. 明褐色土(7.5YR5/8)に小～中粒状の礫を1%含む。

SK56南壁層序注記 (図6 対応)

1. 褐色土(10YR4/6)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小粒～小粒状に5%、極小粒の炭化物を1%含む。1層下面から赤色顔料検出。
2. 褐色粘土(10YR6/6)に黄褐色砂質土(10YR7/8)と炭化物をそれぞれ極小粒状に1%未満含む。

SK58南壁層序注記 (図6対応)

1. 明褐色土(7.5YR5/6)に褐色粘土(10YR4/6)を大塊状に10%、にぶい黄橙色土(10YR6/4)を大塊状に10%、黄橙色土(10YR7/8)の極小粒を5%含む。床面直上からは赤色遺物が出土している。

SK59南壁層序注記 (図6対応)

1. 明褐色土(7.5YR5/6)に褐色土(7.5YR4/4)を極小粒状～中塊状に10%混入。
2. 暗褐色土(10YR3/4)に黄橙色砂質土(10YR7/8)を極小粒～小粒状に5%、極小粒状の炭化物が1%混入。
3. 褐色土(7.5YR4/4)に黄橙色砂質土(10YR7/8)を極小粒～小粒状に7%、極小粒状の炭化物を1%含む。

SK60南壁層序注記 (図6対応)

1. 暗褐色土(10YR3/4)に褐色土(7.5YR4/4)を20%、黄橙色砂質土(10YR7/8)を極小粒～小粒に10%、極小粒の炭化物を1%含む。床面直上から赤色遺物が出土している。

SK61南壁層序注記 (図6対応)

1. 黒褐色土(7.5YR3/2)に褐色粘性土(7.5YR4/4)を小粒～中粒状に10%、明褐色砂質土(7.5YR5/6)を極小粒に1%含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2)に褐色粘性土(7.5YR4/4)を小粒に5%、明褐色砂質土(7.5YR5/6)を極小粒に1%含む。

SK62南壁層序注記 (図6対応)

1. 褐色土(7.5YR4/4)ににぶい橙色粘性土(7.5YR6/4)を小塊～大塊に20%、明褐色砂質土(7.5YR5/6)を小粒～大粒状に5%含む。
2. 褐色粘性土(7.5YR4/6)の単層。

SK63南壁層序注記 (図6対応)

1. 褐色土(7.5YR4/4)に橙色砂質土(7.5YR6/6)を極小粒に10%、黒褐色土(7.5YR5/1)を層下部に薄い板状に含む。

SK64南壁層序注記 (図6対応)

1. 褐色土(7.5YR4/4)に黒褐色土(7.5YR3/2)の大塊を15%。明褐色砂質土(7.5YR5/6)を極小粒～大塊状に20%含む。

SK65南壁層序注記 (図6対応)

1. 褐色土(7.5YR4/4)に明褐色砂質土(7.5YR5/6)を極小粒～大粒状に10%含む。

SK66南壁層序注記 (図6対応)

1. 褐色土(7.5YR4/4)に黄橙色砂質土(7.5YR7/8)を極小粒～小粒状に3%、極小粒の炭化物を1%含む。しまりなし。
2. 明褐色砂質土(7.5YR5/6)に褐色土(7.5YR4/4)を中塊状に3%含む。しまりあり。

SK67南壁層序注記 (図6対応)

1. 橙色粘性土(7.5YR6/6)に褐色土(7.5YR4/4)を小塊～中塊状に10%含む。しまりなし。
2. 褐色土(7.5YR4/4)に明褐色砂質土(7.5YR5/8)を極小粒～大塊状に15%含む。
3. 褐色粘性土(10YR4/6)の単層。

SK69南壁層序注記 (図6対応)

1. 褐色土(7.5YR4/4)に橙色砂質土(7.5YR6/6)を極小粒に5%含む。
2. にぶい褐色土(7.5YR5/4)に橙色砂質土(7.5YR6/6)を極小粒～小粒に1%含む。
3. 橙色砂質土(7.5YR6/6)ににぶい褐色土(7.5YR5/4)を小塊状に10%含む。

SK70南壁層序注記 (図6対応)

1. 褐色土(7.5YR4/4)に黄橙色砂質土(10YR7/8)を極小粒～大粒状に10%、にぶい褐色粘性土(7.5YR5/4)を極小粒～大粒状に1%、極小粒の炭化物を1%未滴含む。しまり弱い。
2. 暗褐色土(10YR3/3)に黄橙色砂質土(10YR7/8)を極小粒～中粒状に5%、にぶい褐色粘性土(7.5YR5/4)を極小粒～小粒状に3%、炭化物の極小粒を1%含む。しまり弱い。
3. 明褐色土(7.5YR5/8)の単層。しまりあり。

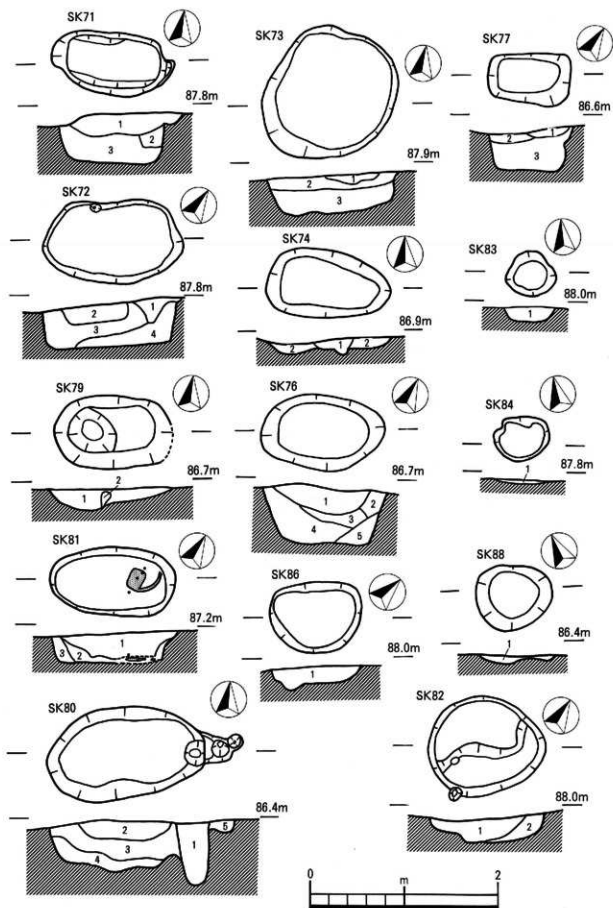


图7 土壤基实测图(5)

SK71南壁層序注記 (図7 対応)

1. 褐色土(7.5YR4/4)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小粒～大粒状に10%含む。しまり弱い。
2. 褐色土(7.5YR4/3)にふい褐色粘性土(7.5YR5/3)を極小粒～小塊状に15%、黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小粒状に3%含む。
3. 暗褐色土(7.5YR3/4)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小粒～大塊状に30%、ふい褐色粘性土(7.5YR5/3)を小粒状に3%含む。

SK72南壁層序注記 (図7 対応)

1. 暗褐色土(7.5YR3/4)に橙色砂質土(7.5YR6/8)を極小粒～小粒状に10%、褐色土(7.5YR4/6)を小塊～大塊状に20%含む。
2. 暗褐色土(7.5YR3/4)に橙色砂質土(7.5YR6/8)を極小粒～中塊状に15%、ふい褐色粘性土(7.5YR5/3)を極小粒～中塊状に5%含む。
3. 暗褐色土(7.5YR3/4)に橙色砂質土(7.5YR6/8)を極小粒～大塊状に25%、褐色土(7.5YR4/6)を極小粒～大粒状に5%、暗褐色土(7.5YR3/3)を一部大塊状に10%含む。
4. ふい褐色粘性土(7.5YR5/4)に橙色砂質土(7.5YR6/8)を小塊～大塊状に5%、暗褐色土(7.5YR3/4)を極小粒状に3%含む。もろい。

SK73南壁層序注記 (図7 対応)

1. 暗褐色土(10YR3/4)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小～小粒状に5%、炭化物を極小粒～小粒に7%含む。
2. 褐色土(7.5YR4/4)にふい褐色粘土(7.5YR5/3)を小粒～大塊状に5%、黄褐色砂質土(10YR7/8)の極小粒～小塊を3%含む。しまり強い。
3. 褐色土(7.5YR4/4)に黄褐色砂質土(10YR7/8)を極小粒～大塊状に10%、ふい褐色粘土(7.5YR5/3)を小塊～大塊状に3%、極小粒状の炭化物1%含む。

SK74南壁層序注記 (図7 対応)

1. 暗褐色土(7.5YR3/4)に橙色砂質土(7.5YR6/8)を小～中粒状に2%含む混層。
2. 1に褐色粘質土(7.5YR4/6)を小～中粒状に下層に1%含む混層。

SK76南壁層序注記 (図7 対応)

1. 褐色粘質土(7.5YR4/6)に橙色砂質土(7.5YR6/8)を小粒状に2%下層に含む。
2. 褐色土(7.5YR4/4)に橙色砂質土(7.5YR6/8)を極小～小粒状に2%含む混層。
3. 暗褐色土(7.5YR3/4)に橙色砂質土(7.5YR6/8)を中～極大粒状に3%、褐色粘質土(7.5YR4/6)を大塊状に1%含む混層。
4. 暗褐色土(7.5YR3/4)に橙色砂質土(7.5YR6/8)を小～極大粒状に7%、極暗褐色土(7.5YR2/3)を3%含む混層。
5. 暗褐色土(7.5YR3/4)に褐色粘質土(7.5YR4/6)を中～大塊状に3%、極暗褐色土(7.5YR2/3)を2%、橙色砂質土(7.5YR6/8)を中粒状に2%含む混層。

SK77南壁層序注記 (図7 対応)

1. 褐色粘性土(7.5YR4/6)に橙色砂質土(7.5YR6/8)を中粒状に2%含む。
2. 暗褐色土(7.5YR3/4)に褐色粘質土(7.5YR4/6)を大～極大粒状に5%、橙色砂質土(7.5YR6/8)を中粒状に3%、極暗褐色土(7.5YR2/3)を1%含む混層。
3. 極暗褐色土(7.5YR2/3)に暗褐色土(7.5YR3/4)を20%、褐色粘質土(7.5YR4/6)を中～大塊状に5%、橙色砂質土(7.5YR6/8)を小～中粒状に2%含む混層。

SK79南壁層序注記 (図7 対応)

1. 明黄褐色砂質土(10YR6/8)。
2. 明黄褐色砂質土(10YR6/8)に暗褐色土(10YR3/4)を50%含む混層。

SK80南壁層序注記 (図7 対応)

1. 褐色土(10YR4/4)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小～小粒状に1%含む混層。
2. 褐色土(10YR4/4)に褐色粘質土(7.5YR4/6)を15%、明黄褐色砂質土(10YR6/8)を小～中粒状に2%、小粒状の炭化物を1%含む混層。
3. 褐色土(10YR4/4)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を小～中粒状に5%、褐色粘質土(7.5YR4/6)を5%、極暗褐色土(7.5YR2/3)を2%含む混層。
4. 褐色粘質土(7.5YR4/6)と褐色土(10YR4/4)の6:4の混層。
5. 褐色土(10YR4/4)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小～小粒状に5%含む混層。

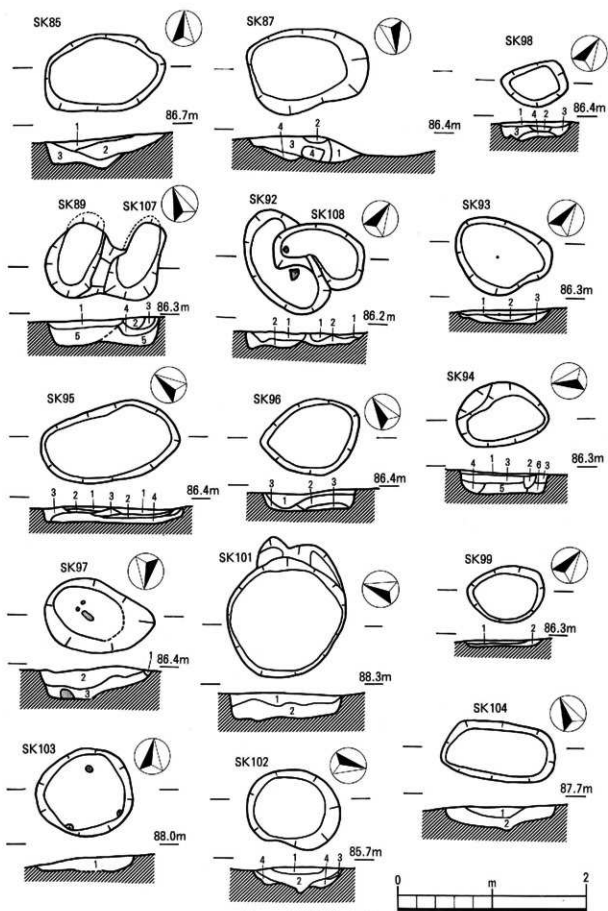


图8 土壤基实测图(6)

SK81南壁層序注記 (図7対応)

1. 褐色土(10YR4/4)に橙色砂質土(7.5YR6/8)を小～極大粒状に10%、黄褐色粘質土(10YR5/6)を上層に2%、炭化物を1%含む混層。
2. 黄褐色土(10YR5/6)に橙色砂質土(7.5YR6/8)を小粒状に1%含む混層。
3. 褐色土(10YR4/4)。

SK82南壁層序注記 (図7対応)

1. 明褐色土(7.5YR5/6)に褐色土(7.5YR4/4)を小塊～大塊状に15%、橙色砂質土(7.5YR6/8)を極小粒～大粒状に5%含む。
2. 褐色土(7.5YR4/4)に橙色砂質土(7.5YR6/8)を極小粒状に10%含む。

SK83南壁層序注記 (図7対応)

1. 褐色土(7.5YR4/4)に明褐色砂質土(7.5YR5/6)を極小粒状に1%。にぶい橙色粘性土(2.5YR6/4)を小塊状に5%含む。

SK84南壁層序注記 (図7対応)

1. にぶい褐色粘性土(7.5YR5/4)の単層。

SK85南壁層序注記 (図8対応)

1. 褐色土(10YR4/6)に橙色砂質土(7.5YR6/6)の極小粒を1%含む。
2. にぶい橙色粘性土(7.5YR6/4)の単層。
3. 橙色粘性土(7.5YR6/6)の単層。

SK86南壁層序注記 (図7対応)

1. 黄褐色砂質土(7.5YR7/8)と橙色土(7.5YR6/6)との5:5の混層。

SK87北壁層序注記 (図8対応)

1. 褐色粘性土(7.5YR4/6)に暗褐色土(7.5YR3/4)を20%、橙色砂質土(7.5YR6/8)を小～中粒状に5%含む混層。
2. 褐色土(7.5YR4/4)に暗褐色土(7.5YR3/4)を10%、橙色砂質土(7.5YR6/8)を小粒上に3%含む混層。
3. 暗褐色土(7.5YR3/4)に褐色粘性土(7.5YR4/6)を小ブロック状に3%、橙色砂質土(7.5YR6/8)を極小～中粒状に7%含む混層。炭化物有り。
4. 褐色土(7.5YR4/6)に橙色砂質土(7.5YR6/8)を小粒状に2%含む混層。

SK88南壁層序注記 (図7対応)

1. 褐色土(10YR5/6)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を小～中粒状に2%含む混層。

SK89南壁層序注記 (図8対応)

1. 褐色土(10YR5/6)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を小粒状に2%、小粒状の礫を1%含む混層。

SK107南壁層序注記 (図8対応)

2. 褐色土(10YR4/4)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を小粒状に1%含む混層。
3. 褐色土(10YR5/6)。
4. 褐色土(10YR5/6)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に1%、赤褐色土(2.5YR4/6)を大粒状に1%含む混層。
5. 褐色粘質土(7.5YR4/6)。

SK92・108南壁層序注記 (図8対応)

1. 暗褐色土(10YR3/4)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を大粒～中塊状に3%、炭化物を1%含む混層。
2. 褐色粘質土(7.5YR4/6)。

SK93南壁層序注記 (図8対応)

1. 暗褐色土(10YR3/4)に褐色粘質土(7.5YR4/6)を極大粒状に10%、明黄褐色砂質土(10YR6/8)を小～極大粒状に3%、炭化物を1%含む混層。
2. 褐色粘質土(7.5YR4/6)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を中～大粒状に2%含む混層。
3. 褐色粘質土(7.5YR4/6)に炭化物を1%含む。

SK94西壁層序注記 (図8対応)

1. 黒褐色土(7.5YR3/2)に褐色土(7.5YR4/4)を10%、橙色砂質土(7.5YR6/8)を小～中粒状に3%含む混層。
2. 褐色土(7.5YR4/4)に橙色砂質土(7.5YR6/8)を小粒状に2%含む混層。
3. 褐色土(10YR4/6)に橙色砂質土(7.5YR6/8)を中～極大粒状に5%含む混層。
4. 褐色土(10YR4/6)に褐色土(7.5YR4/6)を下層に10%、橙色砂質土(7.5YR6/8)を極小～小粒状に2%、黒色土(7.5YR2/1)を小粒状に1%含む混層。
5. 褐色粘質土(7.5YR4/6)。
6. 褐色土(7.5YR4/6)。

SK95西壁層序注記 (図8対応)

1. 黒褐色土(7.5YR3/2)に橙色砂質土(7.5YR6/8)を小粒～大粒状に10%、小粒状の礫を1%、炭化物を含む。
2. 明黄褐色砂質土(10YR6/8)。
3. 褐色土(10YR4/6)に橙色砂質土(7.5YR6/8)を極小粒状に1%含む。
4. 褐色粘質土(7.5YR4/6)に炭化物を1%含む。

SK96西壁層序注記 (図8対応)

1. 暗褐色土(10YR3/3)に橙色砂質土(7.5YR6/8)を小粒状に10%、炭化物を小粒状に3%含む混層。
2. 暗褐色土(10YR3/3)に橙色砂質土(7.5YR6/8)を小粒状から大塊状に25%含む混層。
3. 褐色粘質土(7.5YR4/6)に中粒の礫を1%含む。

SK97西壁層序注記 (図8対応)

1. 暗褐色土(10YR3/4)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を小～中粒状に3%含む混層。
2. 褐色土(10YR4/6)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を小～中粒状に3%含む混層。
3. 褐色土(10YR4/6)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を小粒状に1%含む混層。

SK98南壁層序注記 (図8対応)

1. 極暗褐色土(7.5YR2/3)に褐色土(7.5YR4/4)を7%、明黄褐色砂質土(10YR6/8)を小～中粒状に3%含む混層。
2. 褐色土(7.5YR4/4)に褐色粘質土(7.5YR4/6)を大粒状に10%含む混層。
3. 褐色土(7.5YR4/4)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を30%含む混層。
4. 褐色粘質土(7.5YR4/6)。

SK99西壁層序注記 (図8対応)

1. 暗褐色土(10YR3/3)に黄褐色土(10YR5/6)を10%、明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小～小粒状に10%含む混層。炭化物有。ガラス混入。
2. 黄褐色土(10YR5/6)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を小粒状に3%含む混層。

SK101西壁層序注記 (図8対応)

1. 明褐色土(7.5YR5/6)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を小～中粒状に2%含む混層。
2. 明褐色土(7.5YR5/6)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を中粒状に5%、炭化物を1%含む混層。

SK102東壁層序注記 (図8対応)

1. 暗褐色土(10YR3/4)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小～小粒状に7%、炭化物を1%含む混層。
2. 暗褐色土(10YR3/3)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を小粒状に2%含む混層。
3. 褐色土(10YR4/6)。
4. 褐色粘質土(7.5YR4/6)。

SK103西壁層序注記 (図8対応)

1. 褐色土(10YR4/6)に褐色粘質土(10YR4/6)を下層に10%、明黄褐色砂質土(10YR8/6)を小～中粒状に2%含む混層。

SK104南西壁層序注記 (図8対応)

1. 黄褐色土(10YR5/6)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小～小粒状に1%含む混層。
2. 黄褐色土(10YR5/8)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小～小粒状に1%、極小粒上の礫を2%含む混層。

SK105南壁層序注記 (図9対応)

1. 暗褐色土(10YR3/4)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小～中粒状に3%含む混層。
2. 褐色土(10YR4/6)。

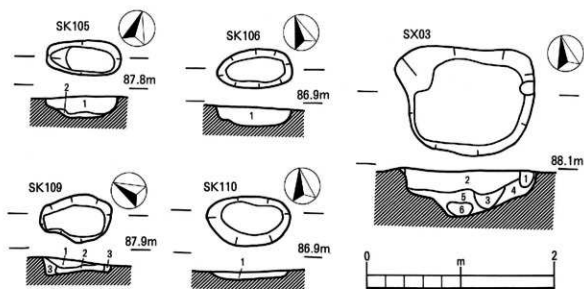


図9 土壌実測図(7)

SK106南壁層序注記 (図9対応)

1. 褐色土(10YR4/6)に明黄褐色砂質土(10YR7/6)を小～極大粒状に25%、小粒上の礫を3%含む混層。

SK109西壁層序注記 (図9対応)

1. 褐色土(10YR4/4)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)の極小粒3%、極小粒の炭化物と灰白色バミス(10YR7/1)をそれぞれ1%含む。
2. 黄褐色土(10YR5/6)に橙色土(7.5YR6/8)を小塊状に5%、極小粒の炭化物を1%含む。
3. 明黄褐色砂質土(10YR6/8)と黄褐色砂質土(10YR5/6)との混層。

SK110南壁層序注記 (図9対応)

1. 明褐色土(7.5YR5/6)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)の極小粒～小粒を3%、灰白色バミス(10YR7/1)を1%、黄褐色砂質土(10YR7/8)を中塊状に2%含む。

SX03南壁層序注記 (図9対応)

1. 褐色土(7.5YR4/4)に明褐色砂質土(7.5YR5/8)を極小粒～小粒状に5%、にぶい黄橙色粘性土(10YR6/4)を極小粒状に1%含む。
2. 橙色粘性土(5YR6/6)に明褐色砂質土(7.5YR5/8)を小粒状に1%含む。
3. 暗褐色土(7.5YR3/3)に橙色粘性土(5YR6/6)を極小粒～小粒状に10%、明褐色砂質土(7.5YR5/8)を極小粒～中塊状に5%含む。
4. 明褐色砂質土(7.5YR5/6)のところに暗褐色土(7.5YR3/3)を極厚い層状に含む。
5. 橙色粘性土(5YR6/6)に明褐色砂質土(7.5YR5/6)を極小粒～小塊状に5%、暗褐色土(7.5YR3/3)を小塊状に3%含む。
6. 黒褐色土(7.5YR2/2)に明褐色砂質土(7.5YR5/6)を極小粒～大塊状に20%、橙色粘性土(5YR6/6)を極小粒状に5%含む。

2) 石 棺 墓

SK91南・西壁層序注記 (図10対応)

1. 暗褐色土(10YR3/4)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)の極小粒を1%含む。攪乱と思われる(根による)。
2. 褐色土(10YR4/4)に石棺材と同じ堆積岩の極小粒を10%、明黄褐色砂質土(10YR6/8)の極小粒を1%、極小粒状の炭化物を1%含む。しまり強く固い。
3. 褐色土(10YR4/4)に灰白色の堆積岩の極小粒を1%、明黄褐色砂質土(10YR6/8)の極小粒を3%含む。
4. 明褐色土(7.5YR5/6)に灰白色バミス(10YR7/1)の極小粒を1%、明黄褐色砂質土(10YR6/8)の極小粒を1%含む。

SX04北・西壁層序注記 (図10対応)

1. 暗褐色土(10YR3/4)に橙色砂質土(2.5YR6/8)を極小粒～中粒状に10%含む。攪乱と思われる。
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3)に橙色砂質土(7.5YR6/8)を極小粒～小塊状に15%含む。

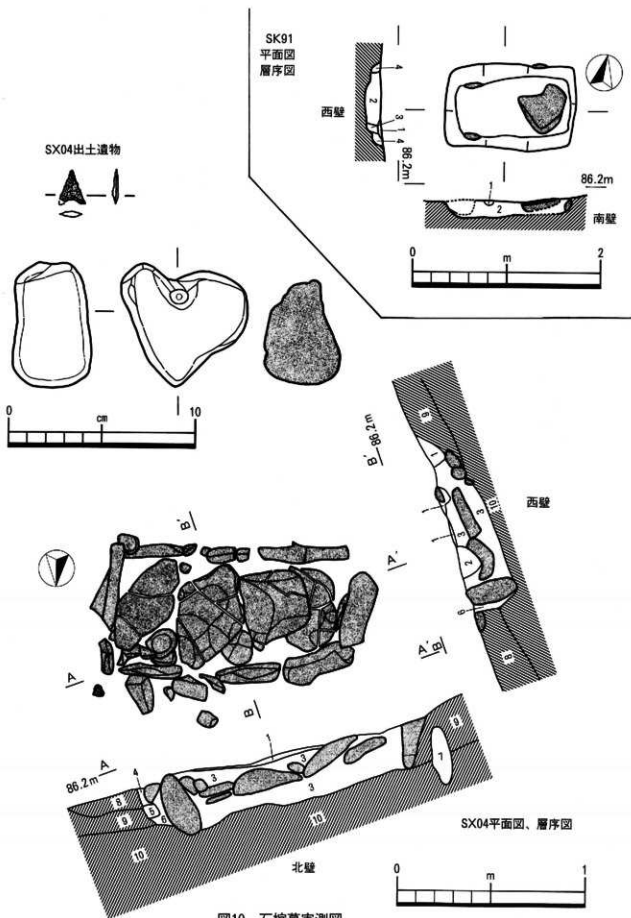
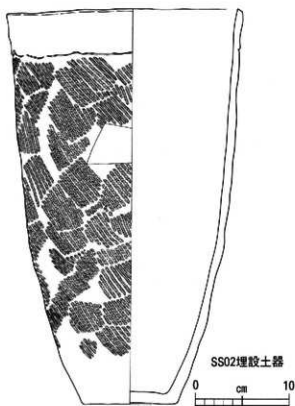
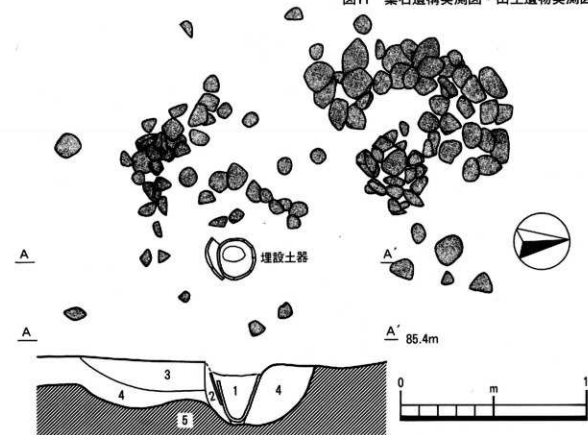


図10 石棺墓実測図

図11 集石遺構実測図・出土遺物実測図



3. 褐色土(10YR4/6)に橙色砂質土(7.5YR6/8)を極小粒～大粒状に5%、極小粒の炭化物を1%含む。
4. 褐色土(7.5YR4/4)の単層。
5. 明褐色浮石ブロック(7.5YR5/8)。
6. ぶい褐色土(6層)(7.5YR5/4)に明黄褐色砂質土を極小粒状に5%、極小粒状の炭化物を1%含む。
7. ぶい褐色土(7.5YR5/4)と褐色土(7.5YR4/3)との5:5の混層に、明黄褐色砂質土(10YR6/8)の極小粒～小粒を3%含む。柱穴痕(斜めに切っている)。
8. 褐色土(10YR4/6)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～小粒状に10%、明褐色砂質土(7.5YR5/8)を極小粒～大塊状に30%含む。
9. 明褐色土(7.5YR5/6)の単層。
10. ぶい褐色土(7.5YR5/4)の単層。地山土。粘性あり。

3) 集石遺構

SS02東壁層序注記(図11対応)

1. 土器覆土。黄褐色土(10YR5/6)。
2. 褐色土(10YR4/6)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を小～中粒状に3%、小粒状の礫を1%含む混層。しまりなし。
3. 褐色土(10YR4/6)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小～極大粒状に10%、小～中粒状の礫を1%含む混層。
4. 褐色土(7.5YR4/4)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を小粒状に1%含む混層。しまりあり。
5. 褐色粘質土(7.5YR4/4)。

2 平安時代

平安時代の遺構としては堅穴建物跡が1基検出された(図12)。しかしながら、工事の中止勧告をした段階で、重機による掘削によって床面すれすれまで覆土も除去されており、カマドの心材として置かれていた自然石も一部は原位置を保てず動いているものも見られた。以下、概要を報告する。

規模は南北方向450cm、東西方向495cmで東西がやや大きな方形の形状をしている。検出段階で最も深い覆土の厚さは30cmであり、ほとんどの覆土は除去されていた。主軸は北から西へ約10度振れており、カマド(図12 SIF01)は南壁の西側より検出され、主体部・煙道部も削平された箇所が多い。床面は一部貼り床の所も存在したが、大部分は粘質のある地山をそのまま使用して構築されていた。建物に伴う柱穴は、明確に検出されず北側の中央部に2個ほど床面のへこみを観察できた。カマドは壁面に直角に据え付けておらず、やや東側に傾く傾向を示し、袖には自然石と土師器甕の破片を充填していた。

床面からの出土遺物としては土師器小形鉢(図15-1)と甕(図15-2・3)の破片、覆土及びカマド東側の柱穴状の落ち込みから甕(図15-4・5・6)の破片、南東隅の自然石の脇から砥石(図12右下)が出土している。出土遺物から、9世紀後半頃の年代を想定できる。

(工藤清泰)

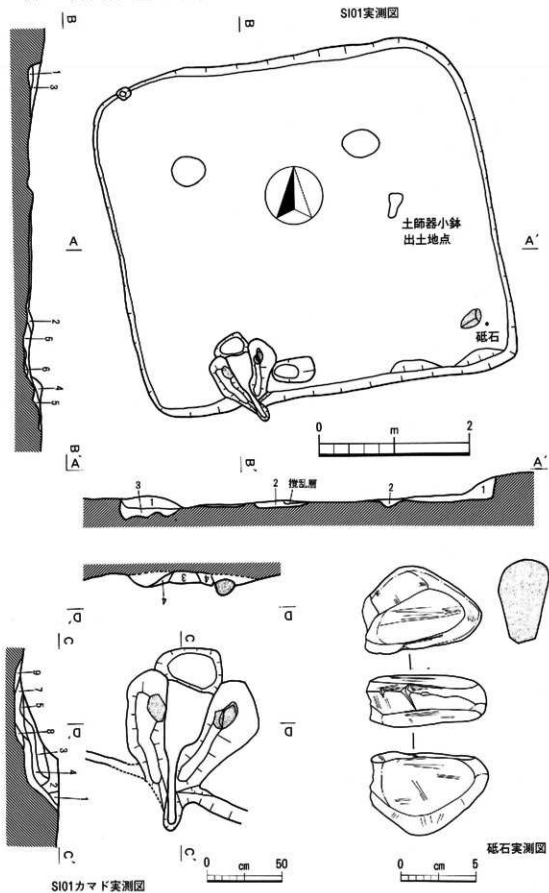
SI01層序注記(図12対応)

1. におい黄褐色土(10YR5/4)に黄褐色砂質土(10YR5/6)を極小粒～大粒状に3%、極小粒状の炭化物を1%、灰白色パミス(10YR8/2)の極小粒を1%未満含む。
2. 褐色土(10YR4/6)と黒褐色土(10YR3/2)との5:5の混層。黄褐色砂質土(10YR5/6)を極小粒状に3%含む。
3. 褐色土(7.5YR4/4)に黄褐色砂質土(10YR5/6)を極小粒～大粒状に5%、におい黄褐色粘土(10YR6/4)を小粒～大粒状に3%含む。しまり強い。
4. 褐色土(7.5YR4/4)ににおい赤褐色土(2.5YR5/4)を極小粒～小粒状に5%、黄褐色砂質土(10YR5/6)の極小粒を3%、極小粒状の炭化物を1%、灰白色パミス(10YR8/2)の極小粒を1%未満含む。
5. 褐色土(7.5YR4/4)ににおい赤褐色土(2.5YR5/4)を極小粒～大塊を30%、黄褐色砂質土(10YR5/6)を極小粒状に3%、極小粒状の炭化物を3%、灰白色パミス(10YR8/2)を極小粒状に1%含む。
6. 赤褐色土(5YR4/6)に赤褐色土(2.5YR4/6)を極小粒～大塊状に40%、極小粒～小粒状の炭化物を5%、極小粒状の黄褐色砂質土(10YR5/6)を1%含む。

SIF01層序注記(図12対応)

1. におい赤褐色土(5YR4/4)の単層。やや粘性あり。
2. 褐色土(7.5YR4/4)に黄褐色砂質土(10YR5/6)を極小粒～小粒状に3%、灰白色パミス(10YR8/2)を極小粒状に1%、極小粒の炭化物を1%含む。
3. 褐色土(7.5YR4/4)に黄褐色砂質土(10YR5/6)を極小粒状に1%、灰白色パミス(10YR8/2)を極小粒状に1%、極小粒の炭化物を1%、におい黄褐色粘性土(10YR5/4)を極小粒状に10%含む。
4. 赤褐色土(5YR4/6)に黄褐色砂質土(10YR5/6)を極小粒状に1%、炭化物を極小粒状に1%含む。
5. 明褐色土(7.5YR5/6)に極小粒状の炭化物を1%含む。
6. 褐色土(7.5YR4/4)に黄褐色砂質土(10YR5/6)を極小粒状に1%、極小粒～小粒の炭化物を3%、灰白色パミス(10YR8/2)の極小粒を1%含む。
7. 赤褐色土(5YR4/6)に極小粒状の炭化物を1%含む。
8. 褐色土(7.5YR4/6)に極小粒の炭化物を3%、におい黄褐色粘性土(10YR5/4)を極小粒状に10%含む。
9. 褐色土(7.5YR4/6)に極小粒の炭化物を1%含む。

図12 平安時代の堅穴建物跡実測図



10. ぶい褐色土(7.5YR5/4)に灰白色バミスを極小粒状に5%、黄褐色砂質土(10YR5/6)を極小粒状に1%含む。

IV 出土遺物

1 土器 (図13・写真19-(1), (2))

今年度の発掘調査では、遺構に伴って出土する土器が少なく、表採品が主体をなした。遺構から土器片が出土する場合でも、弥生時代の土壙墓と思われるSK12から縄文時代中期の土器片が出土するなど、長期間にわたる遺跡周辺の使用が考えられることから、遺構の年代観と出土遺物がそぐわない場合も生じている。

縄文時代前期の深鉢胴部片 (図13-5) はSK28からの出土で、付加縄文を施した個体である。

縄文時代中期の遺物としては、円筒上層b式時の口縁部に近い文様帯 (図13-2、SK12からの出土) 部分や円筒上層c式 (図13-3、SK20からの出土) が遺構覆土に混入している。

縄文時代後期初頭の土器は、SK26出土のもの (図13-4)、SK31出土のもの (図13-7)、SK43出土のもの (図13-8、9)、また表採品は多数見られる。拓本 (図13-13、14、15) はその一例である。

縄文時代晩期の土器破片は遺構からの出土はなく、表採品も浅鉢形土器の破片が数点のみである。拓本 (図13-25、26) も晩期終末の破片と思われる。

弥生時代の土器片は遺構及び表採品ともに見られた。SK101からは天王山式並行の壺形土器片 (図13-11、12) が出土している (注1)。また表採品でも深鉢の一部 (図13-16~21)、浅鉢の口縁等 (図13-22~24) など弥生時代後期の土器片が出土している。

2 石器 (図14・写真19-(3), (4))

平面実測図中黒丸および黒三角のドットは、それぞれ玉と石鏃を表している。石鏃は、無柄のものと同柄のものに分かれる。計測値については表2で示す。出土状態の中で特異な例として、SK12 (図3) から9個の石鏃 (図14-2~10) が出土した。床面直上に置かれた石鏃は、南北に並ぶように検出しており、何らかの儀礼的行為のあったことが推察できる (注2)。

石斧 (図14-15) は表採品である。

玉は、SK37から出土した2点 (図14-23、24) が硬玉製であり、他の玉は緑色凝灰岩製である。SK05から出土した5点 (図14-18~22) やSK81から出土した6点 (図14-31~33) のように複数の出土事例が多く、玉を赤色紐状製品で繋いでいる状態で出土した例も確認された。

3 赤色紐状製品

土壙墓総数の1/4ほどから粉末化した赤色顔料や赤色加工された紐状の製品が出土している。粉末化した赤色顔料は、紐状製品が粉化したものかベンガラ等の赤色粉末を散布した

ものかは確認できなかった。

一方、赤色紐状製品と仮称しているものは、ベンガラと樹脂? を含ませた糸状の繊維を紐状に束ねた製品を指しており、6基から出土している。検出当初は、平面的な断面形状から「イグサ」的な草や薄い樹皮を想定した。しかし、玉の孔内に残された繊維及び紐状製品の内部(中心部付近)の顕微鏡写真では、断面形は $0.5 \times 0.8\text{mm}$ (縫い針の穴程度)に裂いた植物の繊維を用いており、長方形または角のある楕円の断面形を呈することがわかった。緑色凝灰岩製の玉には、この繊維に撚りをかけないで5本から7本程度束ねて固めたものを通して。赤色紐状製品は、この繊維を数十から数百本束ねたものである。ただし、繊維の有機質分は腐食して保存されておらず、あたかも中空の植物の茎に見て取れる。この種の遺物は、県内では六ヶ所村上尾駮(2)遺跡や板柳町土井I号で報告されており、県外では同様の糸玉が北海道忍路土場遺跡や新潟県加治川村青田遺跡ほか、数遺跡で検出されている(注3)。これらが同じ物か否かは比較できないが、ほぼ同時期といえる縄文時代晩期に広い範囲で同様の装飾方法(技法)があったことになる。

この紐状製品は、一見、輪を作っているように見えることからベルトや首飾り、ヘアバンド等様々な用途が考察されるが、

- ① 撚りをかけていない繊維を束ねていること。
- ② 1連の輪で見つかる土壌よりも、複数で検出するものが多いこと。
- ③ 緑色凝灰岩製の玉を通して輪の一部を飾っていること

などから装飾的な様相が強いと思われる。しかし、これが日常の衣服等に由来するものなのか、葬送儀礼等の通過儀礼の際に用いたものなのかは不明であり、今後の検出例の増加を待ちたい。

また、今回赤色紐状製品と呼んだが、撚りをかけない状態のものを「糸」や「紐」と呼べるのかも含めて、意図的に撚らずに使用するこれらの製品について名称を検討してゆきたい。

4 藍胎漆器

SK11(図13)出土の漆器は、平成13年度の調査で検出した遺構中央近くから出土したもので、直径12cmほどの小ぶりな浅鉢形を呈し、藍胎漆器特有のカゴの編み方が明確にわかる。内外面共に赤色で、幅1~2mmの竹(葦様の物かもしれない。繊維方向に目がみとれる)を編んだカゴに漆をかけている。目があまりに細かいので素地はカゴというよりも布状の纏物に見える。側立する形で出土し、上半部は土圧でひしゃげていた。縄文時代晩期と推測される。

SK19(図14)出土の漆器は、試掘調査から本調査への契機となった遺物で、平成12年度の調査で検出した。表面赤色を呈する直径30~35cmほどの円形で、遺構東側に伏せた状態で検出した。出土時は藍胎漆器として発表したが、木胎の可能性もあることから暫定処理をしながら分析をした。結果、破片からは、藍胎漆器のカゴの目が確認され、当初の発表どおり藍胎漆器であることが判明した。中心部には、方形の台がついていた可能性もあるが、素地自体は腐食

し、漆器皮膜のみ残る状態であったため確認は取れなかった。SK11と同時期の縄文時代晩期の可能性が高い。

5 その他の遺物

SK33からは、魚類の椎骨が2点出土した(図14-16, 17)。この椎骨は、①アブラザメやネズミザメの椎骨と思われる。②縄文時代の遺跡からはよく検出される。③軟質であるため装飾品としては使わないことも多い(注4)ものである。骨の加工痕からは、周辺部は磨耗しているものの側面に明確な窪みや段が残っておらず耳飾り等の目的があって使用したか否かは不明である。

表2 出土石鏃計測表(単位: mm, g)

番号	出土遺構	長さ	幅	厚さ	重量	図版番号	備考
1	SK10	17.0	13.7	3.0	0.51	図14-1	
2	SK12	36.5	12.3	4.1	1.20	図14-2	
3	◇	27.3	12.5	4.5	1.45	図14-3	
4	◇	28.1	12.8	4.1	1.23	図14-4	
5	◇	32.0	14.4	3.9	1.93	図14-5	
6	◇	29.6	14.4	5.1	1.53	図14-6	
7	◇	20.9	13.6	4.1	1.07	図14-7	
8	◇	37.2	12.2	4.6	1.68	図14-8	
9	◇	25.6	13.8	4.2	1.27	図14-9	
10	◇	36.5	14.3	4.8	1.42	図14-10	
11	SK14	14.3	10.5	5.0	1.15	図14-11	
12	SK71	37.2	16.4	7.6	3.94	図14-12	
13	SK97	35.2	18.9	5.2	1.98	図14-13	
14	SX04	18.3	18.5	2.3	0.38	図10	

表3 出土玉計測表(単位: mm, g)

番号	出土遺構	直径	孔直径	厚さ	重量	図版番号	備考
1	SK05	4.0	1.0	1.7	0.01	図14-18	
2	◇	5.0	1.0	3.5	0.06	図14-19	
3	◇	5.5	1.0	4.0	0.08	図14-20	
4	◇	5.0	1.0	4.0	0.08	図14-21	
5	◇	4.5	0.8	3.7	0.02	図14-22	
6	SK17	6.3	1.2	5.0	0.16	図14-25	
7	◇	6.5	1.0	4.9	0.18	図14-26	
8	◇	6.0	1.0	5.0	0.11	図14-27	
9	SK37	8.5	3.5	4.5	0.47	図14-23	ヒスイ製
10	◇	8.5	3.5	5.0	0.54	図14-24	ヒスイ製
11	SK58	6.0	1.9	4.3	0.10	図14-28	
12	◇	6.5	1.3	4.5	0.12	図14-29	
13	◇	8.5	1.0	5.5	0.39	図14-30	
14	SK81	7.0	1.0	5.5	0.21	図14-31	

15	SK81	6.0	1.2	3.0	0.06	図14-32
16	＊	6.5	—	4.0	—	図14-33
17	＊	6.5	—	5.0	—	図14-33
18	＊	7.0	—	5.0	—	図14-33
19	＊	5.0	—	3.5	—	図14-33

- ※ 注1 調査指導員の葛西勲青森大学考古学研究所長からご教示をいただいた。
 注2 弘前大学名誉教授の村越潔氏から先端の方向性や全体の位置関係について確認するように指導を受けたため確認したが、先端の向きについて規則性は見られなかった。
 注3 青森県埋蔵文化財調査センターの太田原潤氏からご教示を受けた。
 注4 五所川原市教育委員会生涯学習課の藤原弘明氏からご教示を受けた。

小 結

今回は、遺跡範囲内の南側部分、山地から津軽平地に張りだした後線上に形成された遺構群を調査した結果となった。遺跡内容は、縄文時代後期・晩期、弥生時代及び平安時代の複合的な墓域であった。石棺墓や一部の土壌墓など、時期の推定できる遺構は少なく、規模の多様さ、出土遺物が縄文時代前期のものから弥生時代までと、時期の確定は難しい。現時点での考察よりも、さらに時代幅の広がる可能性もあり、土壌墓の分析をさらに進めなければならない。

また、粘土層により真空パック状態に近かったためか藍胎漆器が2点も出土した。標高90m付近の土壌墓としては画期的なことであり、縄文時代晩期の生活・服飾・技術及び埋葬（通過儀礼）について考えさせられる調査となった。

赤色紐状製品については、元となる植物の種類までは分析できなかったが、1m以上にわたり現代の木綿糸程度の太さの繊維を作り、燃らずに束ねて紐として用いている。燃って作られた通常の紐が、強度をもった実用的な紐・縄・綱であるとすれば、燃らずに束ねて赤色処理したものは、その繊維の流れが直線的で、強度には欠けるが通常の紐と異なる装飾性の強い製品であったと思われる。この木綿糸程度の細さの繊維は、縄文時代晩期の壺や浅鉢の胴部に細かい筋を施文している原体を考慮しても日常的に利用しているものであったと思われる。

ただし、赤色遺物・赤色紐状製品などの名称は、あくまでも仮称である。これは、

- ① 用途が特定できないこと。
- ② 燃りかける「糸」「紐」「縄」などの製品概念（「繊維」も燃るという前提がある）と燃りかけない製品の名称を同一化できるか。
- ③ 遺跡で出土している糸玉の様に編物の原料として捉えられる半製品ではなく、そのまま使用する「製品」とした場合の両者の差異をあらわせるか。

などの問題があり、名称・用途については今後も検討を重ねていかなければならない。

今回の調査は、小規模、短期間のものであったが、縄文時代から弥生時代にかけての葬制の変遷や副葬品など出土遺物の諸問題、周辺の同時期の遺跡との関係など今後に研究課題を残したものととなった。

最後に、土壌墓について次の仮定を立ててみた。遺構についての情報を整理しないうまま、長軸方向のみからの分析は危険であることを承知で、4時期に大分してみる(図15)。

- ① 1期(N-70~80° -W) 石棺墓と軸線を同じくするもので、古い時期の遺構と思われる。

集石遺構とあわせ考えると、遺構は西側斜面方向から後線上に主に西寄りに配置されている。赤色遺物と玉が出土する遺構がみられる。

- ② 2期(N-60~70° -W) 1期の遺構の東側、斜面の高いほうに遺構が広がる。赤色遺物、赤色紐状製品、玉の出土が顕著である。又藍胎漆器の出土した2遺構もこの時期に入る。1、2期ともに、東西の斜面を意識した方向と思われる。

- ③ 3期(N-90~100° -W) 従来の遺構間にも新たに遺構が配置されるが、全体としては、北側斜面方向に規則的に配置される。赤色遺物と、赤色紐状製品は出土するが、数量的には少なくなり、玉も出土しない。

- ④ 4期(N-135~145° -W) 全く軸方向の異なるもので、赤色遺物は検出されるが、その他の遺物等についてはほとんど検出されることがない。1、2、3期の外側(斜面の落ち際)に遺構を形成している。3、4期は北側の斜面に近接してくることから北斜面に対する方向性を有してくるのではないかと思われる。

この仮定を時間的な差や、分類とは毛頭言えないが、数少ない遺構の新旧関係と整合性を持っているようである。今後、さらに遺構規模や出土遺物等様々なアプローチからの検討を進めたい。(木村浩一)

2 平安時代

平安時代の出土遺物としては堅穴建物跡から出土した土師器と石製品がある。

図15-1は器高8.0cm、底径6.9cmの輪積み成形痕が明瞭に残る土師器小形鉢であり、口縁の一部が片口状に広がる。胎土は多量の砂・石英を含み、底部を平底状にケズリ調整した部分に砂の吹き出しが顕著に認められる。外面は縦位のケズリ調整、内面は横位の指ナデ調整で部分的にススの付着が認められる。SI01床面から出土した。

図15-2は、広口壺形を呈すると推定される口縁部破片。表面は白っぽい色調で断面には黒色の焼成ムラが認められ、胎土には多量の砂が混入している。横位の指ナデを基本とする調整が認められる。SI01床面から出土した。

図15-3は、輪積み成形の口縁が大きく外反する甕で、外面は縦位のケズリを基本としながらも口縁下には横位のケズリの見られ、ケズリでめくり上がった粘土もそのまま焼成されている。内面は横位の指ナデ調整を行い、胎土には多量の砂を含んでいる。

図15-4は、輪積み成形の口縁の外反が少ない甕で、外面は縦位のヘラナデ、内面は横位のハケメ調整が行われ、胎土の多量の砂を含んでいる。

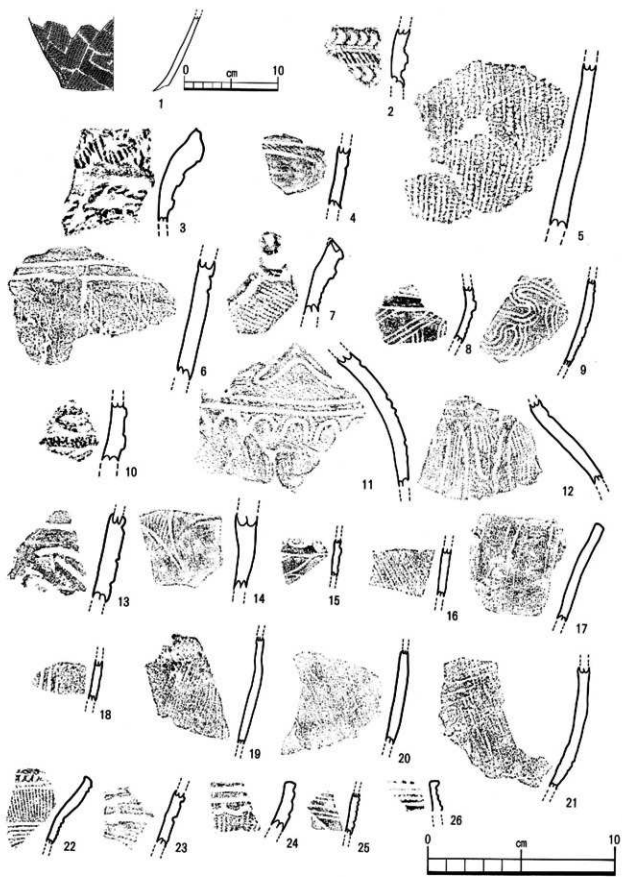


图13 繩文土器実測図、他

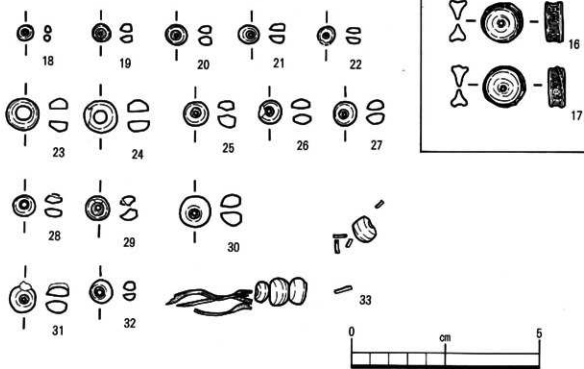
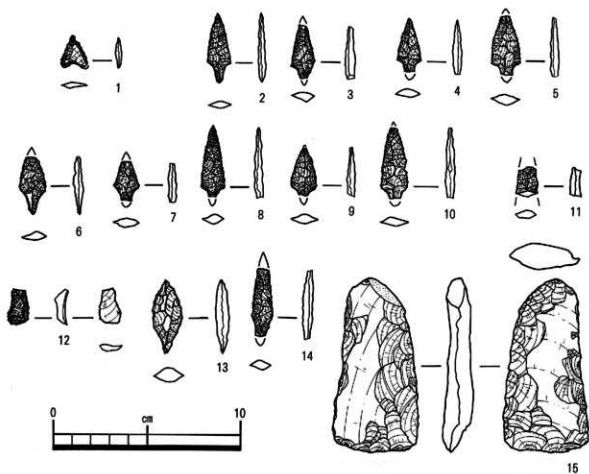


图14 石器·玉類実測図

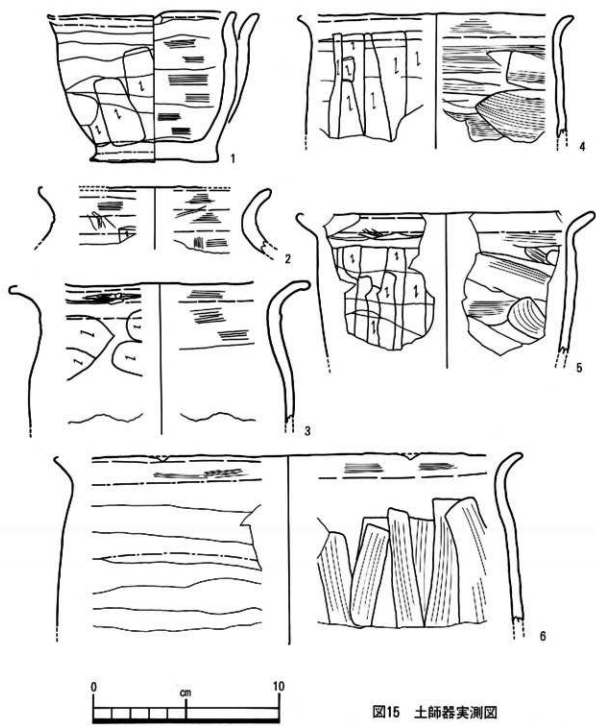


图15 土師器実測図

図15-5は、輪積み成形の口縁がくの字状に外反する甕で、外面は縦位のヘラナデ、内面は横位のハケメ調整が行われ、胎土の多量の砂を含んでいる。内面にススの付着が認められる。

図15-6は、輪積み成形の口縁が外反する甕で、ロクロによる調整も推定される。外面は特に輪積み痕と横位の調整痕が入り組み口縁部分だけはロクロによる調整をしていることが確認できる。内面は縦位のハケメ調整、胎土は前述の土師器ほどではないが若干の砂が含まれる。

図12の右下に示した砥石は、長さ8.0cmで表裏2面に砥面が認められる。砥面は中央が窪んだ状態になっていることから、鎌などの仕上げ砥に使用したものであろうか。

(工藤清泰)

V ま と め

本遺跡から検出された土壌墓の年代決定は、困難な面が多い。出土遺物もなく、明確な副葬品もない状況では、土壌墓としての性格認定に関しても不確実なことはゆがめない。そこで、これまでの研究成果を基にして平野遺跡の土坑を土壌墓と推測し、時期の特定を試みたい。

浪岡町における縄文時代の墓に関しては、源常平遺跡の土壌墓が特徴的である。成田滋彦の分析によると(注1)、同遺跡から検出された土壌墓30基の内、遺物が出土した土壌墓は半数の15基であり、耳飾り、玉類、ベンガラ、土器片、石器などのほか漆器の出土(第4号土壌墓)が報告されている。この漆器は平野遺跡から出土した漆器と同種の可能性もあり、ベンガラの分布が一定の範囲で検出されるのは赤色柱状製品などの検出例に類似している。土壌墓の形態に関しても長楕円形・円形・洋梨形の三形態に分類し、平野遺跡の内容と大きな相違は見られない。

源常平遺跡は、浪岡川を挟んで対峙する丘陵上に位置し直線距離にして約1km離れている。そして同遺跡の土壌墓は、約50m離れた位置に存在する竪穴住居跡(晩期初頭の年代)や土壌墓の形態及び出土遺物のあり方から縄文時代晩期の土壌墓と推測している。

平野遺跡は、近接して縄文時代後期前半の土器棺を出土した松山遺跡が南東の丘陵下に位置し、縄文時代晩期前半を主体とし一部弥生時代の土器片も採取されている羽黒平(3)遺跡が南西の丘陵下に位置している。この地域における後期や晩期の遺跡の立地から、住居域をはじめとする集落形成の場所と、その場所から一段高い丘陵上に墓域を形成する可能性は極めて高いものと推測される。特に羽黒平(3)遺跡は、平成6年度の試掘調査やその後の調査において住居跡も検出されており、なおかつ過去に丘陵下の泥炭地を発掘した時に多量の土器等が出土している。出土した土器類や土面・土偶などの文化遺物を見ると、同遺跡は浪岡地域において細野遺跡と共に晩期前半を代表する遺跡であったと予想される。

山田康弘は、全国の縄文時代人骨の出土例を集成し(注2)、青森県を含む第二地域の状況を次の通り資料提示している。

中期(11例)…体全面向きⅠ類(一般的な仰臥)7例、Ⅲ類(左側臥)2例、Ⅳ類(俯臥)1例であり、肘関節や腰を伸ばす例も出てくるが、前期に引き続き各関節を強く屈曲する傾向が認められる。

後期(13例)…Ⅰ類9例、Ⅱ類(右側臥)4例、で肘関節や腰で直角よりも大きい角度を持つ事例の割合が多くなるが、膝関節を強く屈曲させる点は同じである。

晩期(84例)…Ⅰ類64例、Ⅱ類1例、Ⅲ類6例、Ⅳ類4例、であり肘関節と腰を伸ばした事例は多くなるが、膝関節は鋭角のものが多い。

以上の集成だけを見ると、各時期において仰臥埋葬が最も多く、特に晩期の例が多い。今回平野遺跡で検出されたSK19より出土した藍胎漆器は倒立した状態で出土しており、なおかつ規模からみて伸展葬の上で頭部位置に安置した可能性も高いため、仰臥埋葬時の特殊な埋葬儀礼に属すると想定できる。赤色紐状製品を装飾品とみて、その出土位置を見ると、仰臥埋葬における頭部・胸部・腰部の装飾品として使用された可能性がもっとも大となる。前述の縄文時代小結でも述べたように、石棺墓の軸に対応する土壌墓と、SK19のように藍胎漆器を出土する土壌墓では軸線の相違と赤色遺物・玉類の出土例から時間差が想定され、赤色紐状製品をはじめとする赤色遺物の出土量もSK19以降の土壌墓に多くなるようである。

平野遺跡から出土している土器は縄文時代前期・中期・後期・晩期及び弥生時代であることから、これらの時期内に土壌墓の年代を想定できるとすると、源常平遺跡の類例や石棺墓・集石遺構が構築された後に、楕円形を主体とする土壌墓が構築されることから、主体年代は晩期とみて大誤ないであろう。

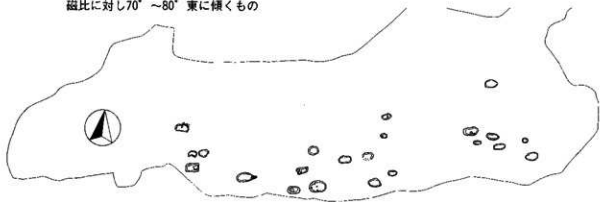
以上のことから、石棺墓・集石遺構等は土器棺を出土した松山遺跡と同様に後期前半、藍胎漆器・赤色紐状製品・玉類などを出土し楕円形を基調とする土壌墓は、羽黒平(3)遺跡に対応する縄文晩期前半、円形を基調とする土壌墓は弥生時代の所産であると推定できる。

(工藤清泰)

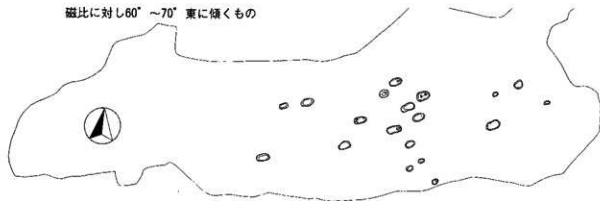
(注1) 青森県教育委員会 1978 『青森県埋蔵文化財調査報告書第39集 源常平遺跡発掘調査報告書』
(注2) 山田康弘 2001/11・12 『縄文人の埋葬姿勢(上・下)』『古代文化』第53巻第11号・第53巻第12号

図16 土墳墓の長軸方向比較図

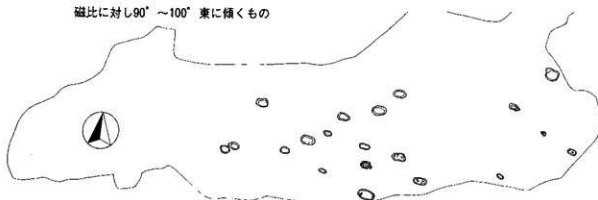
磁比に対し70° ~80° 東に傾くもの



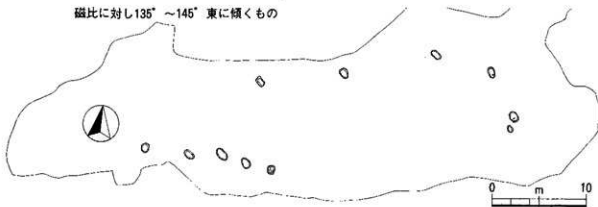
磁比に対し60° ~70° 東に傾くもの



磁比に対し90° ~100° 東に傾くもの



磁比に対し135° ~145° 東に傾くもの



発掘調査抄録

ふりがな	ひらのいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	平野遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書							
シリーズ番号	第7集							
執筆者名	木村浩一・工藤清泰							
編集機関	浪岡町教育委員会							
所在地	038-1311 青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字稲村101-1 Tel0172-62-1111							
発行年月日	西暦 2002年 3月 29日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号					
史跡浪岡城跡	青森県南津軽郡浪岡町大字五本松字平野207番地30	229	29057	40度43分31秒	140度37分41秒	700㎡	20020604 ～ 20020905	土取りに伴う緊急発掘調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
平野遺跡	縄文時代 墓域・平安時代集落	縄文時代・平安時代	縄文時代土壇墓・石棺墓・フラスコ状土坑・集石遺構 平安時代堅穴建物跡		藍胎漆器 赤色紐状製品 ヒスイ玉 石鏃 土師器		縄文時代の土壇墓から藍胎漆器や赤色紐状製品、赤色遺物が出土している。	



(1) 遺構確認状況
(西から)



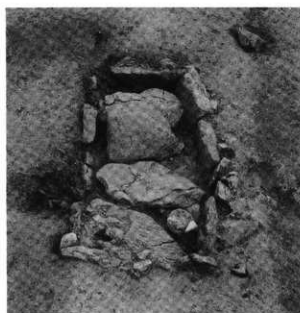
(2) 作業風景
(東から)



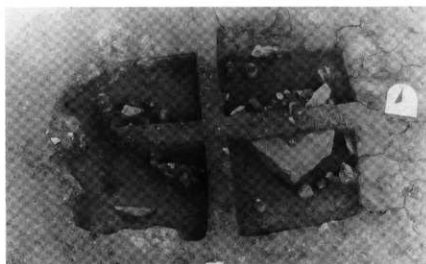
(3) 完掘状況
(東から)



(1) SX04 (石棺墓)
蓋石除去状況
(南から)



(2) SX04検出状況 (蓋石除去前全景)
(東から)



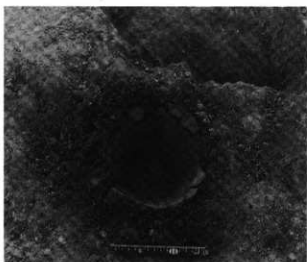
(3) SK91 (石棺墓)
調査状況
(南から)



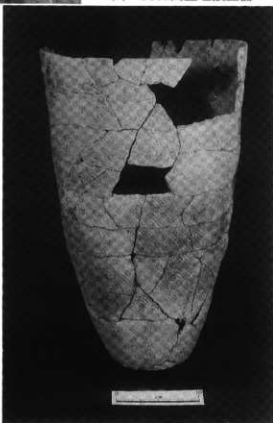
(1) SS02 (集石遺構)
検出状況
(北から)



(3) SS03 (集石遺構) 検出状況
(北から)



(4) SM01 (埋設土器) 検出状況
(東から)



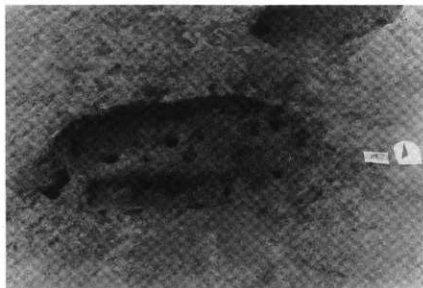
(2) SS02出土埋設土器



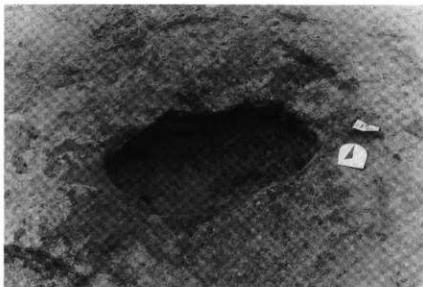
(1) SK01完掘状況
(西から)



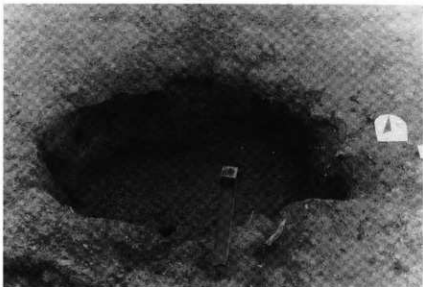
(2) SK03完掘状況
赤色紐状製品検出状況
(南から)



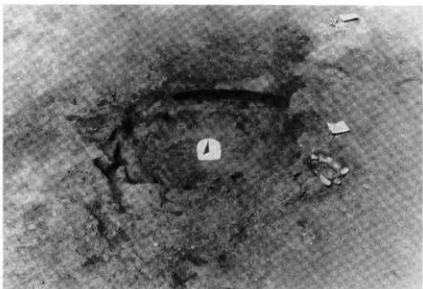
(3) SK04完掘状況
(南から)



(1) SK05完掘状況
(南から)



(2) SK06完掘状況
(南から)



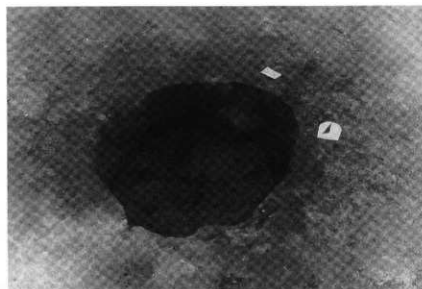
(3) SK07完掘状況
(南から)
(土壇東側SM01)



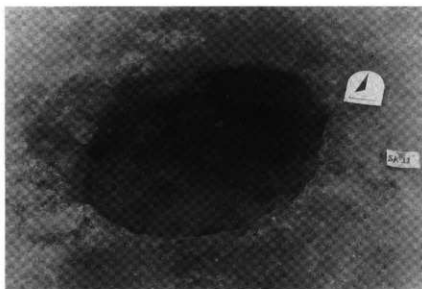
(1) SK08完掘状況
(南から)



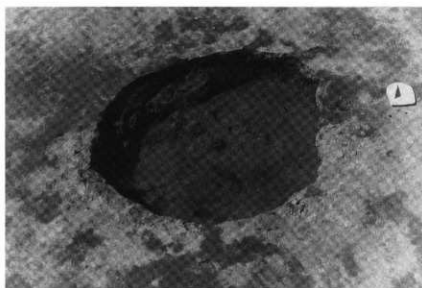
(2) SK09完掘状況
赤色紐状製品検出状況
(西から)



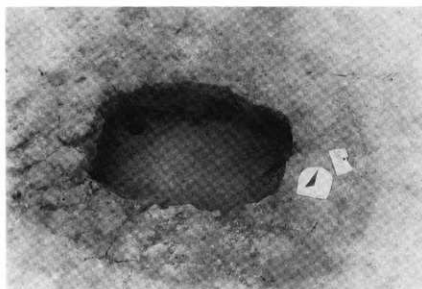
(3) SK10完掘状況
(南から)



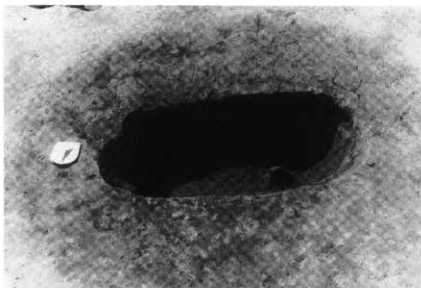
(1) SK11完掘状況
(南から)
(藍胎漆器出土土壌)



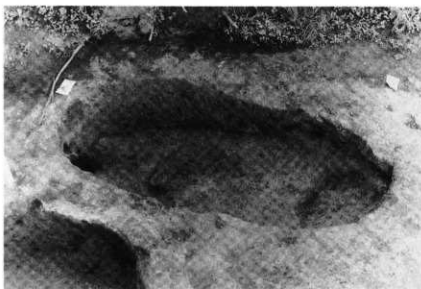
(2) SK12完掘状況
(南から)



(3) SK13完掘状況
(南から)



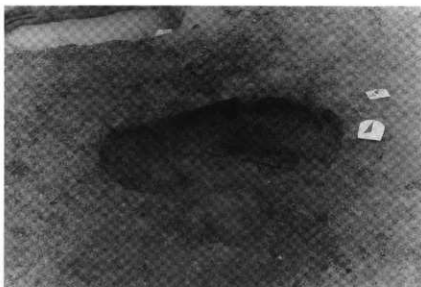
(1) SK14完掘状況
(北から)



(2) SK15完掘状況
赤色紐状製品検出状況
(北から)



(3) SK16完掘状況
(南から)



(1) SK17完掘状況
(南から)



(2) SK18完掘状況
(南から)



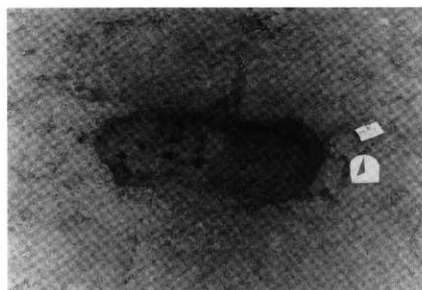
(3) SK19完掘状況
漆器出土状態
(西から)



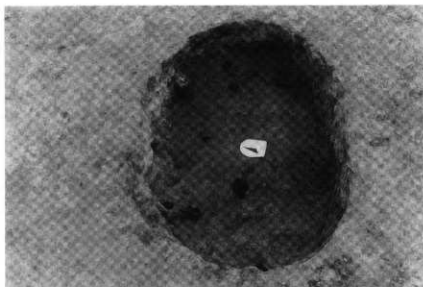
(1) SK20完掘状況
(北から)



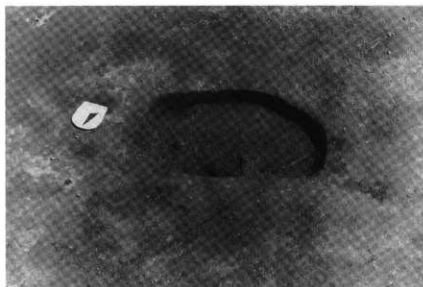
(2) SK21完掘状況
(西から)



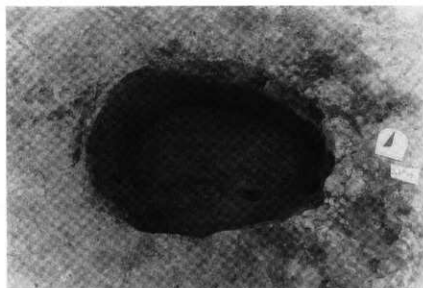
(3) SK22完掘状況
(南から)



(1) SK24完掘状況
赤色紐状製品一部残存
(西から)



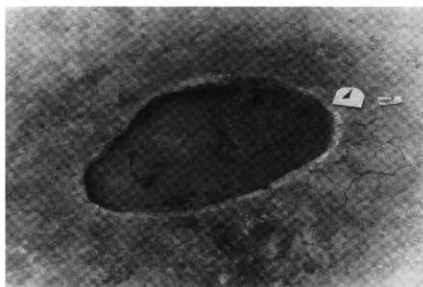
(2) SK25完掘状況
(北から)



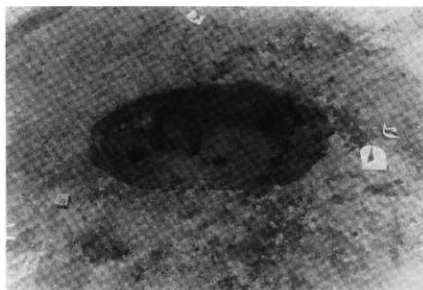
(3) SK27完掘状況
(南から)



(1) SK28完掘状況
(北から)



(2) SK30完掘状況
赤色紐状製品検出状況
(南から)



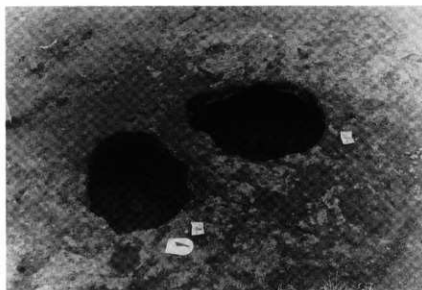
(3) SK31完掘状況
(南から)



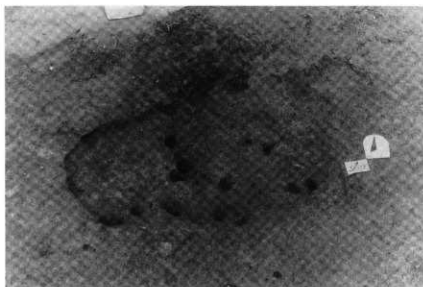
(1) SK38完掘状況
(南東から)



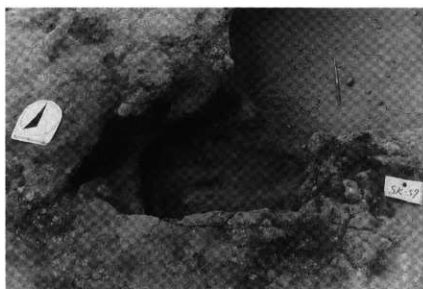
(2) SK40完掘状況
(南から)



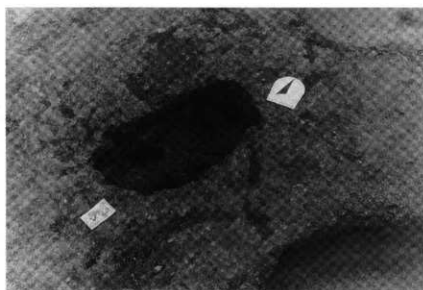
(3) SK42 (右・新)
SK43 (左・旧)
完掘状況
(東から)



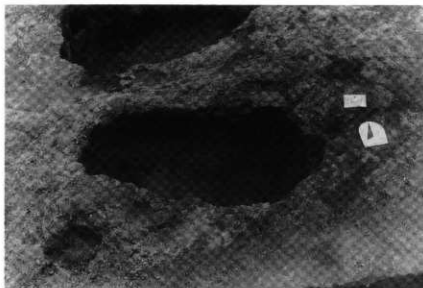
(1) SK58完掘状況
(南から)



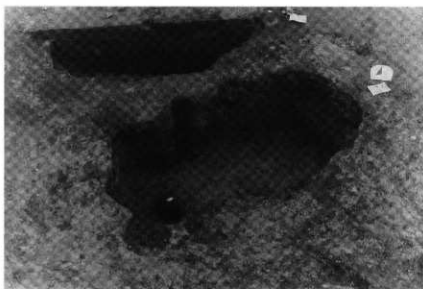
(2) SK59完掘状況
(南東から)



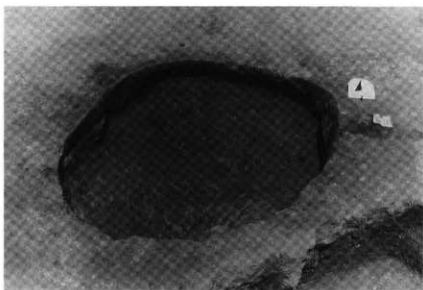
(3) SK60完掘状況
(南東から)



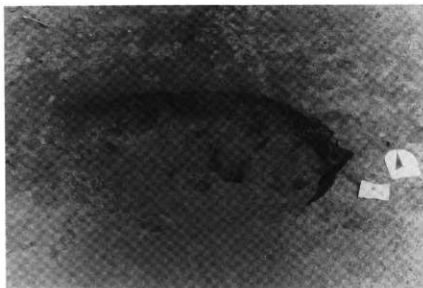
(1) SK71完掘状況
(南から)



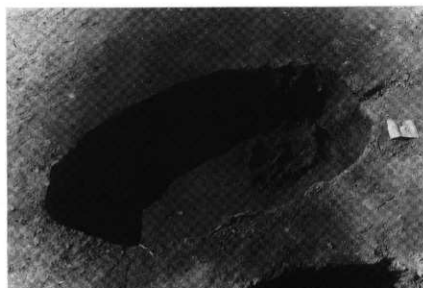
(2) SK72完掘状況
(南から)



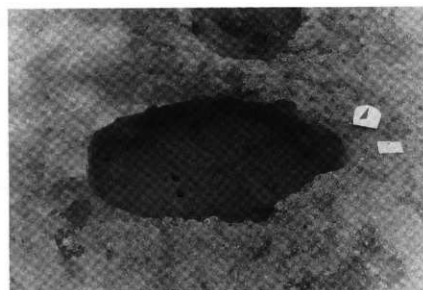
(3) SK73完掘状況
(南から)



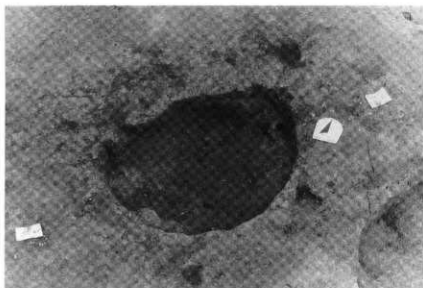
(1) SK74完掘状況
(南から)



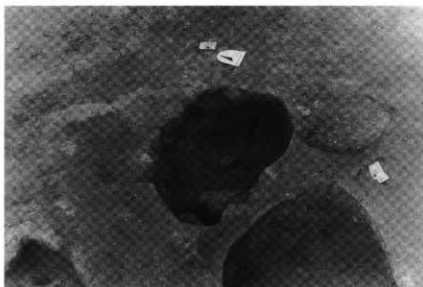
(2) SK81完掘状況
赤色紐状製品検出状況
(南から)



(3) SK85完掘状況
(南から)



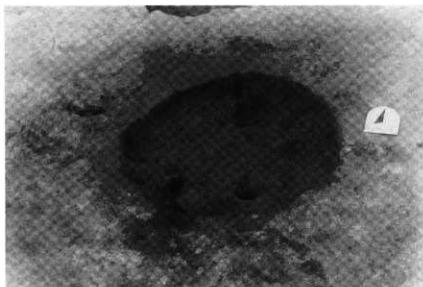
(1) SK86完掘状況
(南から)



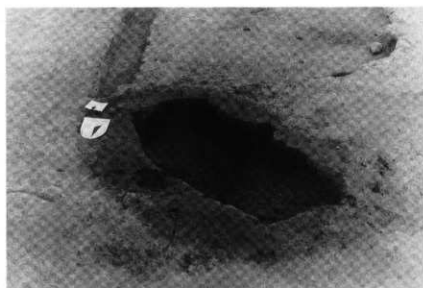
(2) SK97完掘状況
(西から)



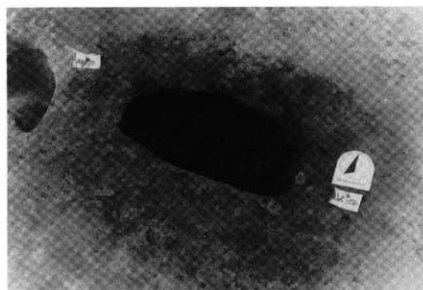
(3) SK101完掘状況
(南から)



(1) SK103完掘状況
(南から)



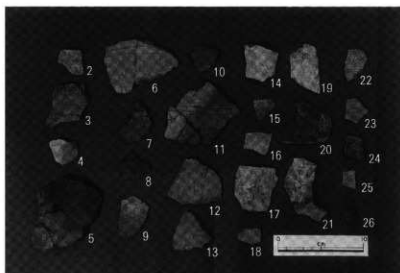
(2) SK104完掘状況
(北から)



(3) SK106完掘状況
(南から)



(1) SM01出土埋設土器

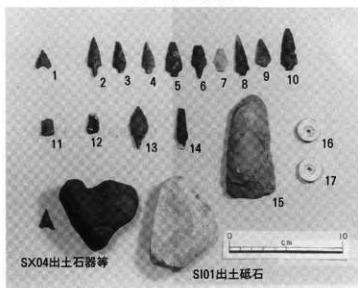


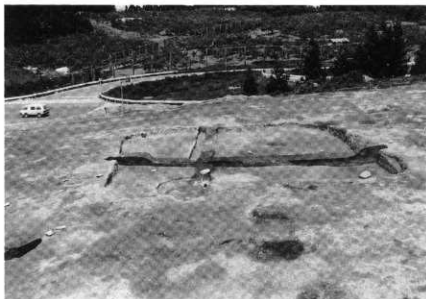
(2) 出土土器片

(4) 出土玉



(3) 出土石器





(1) 左：SI01調査状況
（南から）

(2) 左下：SI01カマド袖
残し状況
（北から）



(3) SI01出土土師器



(4) SI01出土土師器

平成13年度

浪岡城跡（新館地区）発掘調査報告書

XII

I 調査に至る経緯

史跡浪岡城跡の発掘調査は、昭和52年から始まり一時中断の時期はあったものの継続して実施している。昨年からは、「史跡浪岡城跡（新館）保存管理計画書」に基づき、新館地区の現状変更に対応して少しずつ発掘調査を実施している。本年度は、住宅地の開発行為を予定している地点に関して、事前に遺構・遺物の有無を確認するため、以下の発掘調査要項に基づき実施した。

なお、土地所有者には保存管理計画の趣旨から新規の宅地建設に関しては、史跡地内でなく別の場所に依頼している状況にある。

平成13年度 史跡浪岡城跡（新館地区）発掘調査要項

1 調査の目的及び経緯

浪岡城跡の史跡指定地内である新館地区において、住宅移転後の宅地を重機により整地し、できれば住宅を建設したいとの希望が所有者から口頭で伝えられたため、埋蔵文化財の有無を確認し、記録保存を目的として発掘調査を実施するものである。

2 調査地及び所有者

調査地番等 青森県南津軽郡浪岡町大字五本松字松本33-2 他
所有者 青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字前田11-1
有馬嘉蔵

3 調査面積

約200㎡（対象地及び調査箇所については別添図参照）。

4 調査期間等予定（期間中に所定の日数を行う）

準備作業 平成13年8月20日から平成13年9月2日
調査作業 平成13年9月6日から平成13年10月31日
整理作業 平成13年11月1日から平成13年11月30日
報告書作成作業 平成13年12月3日から平成14年2月28日

5 調査体制

発掘調査指導員 村越 潔（弘前大学名誉教授）
浪岡町教育委員会
教育長 成田清一
生涯学習課長 常田典昭
文化班長 工藤清泰
文化班主任主査 木村浩一（発掘調査主担当）
文化班主査 小田桐勝昭（発掘調査副担当）

図1 浪岡城跡全体図

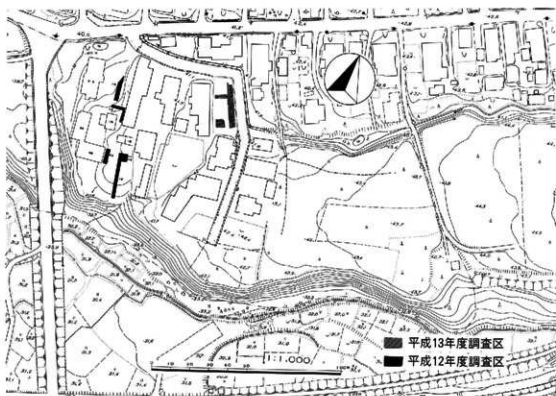
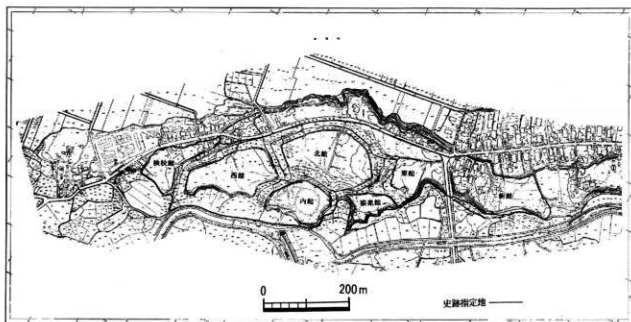


図2 浪岡城跡新館と調査箇所

調査補助員	斎藤とも子
調査作業員	藤本範子・長谷川輝子・乗田キヨエ・成田真佐子・田村広江・ 吉川瑠枝・斎藤エリカ
整理作業員	小笠原聖子・武田秀美

6 調査方法

- 1) トレンチ方式により調査区を設定し、明確に遺構や遺物が検出され次第グリッド方式に変更する。
- 2) 調査箇所が私有地であり、宅地として利用されてきたため攪乱されていることが予想される。このため、中世遺構面の確認を最優先する。
- 3) 測量（実測）は、遺り方と平板測量を併用する。

- 4) 遺構略称は、従来までの調査と整合性を持たせるため、国立奈良文化財研究所方式をとる。

例 掘建柱建物跡 SB、溝跡 SD、竪穴建物跡 ST、井戸跡 SE、不明遺構 SX

- 5) 遺物略称は、従来までの調査と整合性を持たせるため、浪岡城跡発掘調査方式をとる。

例 陶磁器・土器類 P、金属製品 F、石製品 S、銭貨 C、木製品 M、自然遺物 NR

7 調査報告書の作成

調査報告書は「浪岡町文化財紀要」に掲載し、成果を公表する。

(工藤清泰)

II 調査経過

調査経過に関して日誌を中心に概述する。

平成13年

- 9月6日 調査区を平板にて実測する (1/50)。ベンチマーク (B.M.) の設定。
- 9月12日 表土除去作業。砂利が多くつるはしを使っても作業が進まない。しかしながら青磁等の遺物も出土する。
- 9月14日 遺構確認作業を始める。現代の水道管を敷設したと思われる溝跡 (SD01)、現代の遺物が混在する攪乱遺構 (SX01・SX02・SX03) とともに瀬戸美濃灰陶軸器を出土する遺構 (SX04) も検出。新旧関係をみながら掘り下げを開始する。
- 9月18日 調査区南側の暗褐色土から銭貨4枚出土。溝跡5本確認。
- 9月20日 柱穴群も検出できるようになるが並びは不明。
- 9月25日 SX04から播鉢・骨・不明鉄製品・銭貨等出土。
- 9月26日 SX02を2m掘り下げたところで湧水となる。
- 10月3日 調査区南側を西側に拡張。竪穴建物跡 (ST01) を確認。
- 10月4日 調査指導員・村越潔先生来訪。

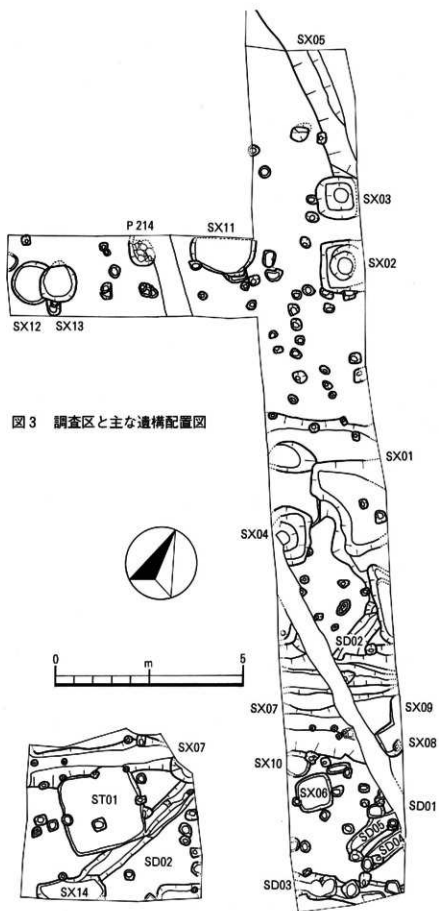


図3 調査区と主な遺構配置図

- 10月9日 SX05確認のため北側の調査区も西側へ拡張。
 10月11日 SX12より白磁・染付等が出土。竪穴建物跡（ST01）の覆土層序精査。
 10月16日 柱穴等の実測開始。調査区南北ラインの層序図作成。
 10月18日 柱穴214を掘り下げると染付・瀬戸美濃灰釉陶器・鉄製品等の出土があった。
 10月23日 SX12・SX13の掘り下げ。
 10月25日 遺構のレベリングを始める。
 10月26日 一部埋め戻しを始め、遺構の実測とレベリングを進める。
 10月31日 埋め戻し終了。器材の撤収。

(工藤清泰)

III 検出遺構

当初の調査面積は200㎡を予定していたが、実際は102㎡にとどまった。これは、道路や宅地として長年使用されてきた土地であるため、碎石敷きやタタキ状にしまった場所が多く、また、表土が薄いために重機等も利用できないためである。中世の土層はすでに削平され、地山を掘り込んだ遺構が残るのみであった。それでも、本調査によって竪穴建物跡1棟、溝跡7条、井戸跡3基、性格不明遺構7基及び100を超える柱穴を検出した。

1 竪穴建物跡 (図5、6・写真2-1(1))

ST01 調査区の南西側で検出。規模は210×210cm、深さ（確認面から）40cmで、北側のSX07に重複してスロープ状の出入り口を設けている。この竪穴建物跡に付随する柱穴は出入り口の両側にある小規模なもののみ確認できた。東西の壁に接する柱穴は、覆土が本遺構確認面からの掘り込みであるため、遺構廃棄（埋め戻し）直後の抜き取りであれば遺構に付随する可能性もあるが、断定はできない。新旧関係はSX07より新、SD02よりも旧である。出土遺物は、覆土から小札（伊予札?）・鉄釘の他須恵器壺片・土師器坏片が出土している。

2 井戸跡

SX04 (図5) 調査区中央付近で検出した遺構で、西側をSD01により半截されており残存状態で150cmの方形を呈する。調査範囲から外れていることもあり、深さは不明である。覆土からの出土遺物は、青磁線描蓮弁文碗胴部片、越前播鉢胴部片、瀬戸美濃灰釉皿、開口通竇、無文銭、鉄滓2点、土師器甕・同坏破片があり、中世の遺構と推察できる。

SX11 (図4) 調査区北半で検出した直径160cmほどの遺構で、調査区外に遺構の1/2が出てしまうため、120cmほど掘り下げた時点で終了した。染付碗胴部片、鉄鍋?、鉄釘、鉄滓、頁岩石核、祥〇〇竇、土師器甕破片が出土している。中世の遺構と考えられる。

SX12 (図4・写真3-3) SX13 (新) と重複しているが、白磁碗、染付皿、鉄鍋、鉄滓

図4 調査区北側実測図・層序図

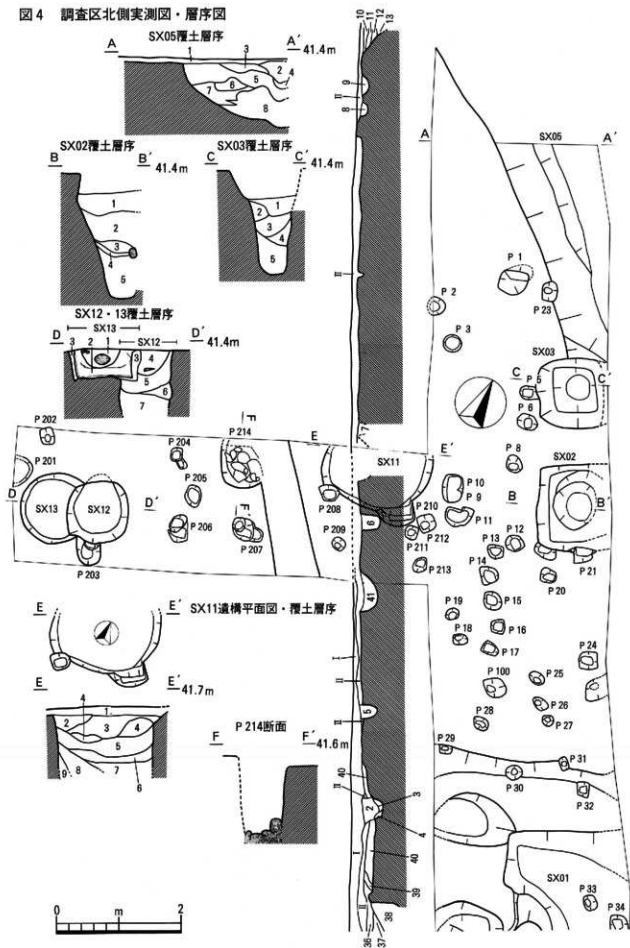
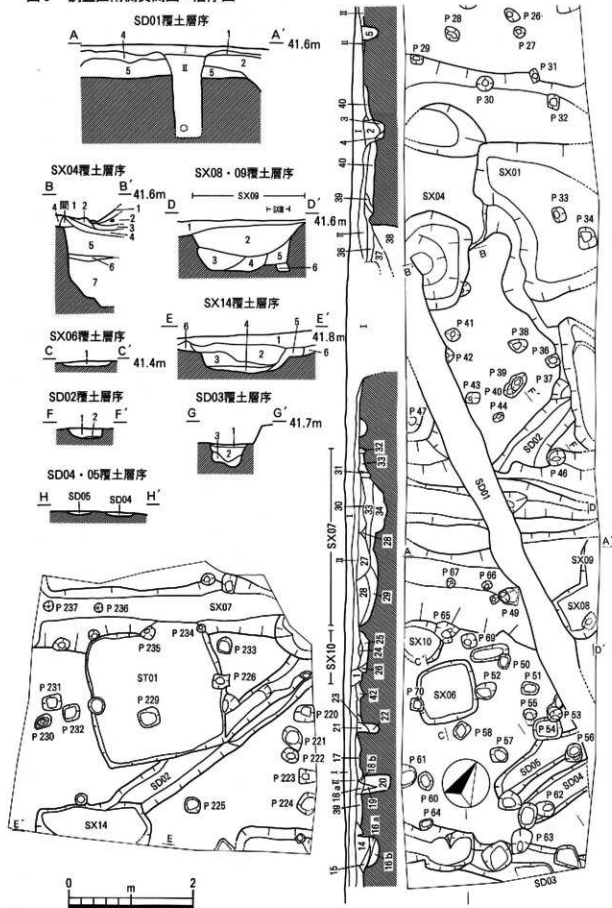


図5 調査区南側実測図・層序図



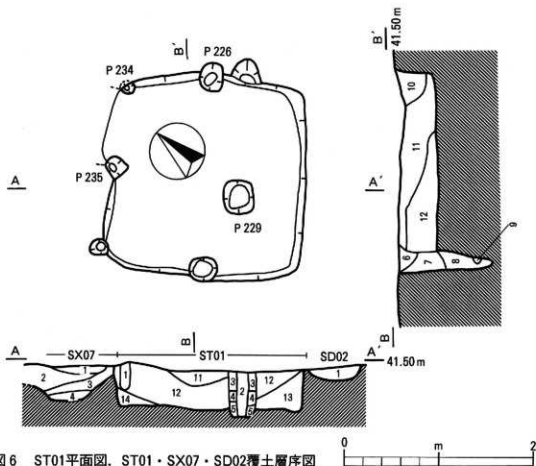


図6 ST01平面図, ST01・SX07・SD02覆土層序図

(流動滓)などの遺物を覆土から出土した。直径100cmの円形を呈し、作業の安全上から100cmの掘り下げで終了した。中世の遺構であると考えられる。

柱穴No214 (図4・写真3-(3)) 確認時にはSD01と重複し、遺構のほとんどが攪乱を受けていたため柱穴として調査を進めたが、石積み一括、白磁、染付、瀬戸美濃灰釉、銅輪、小柄、嘉祐通寶など中世の遺物が出土した。規模は不明であるが、遺構内覆土に石積みの層が見られたため100cmほどの深さで掘り下げを終了している。中世の遺構と考えられる。

3 溝 跡

SD01 (図5) 覆土が碎石となる昭和の水道溝。幅50cm、深さ130cmほどの溝が南東から北西へと延びている。底部には塩化ビニールの水道管が埋設されていた。現在この水道管は使用されていないが、昭和40年代まで現道路と異なる通路があり、その通路と並行して掘削されたものと思われる。出土遺物は覆土から現代陶器、土製人形(髷を結った女性の頭部及び平面的な人形の頭部)がある。

SD02 (図5) 調査区を南北に横切る、幅50cm、深さ15cmほどの溝跡。SX07、ST01よりも新、SD01、SX14よりも旧。時期については不明である。出土遺物は、覆土から不明鉄製品、鉄釘、羽口、須恵器破片、土師器甕破片。

SD03 (図5) 調査区の南端部で検出した柱穴列とそれらを結ぶ溝からなる遺構。溝の規模は

場所により異なるため計測不能。橋列の可能性もある。時期は不明。出土遺物は覆土から鉄鍋・鉄滓・土師器甕（外面ロクロ調整）破片。

SD04・05（図5） SD03の北側に接して検出した平行に掘り込まれた遺構。幅50cm深さ5cm程度の小規模な遺構であり、時期不明出土遺物はない。

SX05（図4・写真2-2） 調査区の北端で検出した遺構で、溝というよりも浪岡城跡で掘として用いていた鶯谷堰（さぎやせき・さんやせき）の旧流路と思われるものである。現在は、堰の幅が1mほどのコンクリート製になっているが、この流路から推定すると、旧鶯谷堰は幅10mの水路（堀）となる。明治20年代の公園には調査対象地の北側に堰の斜面と思われる区画がみられるが、昭和40年代初めの地形図ではこの場所に家屋が建築されていることから、近代から戦後にかけて堰の一部埋め立てが行われ、現在は、その場所を道路として用いていることが判明した。SX05が鶯谷堰の旧流路であれば、浪岡城跡の縄張りを考える上で重要な遺構である。出土遺物は覆土から染付碗（涼州窯系）、越前甕か？、床面直上から土師器甕・同坏破片・須恵器坏片がある。

SX07（図5） 調査区の南側で検出した浅く幅の広い溝状遺構。二重掘的な構造を呈している。幅は全体で3mほど、120～130cmの堀が平行に2条延びるものである。時期は不明ながらST01よりも古いことから中世及びそれ以前の遺構と思われる。出土遺物は、土師器甕・同坏破片、せん状土製品、擦文土器甕副部片。

4 不明遺構

SX01（図5） 範囲の不明な遺構でSX04よりも新である。出土遺物は、覆土から4点、近世磁器1点、土師器甕部片3点。

SX02（図4） 調査区北側の道路沿いで検出した、南北130cm×東西の規模不明で深さ約2mの遺構。方形の掘り方と床面が凹形を呈するもので、出土遺物の現代磁器破片、五銭、鉄釘1点、土師器甕破片からは、現代の攪乱とも考えられるが、調査区北側は地山が削平され10cmほどの現代の層が乗っているのみであったことから、遺構上層からの磁器や銭貨は遺構の時期と必ずしも一致しない。したがって遺構の時期は特定できない。また、形態上は井戸様であるが、2mと浅いため湧水もわずかで井戸として機能しないため不明遺構として分類しておく。

SX03（図4） SX02の隣接北側で検出した遺構で、SX02とほぼ同様な傾向をもつ。南北110cm深さ170cmほどの井戸状の遺構で、土師器甕破片が出土している。SX02と本遺構との心々での間尺は、約200cm（6尺6寸）となっている。昭和59年度の北館調査時に堀に面し130cm～150cmの深さを有する柱穴が橋（虎口）施設の一部として検出された。（「浪岡城跡発掘調査報告書Ⅵ」1985 浪岡町教育委員会）SX02・03も同様の施設であったとは断定はできないが、周辺部の調査をさらに進め、史跡外も調査対象として遺構を把握するべきと考ええる。

SX06（図5） 南北100cm、東西90cmの浅い掘り込みが残るもので、遺物の出土なし、遺構の重複なしで時代を考慮できる資料はない。

SX08 (図5) 調査区の南側で遺構のほとんどが道路の下になり西端だけを確認した。規模は不明。SX09 (新) と重複し、覆土から鉄釘1点を出土している。時代は不明である。

SX09 (図5) SX08とほぼ範囲を同じくする遺構で、西端のみの検出となった。規模は不明。SX07、08日で重複する。主な出土遺物は滑石製品(大・三の文字あり)、土師器甕破片、須恵器甕破片であるが、ビニール袋の切れ端も検出していることから、現代の擾乱であると思われる。

SX10 (図5) SX06とSX07にはさまれて検出した遺構。南北60cm×東西70cm程度の小規模な土坑状遺構。出土遺物は、覆土から鉄釘2点があるが、時代は不明である。

SX13 (図4) 調査区を西側に拡張して検出した遺構で、直径110cmの円形を呈し、深さ45cmほど掘り込んで桶を埋設してあった(半截時に、桶及び蓋の木質部が残存していた)。出土遺物として煉瓦、弁(銅製)、不明鉄製品、瀬戸染付碗・皿(20世紀)、肥前系播鉢、産地不詳浅鉢(口縁玉縁)があり、現代の貯蔵穴であろう事が判明した。

5 柱 穴

柱穴は、トレンチ状の調査区設定のため建物を想定することができなかった。柱穴内から遺物の出土したのみ列挙しておく。また、建物としての柱穴列ではないが、SX02からL字に延びる一連の柱穴があり、橋や塀等の施設の可能性もある。遺物の出土した柱穴を次に上げる。

柱穴No49 (図5) 軽石(現代か)・須恵器甕破片

柱穴No57 (図5) 銭貨(嘉定通寶(当十)・洪武通寶2・〇元通寶?) 5枚一緒の可能性あり。

(木村浩一)

A区西壁層序注記(図4・図5対応)

1. 表土及び砕石層。住宅・道路として用いていた時の表層となる。
- II. 擾乱層。近・現代の削平及び盛土によると思われる。黒褐色土(10YR3/2)を主とする。土層のしまり造り。
 1. 黒褐色土(10YR3/2)に褐色砂質土(10YR4/6)を極小粒～小粒状に10%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に1%含む。現代の柱穴と思われる。
 2. 黒褐色土(7.5YR3/1)に褐色砂質土(10YR4/6)を極小粒～大粒状に7%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に1%、にぶい黄褐色粘性土(10YR5/3)を小粒状に1%含む。
 3. 黒褐色土(10YR3/2)に褐色砂質土(10YR4/6)を極小粒～小塊状に5%含む。
 4. 黒色土(7.5YR2/1)に黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小粒状に1%含む。
 5. 暗褐色砂質土(10YR3/3)の単層。
 6. 柱穴No212注記参照。(層序なし)。
 7. 黒褐色土(7.5YR3/2)に黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小粒～中粒状に7%含む。
 8. 黒色土(10YR2/1)に黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小粒～大粒状に3%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に1%含む。
 9. 黒褐色土(10YR3/2)に明褐色土(7.5YR5/6)を極小粒～中粒状に40%含む。
 10. 黒褐色土(10YR2/2)に明褐色土(7.5YR5/6)を極小粒～小粒状に15%、炭化物を小粒状に1%含む。
 11. 黒色土(7.5YR2/1)に黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小粒～小粒状に3%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に1%含む。
 12. 黒褐色土(10YR2/2)に明褐色土(7.5YR5/6)を極小粒～小粒状に20%含む。
 13. 黒褐色土(10YR2/2)に明褐色土(7.5YR5/6)を極小粒状に1%含む。
 14. 黒褐色土(10YR2/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に1%、褐色砂質土(10YR4/6)を極小粒状

に1%、3mm程度の砂礫を15%含む。

15. 黒褐色土(10YR2/2)と明褐色砂質土(7.5YR5/6)との5:5の混層。
- 16(a). 黒褐色土(10YR2/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に1%含む。
- 16(b). 褐色砂(10YR4/4)の単層。(川原砂礫)。
17. 黒褐色土(10YR2/2)に明褐色砂質土(7.5YR5/8)を極小粒～小粒状に5%含む。
- 18(a). 黒褐色土(10YR2/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に1%含む。
- 18(b). 黒褐色土(10YR2/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に10%含む。
19. 黒褐色砂質土(10YR2/3)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～小粒状に5%含む。しまり無し。
20. 褐色砂質土(10YR4/4)の単層。しまり弱い。
21. 黒色土(7.5YR2/1)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に3%含む。
22. 暗褐色砂質土(10YR3/4)の単層。
23. 黒色土(7.5YR2/1)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に7%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に1%含む。
24. 黒褐色土(5YR3/1)に黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小粒～小粒状に3%含む。
25. 黒色土(10YR1.7/1)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に1%含む。灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に1%含む。灰混じりか?(SX01覆土)。
26. 黒褐色土(10YR2/2)に褐色砂質土(10YR4/4)を極小粒状に2%、明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に2%含む。
27. 黒色土(10YR2/1)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に5%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に2%含む。
28. 黒褐色土(10YR3/2)にふい黄褐色砂(10YR4/3)が小塊～大塊状に25%、明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に3%含む。
29. 黒褐色砂質土(10YR3/2)にふい黄褐色砂(10YR4/3)を小塊状に10%、灰黄褐色砂(10YR6/2)を中塊状に15%含む。
30. 黒褐色土(10YR3/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～小粒状に1%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に5%含む。
31. 灰黄褐色土(10YR4/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に2%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に1%含む。
32. 黒褐色土(10YR3/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に1%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に1%含む。
33. 黒褐色土(7.5YR3/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に3%、5mm以下の石礫15%含む。
34. 黒褐色砂質土(10YR3/2)に灰黄褐色砂(10YR6/2)との厚い板状の互層構造となっている。
35. ふい黄褐色土(10YR4/3)に明褐色砂質土(7.5YR5/6)を極小粒～中粒状に15%含む。
36. 黒褐色砂(7.5YR3/2)に小粒～大粒の石礫を20%、極小粒の炭化物を10%含む。
37. 黒色土(7.5YR2/1)と黒褐色土(7.5YR3/2)の8:2の混層。黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に2%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に1%含む。
38. 黒褐色土(10YR2/2)に暗褐色砂質土(10YR3/4)を極小粒状に10%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に1%、黒色灰(N2/0)を5%含む。
39. 暗褐色砂質土(10YR3/3)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～小粒状に2%含む。
40. 黒色土(10YR1.7/1)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～小粒状に5%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に2%含む。
41. 黒色土(7.5YR2/1)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒と灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に合わせ1%含む。

SD02北東壁層序注記 (図5対応)

1. 黒褐色土(7.5YR2/2)に小粒～中粒の砂礫を15%、明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～小粒状に2%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に5%含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2)に極小粒の砂礫を5%、明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に1%含む。

SD03西壁層序注記 (図5対応)

1. 黒褐色土(10YR2/2)に黄褐色砂質土(10YR5/8)と灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状にそれぞれ1%含む。
2. 黒褐色砂(10YR3/2)に10mm以下の砂礫を厚い板状に2層ほど含む。黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小粒～大粒状に2%含む。
3. 黒色土(10YR1.7/1)の単層に、褐色砂(10YR4/4)の大塊状のブロックを5%含む。しまり弱い。

SD04・SD05東南壁層序注記 (図5対応)

1. 黒褐色土(10YR2/2)中粒～極大粒を砂礫10%、明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒、灰白色バミス(10

YR7/1)を極小粒状にともに1%含む。

ST01南・西壁層序注記 (図6対応)

1. (柱穴覆土) 黒褐色土(7.5YR3/2)に明赤褐色砂質土(5YR5/8)を極小粒～中粒状に3%含む。
2. (柱穴覆土・柱根) 黒褐色土(10YR2/2)の単層。しまり弱い。
3. (柱穴覆土) 黒褐色土(7.5YR2/2)に明赤褐色砂質土(5YR5/8)を極小粒状に1%含む。
4. (柱穴覆土) 黒褐色土(7.5YR3/2)に明赤褐色砂質土(5YR5/8)を極小粒～小粒状に3%含む。
5. (柱穴覆土) 黒褐色土(7.5YR2/2)に明赤褐色砂質土(5YR5/8)を極小粒状に1%含む。
6. (柱穴覆土) 黒色土(7.5YR2/1)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に1%未満含む。
7. (柱穴覆土) 暗褐色砂質土(7.5YR3/3)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～小粒状に5%含む。
8. (柱穴覆土) 褐色砂質土(10YR4/6)の単層。
9. (柱穴覆土) 黒褐色土(10YR2/2)の単層。
10. 黒褐色土(10YR2/3)に黄褐色砂質土(10YR5/8)を小粒状に2%含む。
11. 黒褐色土(10YR2/3)に黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小粒～大粒状に7%、黒色土(10YR2/1)を小粒状に2%含む。
12. 暗褐色砂質土(10YR3/3)に明褐色砂質土(7.5YR5/8)を極小粒～大塊状に10%含む。
13. 暗褐色砂質土(7.5YR3/3)と明褐色砂質土(7.5YR5/8)の5:5の混層。
14. 黒褐色土(10YR2/2)の単層。

SD02南西壁層序注記 (図6対応)

1. 黒褐色土(10YR2/2)に明黄褐色砂質土(7.5YR5/8)を小粒状に2%、黒褐色土(7.5YR2/2)を中塊状に2%含む。

SX02南壁層序注記 (図4対応)

1. 褐色砂質土(10YR4/4)に黄褐色砂質土(10YR5/6)を小粒～大塊状に40%含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3)に黄褐色砂質土(10YR5/6)を小粒～大塊状に10%含む。
3. 黒色土(7.5YR2/1)の単層に黒褐色灰(10YR3/1)を中塊状に3%含む。
4. 褐色砂質土(10YR4/4)の単層。
5. 黒褐色土(10YR2/2)。

SX03南壁層序注記 (図4対応)

1. 黒褐色土(10YR2/2)に黄褐色砂質土(10YR5/6)を極小～中塊状に10%含む。
2. 黒褐色砂質土(10YR2/3)と暗褐色砂(10YR3/4)との5:5の混層。
3. 褐色砂(10YR4/4)に黄褐色砂質土(10YR5/6)を小粒～中塊状に7%含む。
4. 黒色土(7.5YR1.7/1)に黒褐色砂(10Y2/3)を厚い板状に3%、明黄褐色砂質土(10YR6/8)を小粒状に2%含む。
5. 暗褐色砂(10YR3/4)の単層。

SX04北壁層序注記 (図5対応)

1. 黒褐色土(10YR3/2)に黄色粘質土(7.5YR6/6)を極小粒状に2%、灰白色バミス(10YR7/1)極小粒状に1%含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に1%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に1%含む。
3. 黒褐色砂(7.5YR3/2)に大粒～7cmのφの石を20%、極小粒～大粒の炭化物を2%含む。
4. 黒色土(7.5YR2/1)と黒褐色土(7.5YR3/2)の8:2の混層に黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に2%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に1%含む。

附1) 褐色粘土(7.5YR4/4)

5. 黒褐色土(10YR2/2)に暗褐色砂質土(10YR3/4)を極小粒～大塊状に10%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒～小粒状に1%、黒色灰(N2/0)を中粒～大塊状に5%。
6. 黒色土(10YR2/1)に褐色砂質土(10YR4/6)を極小粒～小粒状に5%含む。
7. 褐色砂(10YR4/4)の単層。

SX05北壁層序注記 (図4対応)

1. 黒褐色土(10YR2/2)に暗褐色粘質土(7.5YR3/4)を大塊状に2%、礫を中～極大粒状に30%含む混層。しまり強い。
2. 黄褐色砂質土(10YR5/4) (シラス)。
3. 黒褐色土(10YR1.7/1)に褐色砂質土(10YR4/6)を極小粒～極大粒状に7%、灰黄褐色土(10YR5/2)を極小粒状に2%、炭化物を極小粒状に2%、礫を小粒状に2%含む混層。

4. 黒褐色土(10YR2/2)に褐色焼土(7.5YR4/6)を中粒状に1%、礫を大～極大粒状に3%含む混層。
5. 黒褐色土(10YR2/2)に褐色砂質土(10YR4/6)を小～中粒状に5%、褐色焼土(7.5YR4/6)を小～極大粒状に5%、灰黄褐色土(10YR5/2)を極小粒状に1%、礫を中～極大粒状に2%、炭化物を小粒状に含む混層。
6. 黒褐色土(10YR2/2)・植物腐植層。
7. 黒褐色土(10YR2/2)に灰黄褐色土(10YR5/2)を薄い板状に20%、黒褐色土(10YR1/7.1)を極大塊状に1%、植物腐植層も含む混層。
8. 暗灰黄砂質土(2.5Y5/2)と小～極大粒状の礫の厚板状の互層。

SX06西壁層序注記(図5対応)

1. 黒色土(7.5YR2/1)に褐色砂質土(7.5YR4/4)の極小粒～大粒を7%、中粒～極大粒を砂礫状に10%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に1%含む。

SX07西壁層序注記(図6対応)

1. 黒褐色土(10YR2/2)の単層。
2. 暗褐色土(10YR3/3)の単層。
3. 黒褐色土(10YR2/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～大粒状に2%含む。
4. 暗褐色土(10YR3/3)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～小粒状に1%含む。

SX08・09西壁層序注記(図5対応)

1. 砕石層。0～40mm。簡易舗装と思われる。
2. 黒褐色土(10YR2/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に3%、明褐色砂質土(7.5YR5/8)を小粒～大粒状に2%含む。
3. 黒色土(7.5YR2/1)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～大塊状に15%含む。
4. 黒色土(7.5YR2/1)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に2%含む。
5. 黒褐色土(10YR2/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～大塊状に15%含む。
6. 暗褐色砂質土(7.5YR3/3)の単層。

SX07・SX09・SD02南壁層序注記(図6対応)

- I. 砕石とシラスを土とした簡易舗装面。
 - II. 砕石層。水道管(田)の塩ビ管が埋設されていた。
1. 黒色土(10YR2/1)に灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に1%含む。転圧がかけられたと思われ非常に固い。
 2. 黒褐色土(10YR2/2)に黄褐色砂質土(10YR5/8)と明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状にそれぞれ2%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に3%、5～20mmの砂礫を3%含む。しまり強い。SX-09覆土。
 3. 黒褐色土(10YR2/2)と褐色砂(10YR4/6)との5:5の混層。SX-09覆土。
 4. 黒褐色土(7.5YR3/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に2%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に2%、5mm程度の砂礫を1%含む。しまり強いが2層ほどではない。SX-07覆土か?
 5. 黒褐色砂(7.5YR3/2)とよい褐色砂(7.5YR5/3)の極厚い板状の互層構造となる。層下部には5～20mmの砂礫が20%程度集中して含まれる。また、黄褐色砂質土ブロック(10YR5/8)を大塊状に2%含む。しまり強い。SX-07覆土。

SX11南壁層序注記(図4対応)

1. II層に同じ。黒褐色土(10YR3/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に2%含む、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に1%、褐色砂質土(10YR4/6)を極小粒状に1%含む。
2. 黒色土(7.5YR2/1)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～極大粒状に3%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に2%含む。
3. 暗褐色砂質土(10YR3/3)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～極大粒状に10%含む。
4. 褐色砂質土(10YR4/4)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～大塊状に20%含む。
5. 黒褐色土(10YR2/2)に褐色砂質土(10YR4/6)を大粒状に5%、明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～大粒状に10%含む。灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒も1%含む。
6. 黒褐色土(10YR3/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～小塊状に7%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に1%含む。
7. 黒色土(10YR2/1)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～大塊状に3%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に1%未満の微量含む。
8. 黒褐色土(7.5YR2/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～大粒状に7%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に1%含む。
9. 黒褐色砂質土(10YR2/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～小塊状に5%含む。

SX12・13南壁層序注記 (図4対応)

1. 黒褐色土(10YR2/3)に黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小粒に2%、大～(20～30cm)の礫を5%含む混層。しまりあり。
2. 黒褐色土(7.5YR2/2)に黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小粒に3%、小～中粒状の礫を3%含む混層。
3. 黄褐色砂質土(10YR5/8)。しまり強。
4. 黒褐色土(10YR2/2)にぶい黄褐色土(10YR5/4)を小粒状に2%、黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小粒状に1%、小粒状の礫を1%含む混層。しまりややあり。
5. 黒褐色土(10YR2/2)に明褐色砂質土(7.5YR5/6)を小～中粒状に5%、黒色土(10YR1.7/1)を極大～大塊状に2%、ぶい黄褐色土(10YR4/3)を小～中粒状に2%含む混層。
6. 黒褐色土(10YR2/2)にぶい黄褐色土(10YR4/3)を小粒状～大塊状に5%、ぶい黄褐色土(10YR5/4)を小粒状に3%含む混層。
7. 黒色土(10YR1.7/1)にぶい黄褐色土(10YR4/4)を壁際の中～大粒状に10%、明褐色砂質土(7.5YR5/6)を中粒状に3%含む混層。

SX14北壁層序注記 (図5対応)

1. 暗褐色土(10YR3/3)に黒色土(10YR1.7/1)を大粒状に3%含む。明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に1%含む。
2. 黒褐色土(10YR3/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～小塊状に3%含む。
3. 黒色土(7.5YR2/1)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～大粒状に1%含む。
4. 黒色土(7.5YR1.7/1)の単層。
5. 黒褐色土(7.5YR3/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に3%含む。
6. 黒色土(7.5YR2/1)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に2%含む。

柱穴層土注記表

No.	大きさ (cm)			土 色 注 記 等	備 考
	長径	短径	深さ		
1	46.0	37.0	61.5	黒褐色土(10YR2/3)に橙色砂質土(7.5YR6/8)を極小～大粒状に10%、極小粒～大粒を砂状に20%、ぶい褐色粘性土(7.5YR5/4)を大粒状に2%含む。	
2	30.0	30.0	6.0	なし。	
3	29.0	28.0	5.6	なし。	
5	(35.0)	21.0	17.5	黒褐色土(10YR2/2)に黄褐色砂質土(10YR5/8)を小粒～大粒状に5%含む。	
6	32.0	25.0	53.9	黒褐色土(10YR2/2)に黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小粒～大粒状に7%含む。	
8	28.0	23.0	61.1	黒褐色土(10YR2/2)に黒褐色砂(10YR2/3)を大塊状に20%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に1%含む。	
9	29.0	(23.0)	36.5	黒褐色土(10YR2/2)・黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小～大粒状に10%、10～30mmの小石を5%含む。	
10	31.0	(23.0)	44.5	黒色土(7.5YR2/1)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)状に極小粒～中粒状に3%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に5%含む。	
11	45.0	26.0	9.9	黒褐色土(10YR3/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/6)を中塊状に10%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に3%含む。	
12	29.0	26.0	27.3	暗褐色土(10YR3/3)に黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小粒状に1%含む。	
13	24.0	24.0	49.5	黒褐色土(7.5YR7/2)に黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小粒状に7%含む。	
14	30.0	29.0	14.3	黒褐色土(7.5YR3/2)の単層。	
15	30.0	26.0	26.7	黒褐色土(10YR2/2)にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)を極小粒～中粒状に5%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に1%含む。	
16	23.0	22.0	15.7	黒褐色土(10YR2/3)。	
17	28.0	19.0	27.0	黒褐色土(7.5YR3/2)に黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小粒に1%含む。	

18	24.0	17.0	35.7	暗褐色土(10YR3/4)の単層。
19	21.0	20.0	13.7	暗褐色土(10YR3/4)に極小粒状の炭化物を2%含む。
20	26.0	21.0	21.6	黒褐色土(7.5YR3/2)に褐色砂質土(10YR4/6)を中塊～大塊状に10%含む。
21	29.0	(26.0)	40.0	褐色砂(10YR4/4)の単層。
24	30.0	28.0	45.2	黒褐色土(10YR2/2)・褐色砂質土(10YR4/4)を中～大塊状に15%、腐食した木材(柱根?)とビニール出土。
25	24.0	20.0	20.9	暗褐色土(10YR3/3)。
26	27.0	18.0	27.4	黒褐色土(7.5YR2/2)の単層。
27	18.0	17.0	13.0	暗褐色砂質土(10YR3/4)。
28	23.0	21.0	64.3	黒褐色土(7.5YR2/2)にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)を極小粒と灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状にそれぞれ1%含む。
29	19.0	14.0	8.4	黒褐色土(10YR2/2)に黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小粒と灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状にそれぞれ1%含む。
30	25.0	25.0	30.6	黒褐色土(10YR2/3)の単層。
31	21.0	12.0	12.5	黒褐色土(10YR2/2)の単層。
32	24.0	17.0	26.5	黒色土(7.5YR2/1)に明褐色砂質土(7.5YR5/8)を極小～小粒状に3%含む。
33	24.0	20.0	31.3	黒色土(7.5YR2/1)に明褐色砂質土(7.5YR5/8)を極小粒～小塊状に20%含む。
34	33.0	27.0	31.2	黒褐色土(7.5YR3/2)に黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小粒～大粒状に10%含む。
36	20.0	19.0	5.3	暗褐色土(10YR3/3)に黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小粒～大粒状に5%含む。
37	-	-	9.3	黒褐色土(10YR3/2)・明黄褐色砂質土(10YR7/6)を極小粒状に1%、極小粒の炭化物を1%。
38	29.0	21.0	11.9	黒褐色土(10YR2/2)に明褐色砂質土(7.5YR5/8)を極小粒～大粒状に20%含む。
39	30.0	23.0	54.2	黒褐色土(10YR2/2)・暗褐色砂質土(10YR3/4)を中粒～極大粒状に15%含む。
40	(24.0)	23.0	32.4	黒褐色土(10YR2/2)に褐色砂質土(10YR4/6)を極小粒～小塊状に15%含む。
41	23.0	20.0	12.3	黒褐色土(10YR2/2)に明褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に5%含む。
42	(19.0)	(17.0)	9.1	暗褐色土(10YR3/3)に明褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に10%含む。
43	23.0	18.0	21.9	黒褐色土(10YR2/2)に黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小粒状に10%含む。
44	19.0	14.0	31.5	黒褐色土(7.5YR2/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に3%含む。
46	27.0	24.0	20.9	黒褐色土(7.5YR3/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に2%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒を2%含む。
47	(27.0)	(21.0)	8.2	黒褐色土(10YR2/2)に褐色砂質土(7.5YR4/4)を極小粒～極大粒状に15%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒と炭化物を小粒状に1%ずつ含む。
49	21.0	14.0	28.7	黒褐色土(10YR2/2)に暗褐色砂質土(10YR3/3)を極小粒～中塊状に10%、褐色砂質土(7.5YR4/4)を極小粒状に2%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に2%含む。5cm×3cmの炭化材が含まれる。
50	24.0	23.0	12.6	黒褐色土(10YR2/3)に暗褐色砂質土(10YR3/3)を小粒状に5%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に1%含む。
51	28.0	20.0	7.3	黒褐色土(10YR2/2)に暗褐色砂質土(10YR3/3)を極小粒状に3%、灰白色バミス(10YR7/1)を極小粒状に1%含む。

52	32.0	27.0	54.1	黒褐色土(7.5YR3/2)に黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小粒状に2%含む。
53	23.0	23.0	47.3	黒褐色土(10YR2/2)に褐色砂質土(7.5YR4/4)を極小粒～中粒状に3%含む。
54	45.0	35.0	15.3	黒褐色土(10YR2/2)に褐色砂質土(7.5YR4/4)を極小粒～中粒状に2%、極小粒状の礫を3%、炭化物を1%含む混層。
55	22.0	18.0	42.6	なし。
56	30.0	26.0	55.6	黒褐色土(10YR2/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に1%、礫を極小粒状に2%含む。
57	27.0	23.0	53.6	黒褐色土(7.5YR3/2)に黄褐色砂質土(10YR5/6)を極小粒状に10%、礫を極小～中粒状に2%含む混層。
58	28.0	24.0	3.2	なし。
60	29.0	24.0	33.8	黒褐色土(7.5YR3/2)に黄褐色砂質土(10YR5/6)を極小粒状に10%、礫を小粒状に2%含む混層。
61	-	-	46.3	黒褐色土(7.5YR3/2)に黄褐色砂質土(10YR5/6)を極小粒状に1%、礫を極小～中粒状に2%含む混層。
62	(30.0)	25.0	50.0	黒褐色土(7.5YR3/1)に明褐色砂質土(7.5YR5/8)を極小粒状に1%、小粒状に礫を1%含む混層。
63	40.0	30.0	57.3	黒褐色土(7.5YR3/2)に黄褐色砂質土(10YR5/6)を中粒～極大粒状に5%、礫を小～中粒状に1%含む混層。
64	21.0	15.0	27.2	黒褐色土(7.5YR3/1)に黄褐色砂質土(10YR5/6)を極小粒状に2%、小粒を礫状に1%含む混層。
65	32.0	28.0	45.8	極暗褐色土(7.5YR2/3)に黄褐色砂質土(10YR5/6)を極小粒状に3%、ぶい黄褐色粘土(10YR5/4)を中ブロック状に1%、小粒状の礫を1%含む混層
66	16.0	15.0	11.9	黒褐色土(7.5YR3/2)に極小粒状の礫を1%含む。
67	15.0	13.0	12.7	黒褐色土(7.5YR3/2)に黄褐色砂質土(10YR5/6)を小粒状に1%含む混層。
69	62.0	23.0	10.3	黒褐色土(10YR2/2)にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)を7%、小粒状の礫を3%含む混層。
70	21.0	21.0	13.8	黒褐色土(7.5YR2/2)に暗褐色土(7.5YR3/4)を中粒状に2%、小粒状の礫を1%含む混層。
100	33.0	31.0	1.5	黒褐色土(10YR2/2)に黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小粒状に3%含む。
201	-	-	6.0	黒褐色土(7.5YR3/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に10%、灰白色パミス(10YR7/1)を極小粒状に7%含む。
202	26.0	22.0	46.2	黒褐色土(10YR2/2)に明褐色砂質土(7.5YR5/8)を極小粒状に10%、灰白色パミス(10YR7/1)を極小粒状に3%、極小粒の炭化物も1%含む。
203	(48.0)	36.0	34.5	黒褐色土(5YR3/1)に明褐色砂質土(7.5YR5/8)を極小粒～中塊状に5%、灰白色パミス(10YR7/1)を極小粒状に1%、5mm程度の細石を1%含む。
204	21.0	19.0	14.9	黒褐色土(7.5YR2/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に3%含む。
205	31.0	26.0	6.5	黒褐色土(10YR2/3)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に5%含む。
206	31.0	(24.0)	12.8	黒褐色土(10YR2/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に3%、明褐色砂質土(7.5YR5/8)を極小粒状に2%、灰白色パミス(10YR7/1)を極小粒状に2%含む。
207	36.0	32.0	38.1	黒褐色土(10YR2/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に2%、灰白色パミス(10YR7/1)を極小粒状に2%、小粒～中粒の炭化物を1%含む。
208	30.0	25.0	55.8	黒褐色土(7.5YR3/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に3%、極小粒の炭化物を1%含む。

209	23.0	20.0	10.1	黒褐色土(7.5YR3/2)にぶい黄褐色粘性土(10YR4/3)を小塊状に5%含む。
210	58.0	(46.0)	67.0	黒褐色土(10YR2/2)にぶい黄褐色粘性土(10YR4/3)を小塊状に5%、褐色砂質土(7.5YR4/6)と明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に1%含む。
211	23.0	21.0	19.6	黒褐色土(10YR2/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～大粒状に3%、灰白色パミス(10YR7/1)を極小粒も1%含む。
212	28.0	26.0	33.0	覆土 黒褐色土(10YR2/3)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～小粒状に2%含む。柱痕 9cm ϕ 。黒褐色土(10YR2/3)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～小粒状に10%含む。
213	24.0	22.0	16.6	黒褐色土(7.5YR3/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に1%、灰白色パミス(10YR7/1)を極小粒状に3%、明褐色砂質土(7.5YR5/8)を極小粒～小粒状に2%含む。
214	(67.0)	(61.0)	102.6	① 黒褐色土(7.5YR3/2)に褐色砂質土(10YR4/6)を極小粒状に2%、黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小粒～大粒状に10%、極小粒状に炭化物を1%、灰白色パミス(10YR7/1)を極小粒状に1%含む。 ② ①層下に黄褐色粘性土(10YR5/8)に灰白色パミス(10YR7/1)を極小粒～小粒状に3%、黒褐色土(7.5YR3/2)を小粒～大粒状に10%含んだ層がある。③ ②層下に黒色土(7.5YR2/1)に黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小粒～大粒状に7%、灰白色パミス(10YR7/1)を極小粒状に7%含む。
220	33.0	26.0	9.9	黒褐色土(10YR2/3)に褐色砂質土(10YR4/6)を極小粒～大粒状に7%含む。
221	36.0	27.0	21.2	黒褐色土(10YR2/3)に黄褐色砂質土(10YR5/8)を小粒状に2%、褐色砂質土(10YR4/6)を極小粒～小塊状に5%含む。また、灰白色パミス(10YR7/1)を極小粒状に1%含む。
222	25.0	22.0	33.3	黒褐色土(10YR3/1)に黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小粒～小塊状に3%、灰白色パミス(10YR7/1)を極小粒状に2%含む。(炭化物含む)。
223	(25.0)	21.0	18.5	黒褐色土(10YR2/2)に褐色砂質土(10YR4/6)を極小粒～小粒状に15%、灰白色パミス(10YR7/1)を含む。
224	34.0	(26.0)	22.2	黒色土(7.5YR2/1)に褐色砂質土(10YR4/6)を極小粒～大粒状に2%含む。(炭化物含む)。
225	25.0	25.0	41.5	埋戻土 黒色土(7.5YR2/1)に褐色砂質土(10YR4/6)を極小粒～大粒状に10%含む。柱痕 黒色土(7.5YR1.7/1)に黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小粒状に1%、灰白色パミス(10YR7/1)を極小粒状に1%含む。
226	27.0	23.0	28.6	埋戻土 ぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)の単層。柱痕 黒褐色土(10YR2/2)に黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小粒状に2%含む。しまり弱い。
227	22.0	18.0	16.1	黒褐色土(10YR2/2)に褐色砂質土(7.5YR4/6)を極小粒～小粒状に5%含む。(ガラス出土?)。
228	30.0	21.0	18.1	黒褐色土(10YR2/2)に褐色砂質土(7.5YR4/6)を極小粒状に1%含む。
229	34.0	29.0	9.0	層序にて記載済。柱痕有。
230	25.0	20.0	35.0	黒色土(7.5YR1.7/1)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒～小粒状に10%含む。
231	31.0	23.0	34.4	黒色土(7.5YR2/1)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に2%含む。骨片出土。
232	25.0	24.0	20.5	覆土 黒褐色土(7.5YR3/1)に褐色砂質土(7.5YR4/6)を極小粒状に1%含む。 柱痕 暗褐色土(10YR3/3)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に1%含む。

233	25.0	25.0	38.8	覆土 黒褐色土(10YR2/2)に黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小粒状に2%含む。炭化物の極小～小粒を1%含む。柱痕 黒褐色土(10YR2/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小粒状に15%含む。炭化物の極小粒を1%含む。
234	(13.0)	(12.0)	14.7	黒褐色土(10YR2/3)に黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小粒状に20%含む。
235	21.0	17.0	24.2	黒褐色土(10YR2/2)に黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小粒状に20%含む。
236	16.0	14.0	7.6	黒褐色土(5YR2/1)に褐色砂質土(7.5YR4/6)を極小粒状に1%含む。
237	16.0	14.0	8.9	覆土 暗褐色土(10YR3/4)に褐色砂質土(7.5YR4/6)を極小粒状に15%含む。柱痕 黒褐色土(10YR2/2)に黄褐色砂質土(10YR5/8)を極小粒～小粒状に7%含む。

IV 出土遺物

本発掘区から出土した遺物としては、陶磁器類、鉄製品、銅製品、銭貨、その他があり、古代・中世・近世・近代・現代の遺物が混在している状況が認められた。中世の遺物を中心として報告する。

陶磁器類としては、中国製品と国産品がある。中国製品には、青磁線描蓮弁文碗の胴部片(図7-1)、白磁皿(図7-2)、白磁碗(図7-3)、染付碗(図7-4)、染付皿(図7-5・6・7・8)があり、いずれも16世紀代の製品と考えられる。国産品としては、瀬戸美濃灰釉皿(図7-9)、越前甕(図7-10)と推定される破片、越前播鉢(図7-11)などがあり、これらの年代は16世紀代と想定される。

石製品と想定される例は3点ある。滑石の破片に文字が刻字されている例(図7-12)は「大」「三」等の文字は判読できるもの他は不明。部分的に平滑な面が認められる軽石状の製品(図7-13)。安山岩の石質で面取りをした棒状製品(図7-14)は線刻と部分的にベンガラが付着が認められる。年代的には中世以降としか言えない。

鉄製品には、鍋の破片(図8-6・11・12)、釘(図8-5・7・13・14)あるいは釘状になると推定される製品(図8-3・8・9・10)、小刀(図8-15)、小札(図8-4)がある。釘に関しては、近代以降の九釘も出土しているが除外した。

銅製品には、径1.6cmのリング状の製品(図8-16)、緑金具と推定される製品(図8-17)などがある。前者の年代は中世以降と推定される。

土製品には、人形頭部(図8-1)と面状の人形(図8-2)が存在する。近代以降の製品と推定される。

銭貨は10枚出土している。洪武通寶(図8-18・19)、開元通寶(図8-20・23もか)、判読不能(模鑄銭)(図8-21)、嘉定通寶(図8-22)、祥符通寶か(図8-25)、元豊通寶(模鑄銭)か(図8-26)、嘉祐通寶(図8-27)、無文銭(図8-24)である。

(工藤清泰)

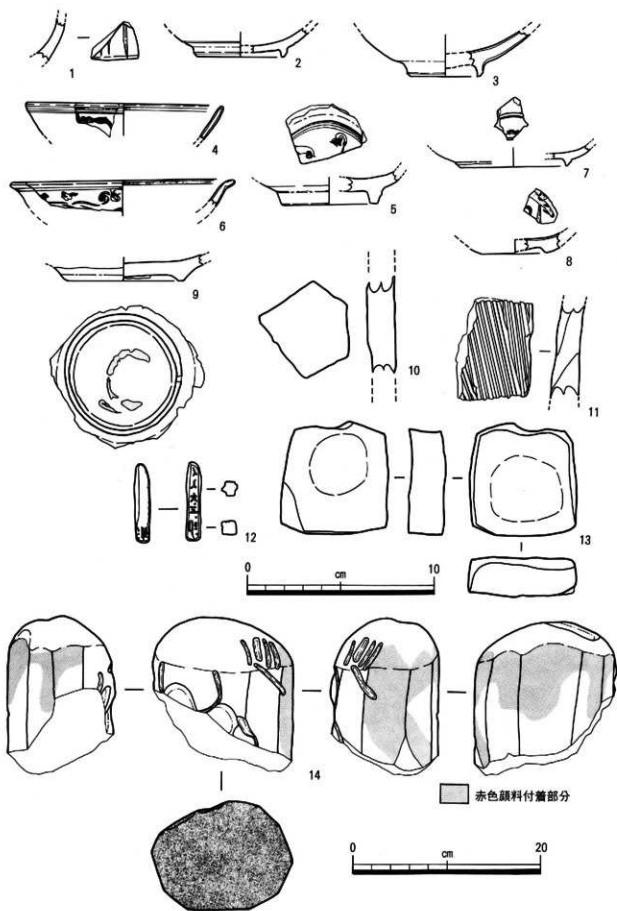


图7 出土遺物実測図

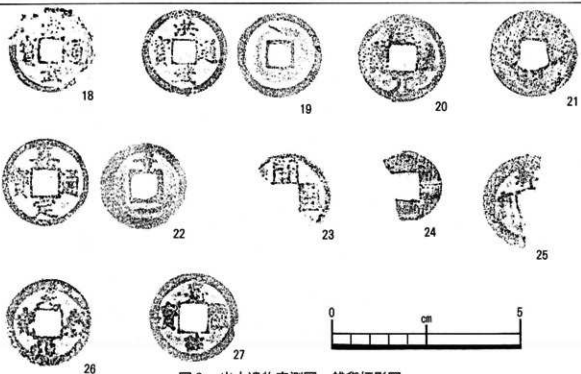
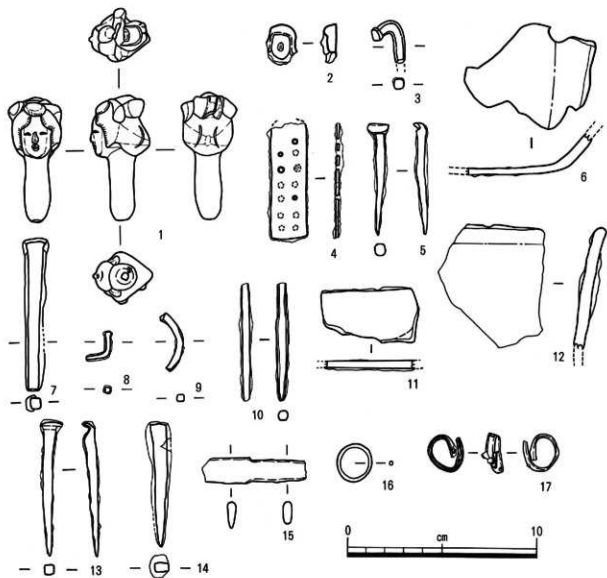


图8 出土遺物実測図・銭貨拓影図

V ま と め

新館の発掘調査は平成12年度からはじまり、本年度は2回目の調査となる。史跡地内の現状変更に伴う発掘調査であることから、遺構や遺物の確認はもちろんのこと、将来にわたって史跡保存の指針となる基礎資料を提示する目的も存在する。

今回は約100㎡の調査面積であり、新館のごく一部を調査したにすぎない。しかしながら、調査によって検出された遺構には竪穴建物跡・柱穴・溝・井戸跡などがあり、遺物には16世紀を中心とする陶磁器や鉄製品も存在し、確実に城館の一部として機能していた状況を確認することができた。平成12年度の調査成果と重ね合わせると、新館の西側全域に、16世紀を主体とする遺構群が存在することは明らかである。

特に、現在史跡指定地の境界となっている鶯谷環は、当初から新館の北側に存在し、堀としての機能を有していたことを確認できたし、さらに堀跡は近世・近代において居住域の関係から人為的に埋められていることも確認できた。ただし、遺構自体は後世の削平によって調査区全域にわたって擾乱が認められることから、今後の保存・管理にあたっては十分な検討が必要と痛感させられた。

新館の保存管理計画と合わせて今後の検討課題としたい。

(工藤清泰)

発掘調査抄録

ふりがな	へいせい13ねんど なみをかじょうあと(しんだてちく)はくつちようさほうこくしよ							
書名	平成13年度 浪岡城跡(新館地区)発掘調査報告書							
副書名								
巻次	X II							
シリーズ名	浪岡城跡発掘調査報告書							
シリーズ番号	第12集							
執筆者名	木村浩一・工藤清泰							
編集機関	浪岡町教育委員会							
所在地	038-1311 青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字稲村101-1 Tel0172-62-1111							
発行年月日	西暦 2002年 3月 29日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号					
史跡浪岡城跡	青森県南津軽郡浪岡町大字五本松字松本33番地2	229	29020	40度43分00秒	140度36分42秒	100㎡	20020906 ～ 20021031	史跡の現状変更に伴う事前調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
浪岡城跡新館地区	城館	中世・平安時代	竪穴建物跡1基 井戸跡4基 溝跡7本 竪穴状遺構5基 柱穴約110		中世陶磁器(青磁・白磁・染付・瀬戸美濃)、土師器・須恵器、鉄製品、土製品、銭貨			



(1) 調査前状況
(南から)

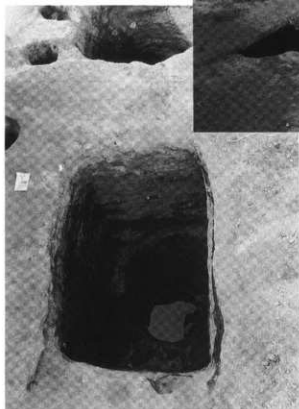


(2) 完掘状況 (南から)



(1) 南側拡張部と
ST01 (北から)

(2) 北側道路と
旧鷺谷堰と思われる遺構
(SX05)



(3) 調査状況 (手前SX02、奥SX03)



(1) 北側拡張部完掘状況
(東から)



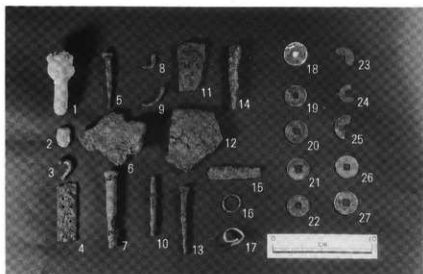
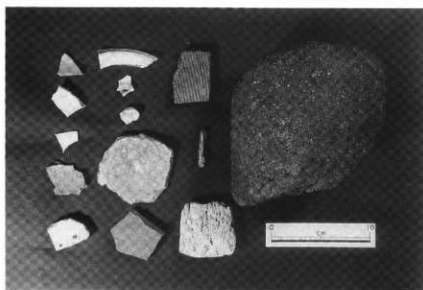
(2) 井戸と思われる遺構
(Pit214・南から)



(3) SX12 (右・旧)
SX13 (左・新)
(南から)



(1) 出土陶磁器



(2) 出土土製品、鉄製品、
錢貨等

平成13年度

野尻(4)遺跡発掘調査概報

2002年3月

浪岡町大釈迦工業団地調査会

I 調査概要

遺跡の名称	野尻(4)遺跡(青森県遺跡番号 29063)
種別	集落跡
調査期間	2001年4月16日～11月16日
所在地	青森県南津軽郡浪岡町大字高屋敷字野尻地内
調査機関	浪岡町大釈迦工業団地調査会(会長 三浦 貞栄治)
調査担当	浪岡町大釈迦工業団地調査会 主任調査員 高杉博章 調査員 高橋 均・村上章久 主任補助員 成田昭美・葛西真里子・竹内絵美子・長内孝幸・ 赤平香織・永洞佐哉子・工藤 司 調査補助員 對馬英子・高谷美香子・東根寛茂・小山文子・加藤裕也 事務員 佐藤美峰・天内喜代里・木村亜希 作業員 天内のり子他48名
調査面積	約28,000㎡
調査の原因	工業団地造成
検出遺構	縄文時代：Tピット1 平安時代：建物跡103、掘立柱建物跡3、竪穴状遺構27、土坑651、 井戸跡8、耕作跡8、焼土跡47、ピット296、溝跡85
出土遺物	縄文土器・石器・土師器・須恵器・鉄製品・土製品・石製品 (コンテナ 約130箱)
遺跡の時期	縄文時代、平安時代
遺物の保管	浪岡町大釈迦工業団地調査会整理室(旧浪岡町役場第2庁舎)

II 遺跡の概要と調査経過

浪岡町を南流する大釈迦川西方の低位段丘面上には9世紀中葉以降の遺跡群が密集しているが、浪岡町大字高屋敷字野尻地内に所在する本遺跡もその遺跡群のひとつである。今回の調査区域付近の標高は西側で52m前後、東側が43m前後で、遺跡は西から東方向の比高約9mの傾斜面に形成されている。昨年度の調査概報(高杉 2001)でもふれたように、2か年にわたる調査区域に隣接する東側では、県埋蔵文化財調査センターによって19,800㎡が調査され、9世紀中葉から10世紀前半を中心とする時期の遺構が多数検出されている。

X=42, 310-

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

X=42, 300-

B

C

D

E

F

G

H

I

J

K

L

M

N

O

P

Q

+

+

+

+

+

+

+

+

+

+

+

+

+

+

+

+



+ K | 3 +

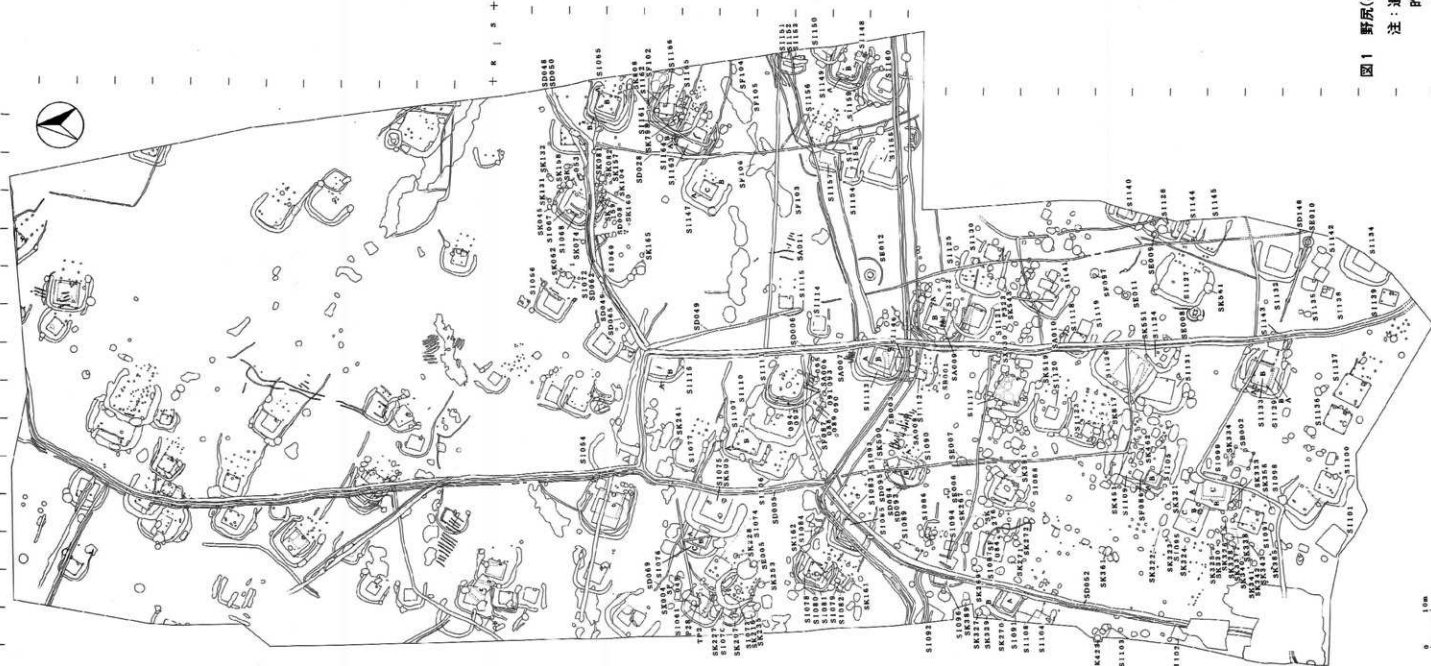


図1 野尻(4)遺跡遺構配置図

注：遺構番号の表記のないものは
昨年調査の遺構
(平成12年度調査参照)

昨年度の調査では、約49,000㎡（調査時に実施された地形測量の結果では48,974㎡）の調査対象面積のうち約21,000㎡について本格調査を実施し、10世紀前半とされる白頭山-苦小牧火山灰降下前後を中心とする時期の建物跡70軒、竪穴状遺構3基、土坑189基、井戸跡4基、耕作跡（畝状遺構）5基、焼土跡61基、円形周溝遺構2基、埋設土器1基、ピット27基、溝跡64条を検出し、県で実施した調査区域と一連の遺跡としてとらえられることが明らかとなった。

本年度は、昨年度に引き続き残りの約28,000㎡の本格調査を実施することになったが、工業団地造成計画との兼ね合いから調査区域を3分割し、B～G-18～37区を6月末日まで、H～K-18～24区およびH～N-25～38区を8月末日まで、L～S-18～27区を11月中旬までの日程で調査することになった。発掘調査は4月16日から、昨年度保留したK～Q-15～17区の範囲にかかる一部の遺構の継続調査とともに開始した。調査対象区域は、国家座標に拠る10×10mを基本単位とするグリッドの東西軸B～S区、南北軸はほぼ18～38区の範囲である。

発掘調査に際しては、昨年度の調査で検出された火山灰の分析で白頭山-苦小牧火山灰の他に若干十和田起源の火山灰が存在することが明らかになったこともあり（根本・大友・藤田・一戸 2001）、遺構から火山灰が検出された際には必ずサンプリングを行うとともに、同一火山灰層における上位と下位の年代幅の存在を考慮して（山口義伸敬示）、可能なかぎり火山灰層の上位と下位の2箇所からサンプリングを行うことにした。また、建物跡の竈などから検出された焼土についても微細遺物抽出のためのフローテーション用にサンプリングを行った。

B～G-18～37区では、建物跡32軒、竪穴状遺構6基、土坑162基、井戸跡2基、焼土跡26基、ピット60基、溝跡45条（ただし、この地区に限らず溝跡の大部分は各予定地区外にまで延びているので、各地区で表記した検出数は重複する。）の遺構を調査し、6月30日にこの地区の航空写真撮影を行った。H～K-18～24区およびH～N-25～38区では、建物跡44軒、掘立柱建物跡3棟、竪穴状遺構13基、土坑259基、井戸跡5基、耕作跡5基、焼土跡11基、ピット140基、溝跡27条の遺構を調査したが、この地区は完了予定を遅れ、10月7日に航空写真撮影を行った。L～S-18～27区では、建物跡21軒（SI167は外周溝の一部のみを調査）、竪穴状遺構8基、井戸跡1基、土坑172基、耕作跡1基、焼土跡10基、ピット96基、溝跡27基の遺構を調査し、11月16日にこの地区の航空写真撮影を行って本年度の予定区域の調査を完了した。

この結果、本年度の検出遺構は建物跡が昨年度から継続調査した6軒を含めて合計103軒、掘立柱建物跡3棟、竪穴状遺構27基、土坑が昨年度から継続調査した58基を含めて651基、井戸跡8基、耕作跡6基、焼土跡47基、ピット296基、溝跡が昨年度からの継続分を含めて85条となった。

III 検出遺構の概略

1 基本層序

本年度の調査区域内では土層観察地点を設けなかったが、本遺跡の基本層序は昨年度に準ずる。ちなみに、I層が表土層、II a層が上～中位に明黄褐色火山灰を断片的に挟む暗褐色土、

II b層が黒色土、II c層が沢筋に堆積した黒色土、II d層がIII層への漸移層である灰褐色粘質土、III層が地山の淡黄色粘土で、遺構確認面はIII層上面ないしII層下面である。

2 建物跡

建物跡は103軒検出された。ただし、これには本遺跡で特徴的な方向性のほぼ一致した「入れ子」状態の重複した建物跡等、建て替えによる重複遺構は含めていないので、それらを加えると実数はさらに増えて124軒前後となる。平面形は方形を呈するものが一般的で、長方形もみられるが、明確な掘り込みのある建物は少なく、平地に壁溝を回らせたという印象を受けるものが一般的である。確かに床面まで削平された建物が多いことは事実であるが、SI097やSI119のように30～40cm位の深さの壁をもつ堅穴が存在すること、あるいはSI118とSI119のように母屋と前小屋のセットをなしていると考えられる建物跡で、前者が平地、後者が堅穴という構成をなすものが存在すること、あるいは壁溝や外周溝の深さ等から判断すると、堅穴を掘り込まずに平地に壁溝を回らすという形態が本来的な構造であった建物跡が少なからず存在したと考えてよいのではないだろうか。これらの建物跡に設けられた竈についても、燃焼部の硬く焼け締まった火床だけを残す事例が多かったが、これも他の構造物が削平を受けて消失したと見做してしまうのはきわめて不自然である。一般的に袖部を形成する粘土等の断片すら残存していないのに、判で押したように円形に火床面だけ残されていることから判断して、竈の廃棄に際し意図的な行為があったと推定して大過ないであろう。

昨年度の調査区域の北半側では外周溝を伴う建物跡が一般的であったが、本年度の調査区域では南側に位置するSI101・135～139・142・143、南西側の調査区域境界付近のSI089・092・102～104・108等では外周溝が検出されていない。また、SI087では外周溝と同一の機能を果たし、その祖形になると考えられる外周土坑が検出された。同じような外周土坑を伴う建物跡SI095・097も調査区域南側に位置している。現時点の判断では、外周溝を伴わない建物跡および外周土坑の回らされた建物跡は外周溝を伴う建物跡より時間的に古い可能性が高い。

これらの建物跡の大部分は、外周溝の開口部や竈の位置から東－西ないしは南東－北西に主軸方位をとるが、SI133Aは東と西、SI133Bは西と西竈をもつものも確認された。

建物跡の規模は最大がSI109で9.55×10.22m、最小がSI154で2.47×2.48m、規模計測可能な建物跡の平均値をとると一辺約5m(4.95×4.88m)となり、壁高は0cmから最も深いものでSI115の43.5(～7.3)cmで、壁のないもの(0cm)が59軒と半数近くを占める。

建物跡とセットになる掘立柱建物跡は21軒で確認されており、2間×1間が9棟、1間×1間が5棟、2間×2間が4棟、SI127は3間×2間の建て替えて2棟、SI123が3間×2間の総柱式、規模不明が1棟である。また、外周溝の造り替えと考えられるものが10軒で確認されており、SI111は3条で2回の造り替えが行われたと考えられる。

本年度検出された建物跡のなかで建物内や外周溝等に10世紀前半と推定される火山灰が堆積しているものは、SI69・73・75・78・91・97・98・107・109・110・113・117・118・124・126・

129・131・132・135・137・140・141・147・150・151・161の26軒であった。さらに、重複関係からSI70・74→73、76→75、79・80・81→78、100→98、111→110、146→113、126・131→124、133→129、128・144・145→140、163・164→147、152・153→151、SI127→SK560・561・581という新旧関係が明らかになっているので、火山灰降下以前に構築された建物跡は少なくとも44軒は存在することになる。

これらの建物跡の中からは製鉄関連遺構が検出されており、SI091Bからは鍛造剥片と台石が検出され、その北側に隣接して検出されたSK327および鑪羽口をはじめ多量の遺物が出土したSK329は廃滓ピットの可能性が高いことから鍛冶工房跡と考えられる。昨年度の調査で検出されたSI042の外周溝先端部では、製鉄炉用と考えられる断面カマゴコ形の鑪羽口（岡田 1990）が、一括廃棄されたと思われる状態で出土していることから、未確認の製鉄炉跡の存在が推定できであろう。また、SI100Aの東壁では竈状の施設を伴い、付近では粘土の堆積が認められた。この建物跡からは砂鉄が検出されているので、製鉄関連遺構の可能性が高い。SI095でもAとした建物跡内部の不自然な位置にB竈と判断した施設が検出されており、あるいは生産関連の施設であった可能性も考えられる。

このほか、焼失家屋SI140の壁溝からは、壁板に用いられたと考えられる炭化材が埋設された状態で検出されている。

3 掘立柱建物跡

独立した掘立柱建物跡は3棟検出された。3棟とも2間×2間の側柱式であるが、SB002の柱穴は規模が大きい。

4 竪穴状遺構

竪穴状遺構は27基検出された。平面形は長方形ないし方形で、北西-南東方向に軸をもつものが多いが、必ずしも一定の方向性が認められるわけではない。性格のよく判らないものが多いが、おそらくは倉庫のような施設ではないかと推定される。

5 土 坑

土坑は651基検出された。これらは、概して調査区域の南西側、C～J-22～35区一体に多く分布する傾向が認められた。平面形は円形・楕円形・長方形・方形と様々で、規模も一様ではなく、その性格もまた多様であったと考えられる。例えば、SK423では馬の線刻画をもつ刻線土器が出土している。東日本における奈良・平安時代の動物が描かれた遺物の類例をみると祭祀に係わる遺跡か、官衙の性格を帯びた遺跡からの出土が一般的であり、非日常的な場面で用いられたと推定されている（北条 1994）ことを考えあわせると祭祀的性格が濃いといえるであろう。また、小型特殊土器（ミニチュア）を伴うSK207・216・227・391・505・519・543・798、土玉が出土したSK389等も祭祀的なものと考えられる。下層から底面に焼土の堆積したSK045・074・131・132・158・176・177・292、外縁にリング状に焼土が全周して堆積していたSK808等も、生産関連遺構としての性格についての検討を要するほか、祭祀的な意味合

いでとらえることが可能かもしれない。

このほか、鍛冶工房跡SI091Bに隣接して検出された前述のSK327やSK329は付随する廃滓ピットと考えられた。SK361などでも多量の鉄滓や鑄羽口が出土している。また、外周溝の先端土坑にしばしば認められたが、SK228・235・241・253・356・451・462・500・551等竈の廃材等が投棄されたと推定される焼土・粘土・炭化物を出土する土坑もある。さらに、外周溝が建物への浸水防止・排水の施設、雪囲いの施設、融雪池としての施設といった機能をもっていたと考えられるならば(木村 2000)、SI087の外周土坑と判断されたSK267・269・270・271・272・276、同じくSI095に対応するSK321・322・323・324・325・330、あるいはSI097に対応するSK326・328・333・334・337・338・340・341・342・343・356・385等は、同様の用途を果たした可能性も考慮しておかなければならないであろう。

6 井戸跡

井戸跡は8基検出された。遺跡の東側に隣接して河川が流れており、水利はきわめて良好だったはずであることも考慮すると、1遺跡内での検出数としてはきわめて多いと思われる。

8基すべて素掘り井戸と考えられ、(1)方形ないし隅丸方形の掘り方の中心部にほぼ円筒状に堅坑を掘って井戸側(宇野 1982)を設置したもの(SE005・006・011)、(2)円形の掘り方にはほぼ円筒状に堅坑を掘って井戸側を設置したもの(SE009・010)、(3)(2)に幅30cm内外の浅い外周溝を伴うもの(SE008・012)、(4)平面形は楕円形を呈し、掘り方と堅坑の区別が不明瞭なもの(SE007)に大別される。確認面から底面までの深さは1.83m～4.08mで、2m代(2.19～2.56m)が4基である。

7 耕作跡

耕作跡は6基検出された。いわゆる畝状遺構であるが、いずれも小規模である。2～14条の浅い畝間が確認されており、各々方位角度に差異はあるものの、すべてほぼ南-北方向に軸をとっている。

8 焼土跡

焼土跡は47基検出されたが、昨年度の調査で検出された不整形を呈するものとは異なるものもこの中に含まれている。本年度の調査で検出された不整形の焼土跡は43基である。SF87～95やSF103～106の堆積状況を見ても、これらは本来、西から東方向の沢筋に堆積した一連の焼土であったと考えられる。発掘調査では、便宜上繋ぎの途切れたものを1単位で扱ったので、遺構番号に基づく数量処理はあまり意味をなさない。

SF086および102は円形を呈しており、平面形を確認できなかった建物跡の竈か、生産関連遺構の可能性が考えられる。また、SF084は落ち込みに焼土が流れこんだか廃棄されたもの、SF097は土坑状の掘り込みに廃棄された焼土と推定される。

9 ピット

ピットは296基検出されたが、性格はよくわからない。掘立柱建物跡や襍列などを構成する

ものが存在する可能性もある。

10 溝 跡

溝跡は85条検出された。大半の溝跡は、概して本遺跡の盛期に形成されたと考えられる建物跡よりも時期的に新しいものが多く、用排水路などの用途が推定される。このうち特に、昨年度から継続調査を行ったSD006やSD052などのような土地の区画、あるいは境界の設定といった用途を果たした可能性も考えられる長い溝跡は、重複するなどの建物跡よりも時期的に新しい。また、調査区域外にかかるものを含めて10m以下のものが40条あり、形態的にみて畝状遺構の可能性のある溝跡（SD093・094・095）も存在する。

Ⅳ 出土遺物の特徴

本遺跡では、土師器や須恵器を主体に平安時代の集落跡としてはかなり多量の遺物が出土している。その中で目に付いたものをいくつか取り上げてみると、建物跡や土坑から小型特殊土器（ミニチュア）の出土が目立ったことが、まずあげられる。火床だけが残された竈の在り方や、あるいは土玉の出土なども合わせ考えると、集落の構成員が各家屋単位で集落に共通する祭祀を行っていた可能性を考慮してよいのかもしれない。Q-19区遺構確認面では、土鈴と思われる破片も出土している。先にふれたSK423出土の馬の線刻画が描かれた刻線文土器（図2）の出土なども、集落内では特殊な位置を占める祭祀の痕跡かもしれない。なお、SI163から出土した須恵器壺底部には図2左の曲線画と類似した曲線文が施されている。また、SI095では翡翠大珠（床～掘り方上面）・須恵器小型壺（掘り方）・土玉（B竈）が出土しており、祭祀的な色彩が濃厚である。さらに、SI126・140・147では鉄斧とともに鋤杖の一部が出土しており、両者はセットをなしていた可能性がきわめて高い。五所川原市持子沢D-1号竈跡でも鉄斧の出土が目立っており、岩木山北麓の製鉄集団と梵珠山西麓の窯業集団との有機的関係が説かれている（坂詰 1974）。

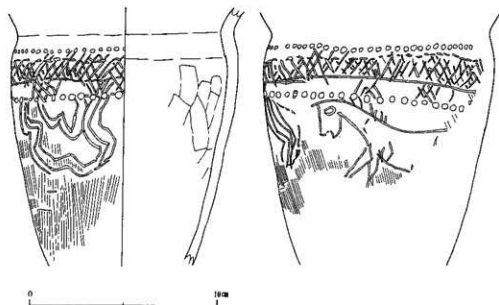


図2 馬の線刻画の描かれた刻線文土器（SK423出土）

このほか、南東壁に竈をもつ建物跡SI117の南西隅では、破砕した須恵器大甕が床面を掘り
凹めた掘り方に据えられた痕跡を残して出土している。また、井戸跡からは鉤棒状木製品(SE
008・012)のほか曲物底板(SE006・009・012)、箸(SE008)等が出土しており、SK561から
は外耳破片、SE006、C-30区遺構確認面からも外耳土器と思われる破片が出土している。

V ま と め

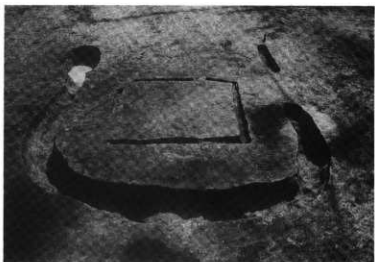
2000年度および2001年度の2か年にわたる野尻(4)遺跡の発掘調査では約49,000㎡が調査
の対象となり、9世紀～10世紀を盛期とする大規模集落の存在が明らかになった。検出された
遺構の内訳は縄文時代のTピット2基、平安時代の建物跡166軒(建て替え重複を含めると189
軒前後)、掘立柱建物跡3棟、竪穴状遺構30基、土坑816基、井戸跡12基、耕作跡(畝状遺構)
11基、焼土跡106基、ピット319基、円形周溝遺構2基、埋設土器1基、溝跡148条(ただし、
近・現代の道路跡の可能性のある溝跡も含む。)である。

参考文献

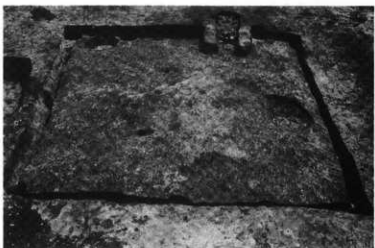
- 北条朝彦 1994 「出土遺物に描かれた動物—奈良・平安期の東日本における諸例—」『動物考古学』3
木村 高 2000 「津軽地方における平安時代の住居跡」『考古学ジャーナル』462
根本直樹・大友文彦・藤田一世・一戸松郷
2001 「野尻(4)遺跡より産出したテフラについて」(調査会委託分析報告)
岡田康博 1990 「羽口」『空沢遺跡』(青森県 第130集)
坂詰秀一 1974 「津軽持子沢遺跡第2次調査概報」『北奥古代文化』6
高杉博章 2001 「野尻(4)遺跡調査概報」『平成12年度 浪岡町文化財紀要』I
宇野隆夫 1982 「井戸考」『史林』65(5)



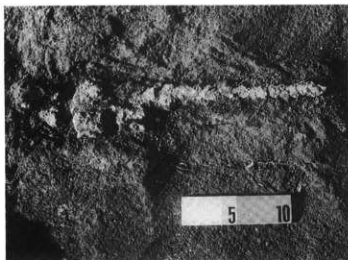
建て替え重複の65号建物跡を西から見る



重複のない114号建物跡を西から見る



外周溝をもたない136号建物跡を西から見る



126号建物跡掘り方出土の銅杖を西から見る



焼失家屋140号建物跡出土の
鉄斧を南から見る



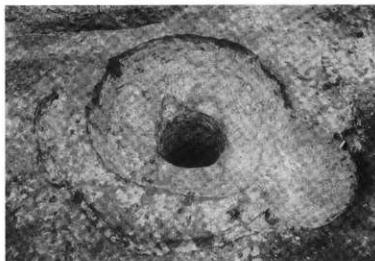
95号建物跡掘り方出土の小型須恵器壺を南から見る



117号建物跡南西隅床面での須恵器大壺出土状態（西から）



100号建物跡東壁際で検出の炉跡状遺構を西から見る



外周溝をもつ9号井戸を西から見る



外周溝をもつ12号井戸を西から見る

発掘調査抄録

ふりがな	へいせい13ねんど のじり(4) いせきはつくつちょうさがいはう							
書名	平成13年度 野尻(4) 遺跡発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名	浪岡町文化財紀要							
シリーズ番号	Ⅱ							
執筆者名	高杉博章							
編集機関	浪岡町大歌迦工業団地調査会・浪岡町教育委員会							
所在地	038-1311 青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字稲村101-1 Tel0172-62-1111							
発行年月日	西暦 2002年 3月 30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号					
野尻(4) 遺跡	青森県南津軽郡高屋数字野尻1番地・他	229	29063	40度 44分 26秒	140度 35分 09秒	28,000㎡	20020416 ～ 20021116	工業団地造成
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
野尻(4) 遺跡	集落跡	平安時代・縄文時代	建物跡103軒 掘立柱建物跡3棟 堅穴状遺構27基 土坑651基 井戸跡8基 耕作跡8基 焼土跡47基 ピット296基 溝跡85条		縄文土器・石器 土師器・須恵器・鉄製品(斧・鋤杖・他) ・土製品・石製品 (コンテナ130箱)		馬の刻画が描かれた刻線文(捺文)土器が出土している	

資料紹介

野尻（4）遺跡出土のヒスイ大珠について

野尻(4)遺跡出土のヒスイ大珠について

長内 孝幸(大釈迦工業団地調査会)

1. はじめに

これまで青森県内の平安時代を主体とする遺跡から、ヒスイ大珠が出土した事例は報告されていない。しかしながら、平成13年度に実施した野尻(4)遺跡の発掘調査において、第95号竪穴建物跡内からヒスイ大珠が出土しており(第3図)、平安時代にもヒスイが使用されていたことを確認できた。このような特殊な出土事例を紹介するにあたり、同時期の比較資料が無いことから、浪岡町内の遺跡から出土したヒスイや、県内で報告がなされている主な遺跡のヒスイ大珠を比較しながら、該資料の紹介と検証をしていきたい。

2. 遺跡の概要と出土状況

野尻(4)遺跡は青森県南津軽郡浪岡町大字高屋数字野尻地内に位置し、平安時代(9世紀末頃から10世紀前半)を主体とする遺跡である。主な検出遺構としては竪穴建物跡・掘立柱建物跡・外周溝の3点セット、または土坑を含む4点セットを一単位とする建物跡や井戸跡、溝跡等がある。遺物としては土師器、須恵器が多く出土しており、祭祀・装飾に使用したと思われる土玉、ミニチュア土器、そして若干ではあるが擦文土器や、縄文時代後期前葉の十腰内I式の土器片等が出土している。調査区は最近まで畑として使われていたため、耕作等の削平が強く遺構の残存度はあまり良くない。第95号竪穴建物跡は、長軸8.58m×短軸7.15mの規模をもち、カマドの主軸方向は南東を向いている。外周溝、掘立柱建物跡は附属しておらず、外周溝と同一機能をもつと考えられる土坑が廻る建物跡である。ヒスイの出土層位も床面、もしくは掘り方直上という曖昧な地点であったが、平安時代の遺構に伴って出土したことは事実である。同遺構からは、ヒスイ大珠の他に土師器(甕・坏)、須恵器(坏・甕形ミニチュア土器)、刀子、鉄滓等の遺物が出土している。

3. ヒスイの比較と出土資料

県内から出土しているヒスイは、勾玉や大珠など形や大きさなども多様であり、縄文時代を主体とする遺跡から出土するのが殆どである。大珠の形態は一般的に縹節型、緒締型、斧型に大別され、さらに縹節型には厚手型、細身型があり、緒締型には厚手型、細身型、扁平型、三角型、不整形型、方形型、縦孔型というように細分できる。

今回、野尻(4)遺跡から出土したヒスイ大珠(図2-1)は、縦3.5cm×横3.2cm×厚さ1.4cm、重量30.87gで、形態類型は緒締型の縦孔型に分類できる。穿孔は片側穿孔であり、貫通後に反対側の孔の仕上げを施している。縦側に穿孔を施すヒスイは、六ヶ所村の上尾駈(2)遺跡や、同じく六ヶ所村の沖附(2)遺跡に類例がある。まず、この六ヶ所村の遺跡と、浪岡町内

のヒスイが出土している遺跡を紹介したい。

1) 六ヶ所村上尾駁(2)遺跡(青森県教育委員会 1988)

調査区包含層からヒスイ大珠が4点ならんで出土している。出土したヒスイは両面に穿孔しているもの(図2-2・3)と、両面と縦側の二箇所を穿孔しているもの(図2-4・5)があり、縄文後期前葉の十腰内I式の土器が伴出している。また、不整楕円形玉等が2点出土している。

2) 六ヶ所村沖附(2)遺跡(青森県教育委員会 1986)

調査区包含層から方形玉が2点(図2-6・7)出土している。2点とも縄文時代後期前葉の十腰内I式の土器が伴出している。穿孔位置は、見方により縦側とも横側とも捉えられるものであるが、面ではなく厚みのない側端部から穿孔を施しており、形態から見ると本紹介資料とよく似ている。

3) 浪岡町源常平遺跡(青森県教育委員会 1978)

縄文時代晩期の土墳墓から出土している。第19号土墳墓の覆土第2層から硬玉製の玉が4点(図2-8~11)散在して出土し、底面からも硬玉製の玉が1点(図2-12)出土している。また、第21号土墳墓の底面からは有蓋石鏝1点とともに硬玉製勾玉が2点(図2-13・14)まとまって出土している。

4) 浪岡町細野遺跡(青森県立郷土館 1984)

縄文時代晩期と思われる遺跡で、勾玉大珠が1点(図2-15)が出土している。

5) 浪岡町羽黒平(3)遺跡(浪岡町 1995)

縄文時代晩期中葉の包含層から硬玉製丸玉が1点(図2-16)が出土している。

以上が浪岡町内のヒスイ出土遺跡と、形態的に似ているヒスイ出土遺跡の紹介である。

福田友之氏(福田 1999)によると、青森県域における平成11年までのヒスイ出土遺跡数は71ヶ所、ヒスイ総数は631点であり、内訳は縄文609点、弥生4点、古代14点が出土たとされている。その中からヒスイ大珠の出土している遺跡と、浪岡町内の遺跡を抜粋して表を掲載した(表1)。

4. おわりに

以上、本遺跡から出土したヒスイ大珠と、他の遺跡から出土したヒスイを比較、紹介してきた。しかし、なぜ平安時代の建物跡からヒスイが出土したのであろうか。まず考えられることは、

- ①縄文時代にその土地で生活していた人々がヒスイを手にいれ使用し、その後長い年月を得て、平安時代の人々が発見し、再使用した。
- ②平安時代に作製され、現地や近隣地域の人々と交易をして手に入れた。
などが考えられる。

福田友之氏からは、「本遺跡から出土したヒスイの産地は糸魚川産のものと考えられ、県内の縄文時代の遺跡から出土しているものと大差はなく、形態も縄文時代後期前葉に多く見られる大珠である」との教示をいただいた。たしかにヒスイの全盛期である縄文時代でもヒスイ未製品は数点出土しているに過ぎず、平安時代に当地、もしくは近地域で製作していたとは考えにくい。本遺跡からは縄文時代後期前葉、十腰内Ⅰ式の土器片も少量ながら出土しており、先にも述べたように縄文時代の人々による廃棄等で土中に埋まっていたものが、平安時代の耕作等で土中から発見され使用されたと考えるほうが自然である。やはり、縄文時代の人々と同じように平安時代の人々もヒスイの青（碧）という色に神秘的なものを感じとっていたのであろうか。

以上、現段階で考えられる事を述べてきたが、あくまでも可能性でしかなく、確実なものではないということをつけ加えておきたい。今後の出土資料の増加を期待し、平安時代における当地の生活実態や精神的な側面から、本資料の出土意義を解明して行くことが必要と考えている。

本稿を作製するにあたり、青森県埋蔵文化財センターの福田友之氏からは種々御教示いただいた。また、浪岡町教育委員会の工藤清泰氏、大釈迦工業団地調査会の高杉博章氏からは様々な面からご指導いただいた。心から感謝を申し上げます次第であります。

引用・参考文献

- 浪岡町 「羽黒平(3)遺跡」浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第5集 1995
- 三厩村教育委員会 「宇鉄遺跡」発掘調査報告書 1996
- 青森県教育委員会 「沖附(2)遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第101集 1986
- 青森県教育委員会 「源常平遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第39集 1978
- 青森県教育委員会 「大石平遺跡Ⅲ」青森県埋蔵文化財調査報告書第103集 1987
- 青森県教育委員会 「上尾駮(1)遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第113集 1988
- 青森県教育委員会 「上尾駮(2)遺跡Ⅱ」青森県埋蔵文化財調査報告書第115集 1988
- 青森県教育委員会 「富ノ沢(2)遺跡Ⅵ」青森県埋蔵文化財調査報告書第147集 1993
- 青森県教育委員会 「三内丸山遺跡Ⅵ」青森県埋蔵文化財調査報告書第205集 1996
- 青森県教育委員会 「餅ノ沢遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第278集 2000
- 青森県教育委員会 「野尻(1)遺跡Ⅱ」青森県埋蔵文化財調査報告書第259集 1999
- 青森県教育委員会 「野尻(2)遺跡Ⅱ・野尻(3)遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第186集 1995
- 青森県教育委員会 「野尻(4)遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第186集 1995
- 青森市教育委員会 「山吹(1)遺跡」青森市埋蔵文化財調査報告書第16集 1991
- 青森県八戸市教育委員会 「田面水平遺跡(1)」八戸市埋蔵文化財調査報告書第20集 1988
- 青森県立郷土館 「亀ヶ岡石器時代遺跡」青森県立郷土館・考古-第6集 1984
- 青森県立郷土館 「火炎土器と翡翠の大珠」青森県立郷土館 2001
- 浪岡町 「浪岡町史」第1巻 2000
- 福田友之 「本州北端の硬玉製(翡翠)玉飾り」『青森県考古学』第5号 1990
- 福田友之 「本州北端のヒスイ製装身具(2)」『青森県考古学』第11号 1999
- 福田友之 「縄文時代の物と人の移動」『北日本の考古学』吉川弘文館 1993
- 安藤文之 「翡翠大珠」『縄文文化の研究』第9巻 雄山閣 1983

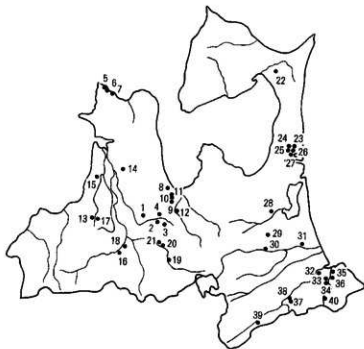


図1 青森県域のヒスイ大珠と浪岡町のヒスイ出土遺跡

表1 青森県域出土のヒスイ大珠と浪岡町のヒスイ一覧表

順1番号	遺跡名	珠の形製と点数	出土状況	所属年代	出土器形式
1	浪岡町野成(4)	方形大珠	遺跡号形式伴葬	平安時代	
2	○ 遊常平	小玉5、勾玉2	遺跡19、21号土壌基	縄文晩期	大洲C1・C2式
3	○ 越野	勾玉大珠1	不明	縄文晩期?	
4	○ 風甲(3)	丸玉1	包含層	縄文晩期中葉	大洲C1・C2式
5	二股村中の字	半円形大珠1、三角形玉1、不整形玉1	包含層	縄文後期前葉	十層内I式
6	○ 宇野	円形大珠1	不明	縄文晩期?	
7	○ 藤島橋	円形大珠1	不明	縄文	
8	青森市戦城岡町	方形大珠1	不明	縄文晩期?	
9	○ 近野	半円形大珠1	包含層	縄文晩期前葉	十層内I式
10	○ 二内	大珠1、溝のついた磁石1	不明	縄文中期?	
11	○ 三内丸山	大珠4、楕円形玉・磁石磁粉27	大平が盛土	縄文中期	門前上層b式・磨花式直後
12	○ 山成(1)	長楕円大珠1(5.6cm長)	海部湾土層	縄文中期後葉~末葉	
13	青森市城道	勾玉大珠5、勾玉7	不明	縄文	
14	錦ヶ沢町錦ノ沢	方形大珠率製品1	包含層	縄文中期後半	
14	釜木町妻の降	勾玉大珠片1	不明	縄文晩期?	
15	未定町亀ヶ岡	勾玉大珠2、大珠率製品1、勾玉3、丸玉16、丸小玉3、方形小玉2、水鏡品1	不明	縄文時代晩期?	
15	○	勾玉大珠1、丸小玉9	不明	縄文晩期	
16	船形村樋口ノ下(下)	大珠1	不明	縄文中期?	
17	弘前町十階内	勾玉大珠1、勾玉1	包含層	縄文晩期	
18	○ 藤島町	楕円形大珠1(3.5cm長)	不明	縄文	
19	黒石市ノ成	長楕円形大珠2	船石付近、2箇所ぶ	縄文後期前葉	十層内I式
20	○ 花巻	球形大珠1	不明	縄文中期?	
20	○	不整形円形大珠1	不明	縄文中期?	
21	○ 牡丹平	有溝楕円大珠1	不明	縄文中期?	
22	むつ町眞光	楕円形大珠1	包含層	縄文中期末葉	磨花式直後
23	六ヶ所村石平山(橋)	方形大珠1	包含層	縄文後期前葉	十層内IV式
24	○ 野ノ内(2)	勾玉大珠1	包含層	縄文前葉	
24	○ 宮ノ内(2)	大珠2、軟玉大珠1	不明	中層後半	
25	○ 上尾(2)	勾玉大珠1、勾玉6、各種玉7	土層裏土	縄文晩期中葉	大洲C1・C2式
26	○ 上尾(2)	各種大珠4、水鏡円形玉等2	包含層(4箇所)	縄文後期前葉	十層内I式
27	○ 沖野(2)	方形玉2	包含層	縄文後期前葉	十層内I式
28	大森村林ノ森員塚	不整形円形大珠1	包含層	縄文中期?	
28	○	方形大珠1	不明	縄文中期?	
28	○	不定形大珠1(3.1cm長)	不明	縄文中期?	
28	○	球状大珠片1	溝1号伴葬跡	中層後半	
29	上田町市川	円形大珠1	不明	縄文晩期?	
30	○ 明	大珠片1、勾玉2、丸玉1、丸小玉3	包含層、遺跡17・29号ビッド	縄文中期、縄文晩期中葉	大洲C1・C2式
31	下田町沢光(古墳)	勾玉大珠1	3号埋土体部	古代	
32	八戸市田原(水戸)	不整形円形大珠1	遺跡55号形式伴葬跡裏面	縄文後期中葉	十層内IV式
33	○ 是川中葉	勾玉大珠1、勾玉1	包含層	縄文晩期中葉	大洲C1・C2式
34	○ 是川(玉等)	有溝長方形大珠1	不明	縄文中期?	
35	○ 新井田	水鏡長方形大珠1(3.5cm長)	不明	縄文	
36	○ 栗原	長方形大珠率製品1	黒石号伴葬跡	縄文中期前葉	大木8b式
37	名川町芋貝塚	楕円大珠1	不明	縄文中期前葉	
38	○ 広場	長楕円形大珠2	不明	縄文	
39	田子町野岡平	勾玉大珠1	不明	縄文晩期	
40	津軽村家谷	球形大珠1	不明	縄文後期?	

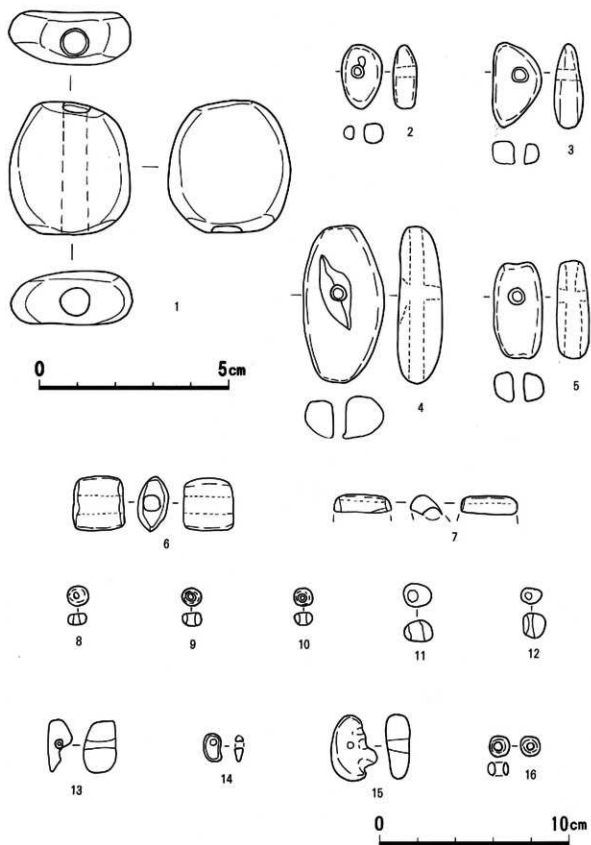


図2 浪岡町内出土ヒスイと類似資料の比較



図3 第95号竪穴住居跡内Hisui出土地点



写真1 野尻(4)遺跡出土のHisui大珠

平成13年度

文化財ハトロール

浪岡町文化財一覧

浪岡町文化財日誌・他

平成13年度 文化財パトロール調査概報

1 調査経過

浪岡町には史跡浪岡城跡、史跡高屋敷館遺跡をはじめ現在70遺跡が登録されている。八甲田山麓及び梵珠山から連なる丘陵地帯に多くの遺跡が存在し、主に果樹園として利用されている。

これまで町内においては、緊急調査として東北縦貫自動車道路に伴う発掘調査、空港アクセス道路青森・浪岡線建設に伴う発掘調査、国道7号浪岡バイパス及び津軽高規格道路五所川原・浪岡線建設に伴う発掘調査が行われ、史跡整備のものとして浪岡城跡の調査が継続されてきた。

国道7号浪岡バイパスに伴い高屋敷館遺跡も保存が決定し、今後はバイパス開通により沿線の開発に注意が必要となる。また、りんご等の果樹園として利用されている遺跡についても改植や土壌の天地返しによる遺構破壊が危惧され、住民への埋蔵文化財包蔵地の周知をしなければならぬ。

今年度のパトロール調査は、梵珠山から南側へ連なる丘陵地西側一帯に広がる遺跡、浪岡川右岸の河岸段丘上に続く遺跡、天狗平山の麓、浪岡川と正平津川に挟まれた舌状台地上に位置する遺跡、正平津川左岸の河岸段丘上に位置する遺跡、八甲田山麓から西側へ連なる丘陵地一帯に存在する遺跡など31遺跡を対象とし、下記の日程と体制で実施した。

記

調査回数 5回 8月23日・9月10日・9月21日・11月8日・11月12日

調査機関 浪岡町教育委員会生涯学習課

生涯学習課長	常田典昭
生涯学習課文化班長	工藤清泰
生涯学習課文化班主任主査	木村浩一
生涯学習課文化班主査	小田桐勝昭
青森県文化財保護指導員	山内弘喜

調査の原因 青森県文化財パトロール事業

採集遺物 縄文土器、土師器、須恵器など

遺物の保管 浪岡町中世の館収蔵庫

2 パトロール調査をした遺跡（カッコ内は遺跡番号）

① 梵珠山から南側へ連なる低平丘陵地西側一帯に広がる遺跡

下平遺跡（29-004） 農道樽沢・下石川線と吉野田旭線の交差点付近に位置する。現在は果樹園として利用されており開発等の可能性が少ない地域で現状が維持されていくものと思われる。沢や溜池等で画されていないため範囲を特定するのは難しい。野菜畑から平安時代の土師器片を3点表採することができた。

蛭沢遺跡（29-008） 通称「ササワラコ」・「タケハラコ」と言われている縄文中・後期の遺跡である。標高40mほどの丘陵南側斜面の場所から縄文土器や磨製石斧が出土したと記録されている。現在は果樹園、野菜畑として利用されており現状が維持されていくものと思われる。旭（1）遺跡（29-005） 吉野田新溜池の西側に位置する。現在は果樹園として利用されており現状が維持されていくものと思われる。しかし一部ではりんご樹の改植が行われており、その場所から縄文後期の土器片、平安時代の土師器片を表採することができた。りんご樹を改植する際の注意が必要である。

旭（2）遺跡（29-006） 吉野田三太溜池南東側に位置する。遺物の表採はできなかったが平安時代の遺跡であると言われている。現在は果樹園、野菜畑として利用され開発等の可能性が少ない地域であり現状が維持されていくものと思われる。

中平遺跡（29-007） 熊沢溜池の北側から蛭沢遺跡手前の沢までの広い範囲に位置し、遺跡の上に吉野田集落が形成されている。現在は宅地、学校、果樹園として利用されており現状が維持されていくものと思われるが、住宅の立替え等には注意が必要である。

寺屋敷平遺跡（29-059） 吉野田新溜池東側に面し南北は沢地に画されている広い範囲である。現在は果樹園として利用され開発等の可能性が少ない地域であり現状が維持されていくものと思われる。伝説では奈良時代の梵珠千坊のうちの一つの寺跡と言われているが、今では伝説を裏付けるものは何もない。

永原遺跡（29-010） 熊沢溜池土手の県道浪岡・原子線西側の丘陵地に位置する。現在は宅地、果樹園、神社として利用されており現状が維持されていくものと思われる。縄文後・前期の円筒式土器が出土したと記録されている。

上野遺跡（29-011） 樽沢宝溜池西側の丘陵地に位置し縄文中・後期、平安時代の遺跡と言われている。現在は宅地、果樹園、野菜畑として利用されており現状が維持されていくものと思われる。野菜畑から平安時代の土師器、須恵器片を数点表採することができた。遺跡内の道路を拡幅する都市計画道路構想もあり、拡幅部分については発掘調査が必要である。

熊沢溜池遺跡（29-009） 熊沢溜池に半島状に突き出たところに位置する。現在は果樹園、野菜畑として利用されており現状が維持されて行くものと思われる。父親の畑も遺跡内にあり昭和20年代の頃井戸を掘った際に壺が出土し、故郷西善一先生に届出たと聞いている。また、長いもを取獲する際に平安時代の土師器、須恵器片がまとまった状態で出土している。

山神宮遺跡（29-013） 樽沢山神社付近から西側に広がる緩斜面に位置する。神社境内地を整地する際に池を掘ったところ縄文晩期の土器片が多量に出土したと言われている。現在は宅地、果樹園として利用されており現状が維持されていくものと思われる。野菜畑から平安時代の土師器、須恵器片を表採することができた。

銀館遺跡（20-051） 別名尾林館・杉銀館とも言われており銀集落北側の丘陵地に位置する。ここは津軽平野を一望に見渡すことのできる高台で、浪岡城守護として北島氏の家臣由

町弥右衛門の居城があったとされているが、現在は果樹園、野菜畑、共同墓地として利用されており城館としての範囲を特定することは困難である。野菜畑から縄文土器、平安時代の土師器、須恵器片を表採することができた。

杉田遺跡（29-058） 銀葦溜池の西側から熊野宮周辺に位置する。現在は果樹園として利用され開発等の可能性も少ない地域であり現状が維持されていくものと思われる。野菜畑から平安時代の土師器片を少量表採することができた。

大林遺跡（29-015） 銀館遺跡の北側に隣接する。現在は果樹園として利用されており現状が維持されていくものと思われる。沢や沼等で画されていないため範囲を特定するのは困難である。野菜畑から平安時代の土師器片を少量表採することができた。

長溜池遺跡（29-014） 長溜池の東西に広がる緩斜面に位置する。東側は宅地、病院、墓地として利用されているが、近年は宅地化が進んでいる地域であり埋蔵文化財包蔵地の周知を図らなければならない。西側は果樹園として利用されており現状が維持されていくものと思われる。

② 浪岡川右岸の河岸段丘上に続く遺跡

松山寺遺跡（29-025） 野菜畑として利用されている場所から平安時代の土師器片を表採することができた。また、高台から見下ろすと茶色の土と黒土が混ざりあったところが3ヶ所ほど確認でき竪穴住居跡があったと考えられる。

羽黒平(3)遺跡（29-019） 美人川伝説のある羽黒神社境内にも含まれる。平成6～7年に発掘したところは美人川公園として整備されている。現在は宅地等になっているが空港アクセス道路からも離れている場所であり、開発等の計画もなく現状が維持されていくものと思われる。

加茂神社遺跡（29-021） 史跡浪岡城跡新館地区東側に隣接する場所であり浪岡城と関連があるものと考えられる。現在は宅地、神社として利用されており現状が維持されていくものと思われる。

羽黒平(1)遺跡（29-017） 縄文、平安時代の遺跡として知られており、東北縦貫道路、県道青森・浪岡線空港アクセス道路建設により発掘調査が行われている。今年度のパトロール調査中に重機による土取り（浪岡町五本松字平野11の4・11の10）が行われているのを発見したが既に土中深く掘られていて遺構が壊された痕跡が認められる。現場から平安時代の土師器、須恵器片を3点表採することができた。遺跡内を空港アクセス道路が通っておりこの地域は今後も開発が予想されることから埋蔵文化財包蔵地の周知を図る必要がある。なお、平成14年度は開発等による試掘調査依頼が3件出されている。

③ 天狗平山の麓浪岡川と正平津川に挟まれた舌状台地上に位置する遺跡

春日社遺跡（29-035） 天狗平山の麓、正平津川右岸の河岸段丘上に位置し源常平遺跡へと続く。果樹園、野菜畑として利用されており現状が維持されていくものと思われる。また、

遺跡内に春日の小祠が祭られている。

天狗平遺跡（29-028） 縄文中・後期の遺跡として登録されている標高174mの天狗平山の頂部に位置する。伝説では長慶天皇陵墓とされていて昭和11年には「長慶天皇波岡山陵」確認調査が行われている。大正時代に石棺、短刀、小壺、土器が出土したと記録されている。頂上まで登るには藪道を1時間以上歩かなければならず、今回のパトロールは遠景を写真撮影しただけである。来年度以降にも是非自分の目で確認してみたい遺跡である。

源常平遺跡（29-027） 史跡浪岡城跡新館地区の向かい側に位置している。古くから城館があったとされている場所で現在でも空壕を確認することができる。空壕の端から波状文四耳壺の完形品が出土し13世紀頃の陶器で資料的価値の高いものとして浪岡町文化財に指定されている。東北縦貫道路建設に伴う発掘調査で新たに空壕が確認された。今は城館としての面影はないものの地形的には浪岡川と正平津川に挟まれた断崖になっており要害の地であったことをうかがわせている。現在は果樹園として利用されており現状が維持されていくものと思われる。

④ 正平津川左岸の河岸段丘上に位置する遺跡

浪岡崎（1）遺跡（29-023） 正平津川左岸の河岸段丘上に位置し遺跡の上に北中野集落が形成されている。現在は宅地、果樹園等に利用され現状が維持されていくものと思われる。

金光上人の墓や浪岡城と関連する御緒太を持つ広峰神社が存在する。

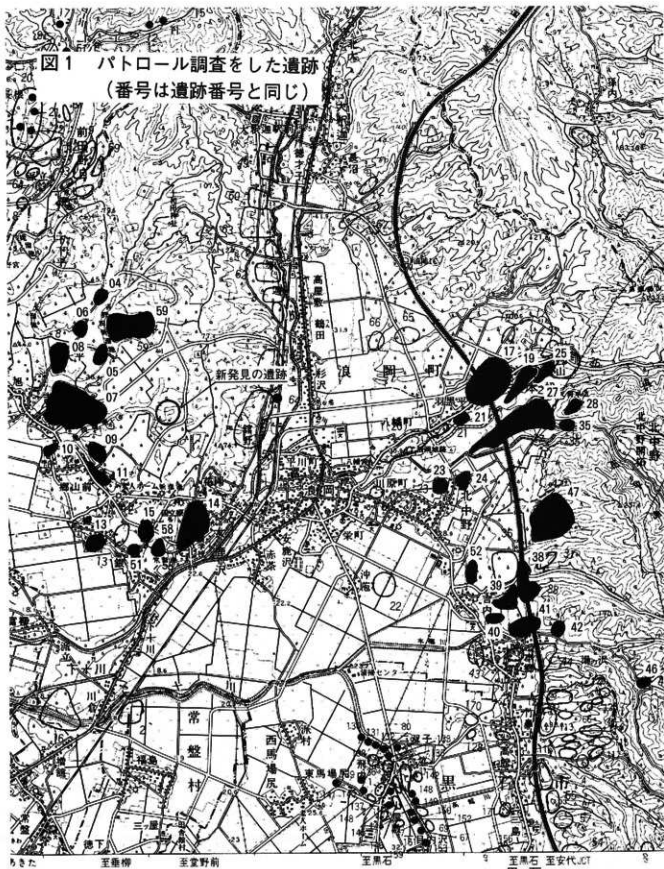
浪岡崎（2）遺跡（29-024） 浪岡崎（1）遺跡の東側に隣接しこの場所も遺跡の上に北中野集落が形成されている。現在は宅地、果樹園等に利用されており現状が維持されていくものと思われる。水田と畑の間にある用水路の縁から縄文時代の遺物が多く採集されたと記録されている。

⑤ 八甲田山麓から西側へ連なる丘陵地一帯に存在する遺跡

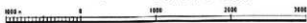
王田館遺跡（29-047） 中世の城館として登録されているが、昨年の確認調査では場所・範囲が特定できなかった場所である。今年度のパトロール調査で遺跡地区に記載されている場所より沢一つ北側であることが判明した。遺跡の背後に230m前後の山脈が続き広大な屋敷型の平城であったと推測されるが、野菜畑から少量の縄文土器、平安時代の土師器片を表採しただけで中世の城館として証明することはできない。現在は果樹園として利用されており現状が維持されていくものと思われる。

北島館遺跡（29-052） 浪岡北島氏が最初に入部した地であると言われている。水田より一段高い所に数郭構えていたものと推定される。現在は濠跡と思われる所は農業用水の堰として利用され、郭の部分は果樹園として利用されており現状が維持されていくものと思われる。

吉内遺跡（29-039） 吉内川左岸の標高30～50mの段丘上に位置する。館跡とも言われているが濠や土塁等を確認することはできなかった。現在は果樹園として利用されており現状が維持されていくものと思われる。



1:50,000 青森西部



杉ノ沢遺跡（29-038）吉内遺跡の東側の丘陵地に位置している。遺跡を分断する形で東北縦貫道路が通っており道路建設に伴う発掘調査が行なわれている。その他は果樹園として利用されており現状が維持されていくものと思われる。

中屋敷遺跡（29-040）本郷小学校東側の低平丘陵地に位置する。一帯は水田より一段小高い地形になっており郭状の様相を示しているように感じられる。現在は果樹園、野菜畑に利用されており現状が維持されていくものと思われる。

田ノ沢遺跡（29-042）本郷川右岸の丘陵地に位置する。開発等の可能性が少ない地域であり、現在は果樹園として利用されており現状が維持されていくものと思われる。しかし一部ではりんご樹の改植が行われている所があり、今後は改植をする際にも注意が必要とするため埋蔵文化財包蔵地であることを周知しなければならない。

篠原遺跡（29-041）本郷集落北東の丘陵地に位置する。遺跡内を東北縦貫道路が通っており道路建設に伴う発掘調査が行なわれている。西側斜面は果樹園として利用されており現状が維持されていくものと思われる。

牧ノ沢遺跡（29-046）本郷ダム右岸の標高80mの丘陵地に位置する。現在は果樹園、山林として利用され開発計画の可能性が少ない地域であり現状が維持されていくものと思われる。記録では縄文早期の尖底土器が出土したとされている。

3 新発見の遺跡

文化財パトロール調査で遺物の表採中、農作業をしていた人と遺跡のことで話をする機会があった。本人所有地のりんごの木を抜根した後、雑草を処理するためにトラクターで数回耕したところ、細かく砕けてはいるが土器片が出てきたとのことであった。早速現場に駆け付け数分で平安時代の土師器、須恵器片を多数採集することができた。この場所は低平丘陵地になっており熊沢溜池上流部分のY字型の沢地をなしている。両向かい側も地形的に見て包蔵地であると思われるが、今回は遺跡として確認することはできなかったため、遺物を採集した範囲を登録するとどめた。所在地は浪岡町大字樽沢字上野地内であり遺跡名を付けるとすれば小字の上野遺跡とするのが通常であるが、大字郷山前字上野に存在する上野遺跡と区別するため、樽沢上野（たるさわうわの）遺跡として登録した。

4 浪岡町遺跡台帳の整備状況

青森県文化財保護課より埋蔵文化財包蔵地台帳の様式変更の指導を基に、1項目は埋蔵文化財包蔵地台帳の記載、2・3項目は開発協議・立会・パトロール等の記載、4項目は発掘調査の記録記載として新様式に切り替え作業を行なっている。

浪岡町としては独自に遺跡台帳の5項目に各遺跡の範囲の地番を記載している。また、遺跡の無断開発等を未然に防止する方法として小字の地番で遺跡か否かわかるように小字毎の地番

に遺跡名を記載したフロッキーを関係部署（企画調整課・農政課・農業委員会・建設課・下水道課）に配布する予定である。その他、浪岡町都市計画図（1/2,500）により等高線、沢、溜池、川、水路等で遺跡の範囲を特定し、その上に国土調査の成果品である地籍図を縮尺して張り合わせている。毎年5回の調査で20～30遺跡のパトロール調査を行なっているが、遺跡台帳に記載されている地図が古いものや手書きでおおまかに書かれている個所もあり、所在地・範囲を特定するのが難しかったことから携帯型ナビゲーションを導入し今回のパトロール調査から緯度・経度を記載している。

浪岡町文化財一覧

浪岡町所在 指定文化財一覧（平成13年9月現在）

(1) 国指定文化財

番号	種別	名称	員数	指定年月日	所在地	所有者・管理団体	備考	管理状況
1	史跡	浪岡城跡	1	昭和15年2月10日 追贈：平成元年3月7日	浪岡町大字浪岡字五所・字南出 浪岡町大字五本松字松本	浪岡町	指定面積 136,300㎡	一部史跡公園として供用
2	史跡	高麗館遺跡	1	平成13年1月29日	浪岡町大字高麗館 館字野尻	浪岡町	指定面積 29,762.72㎡	平成13・14年度に公有化計画

(2) 県指定文化財

番号	種別	名称	員数	指定年月日	所在地	所有者（管理者）	備考	管理状況
1	考古資料	亀ヶ岡式土器 彩色土器	1	昭和31年5月14日	浪岡町大字浪岡字 磯田197-2	平野良一		青森県立郷土館にて 展小中
2	考古資料	亀ヶ岡式土器 羽状楓文土器	1	昭和31年5月14日	浪岡町大字浪岡字 磯田197-2	平野良一		
3	考古資料	亀ヶ岡式土器 白付土器	1	昭和31年5月14日	浪岡町大字浪岡字 磯田197-2	平野良一		
4	無形民俗文化財	吉野田獅子 （産）踊	1	昭和36年1月14日	浪岡町大字吉野田	吉野田獅子 踊保存会		
5	彫刻	円空作木造観 音菩薩坐像	1軀	平成2年8月3日	浪岡町大字北中 野字天王21-2	西光院	昭和61年10月27日町指定文化財	
6	彫刻	円空作木造観 音菩薩坐像	1軀	平成9年5月14日	浪岡町大字大歌 遊字山田199-3	元光寺	平成5年4月27日町指定文化財	

(3) 町指定文化財

番号	種別	名称	員数	指定年月日	所在地	所有者・管理者	備考	管理状況
1	天然記念物	源常林の銀杏	1	昭和55年4月28日	北中野字沢田 107	浪岡町	高さ20.5m 幹囲6.47m	
2	史跡	伝・北畠氏墓所	2	昭和55年4月28日	①北中野字五倫 75の2、②北中 野字村元153の4	浪岡町教育 委員会	指定面積 ①230.24㎡ ②330㎡	
3	考古資料	土偶	1	昭和55年4月28日	浪岡字林本123	阿部精彦	高さ8.5cm	中世の館で展示中
4	考古資料	波状文四耳壺	1	昭和58年11月21日	北中野字下橋田 2-3	古村 浩	高さ24.2cm	
5	絵画	石器土器図録 屏風	2曲 1双	昭和58年11月21日	浪岡字林本123	阿部精彦		中世の館で展小中
6	絵画	石器図録屏風・ 半及土器図録屏風	2曲 2個	昭和58年11月21日	吉野田字磯田61 の1	木村徳栄		
7	建造物	旧坪田家住宅	1	平成6年12月8日	浪岡字岡田43	浪岡町		中世の館で管理
8	天然記念物	楊子杉	1	平成10年8月7日	五本松字羽黒平 1	加茂神社 （羽黒神社）	高さ30m 幹囲4.64m	

平成13年浪岡町文化財日誌・他

平成13年

- 1月12日 高屋敷館遺跡土地交換協議（国土交通省青森工事事務所）
- 1月17日 役場庁内国道7号バイパス関係課調整会議
- 1月19日 浪岡町納税組合研修派遣（「高屋敷館遺跡について」工藤清泰）
- 1月22日 浪岡城跡新館法面復旧工事
- 1月29日 高屋敷館遺跡、官報告示によって国史跡指定となる。
- 1月31日 浪岡町大釈迦工業団地調査会理事会
- 2月5日 町天然記念物「楊子杉」環境保全工事
- 2月7日 文化庁平成13年度予算ヒアリング（東京）
- 2月15日 高屋敷館遺跡活用検討委員会より「史跡高屋敷館遺跡 保存・整備及び活用に関する意見書」提出される
- 3月28日 平成13年度文化財補助事業実績報告書
- 3月30日 国立歴史民俗博物館貸出の浪岡城跡資料返却、『平成12年度浪岡町文化財紀要Ⅰ』
発刊
- 4月6日 高屋敷館遺跡に関する役場庁内会議
- 4月16日 大釈迦工業団地・野尻（4）遺跡発掘調査開始
- 4月20日 文化財審議会開催
- 4月24日 川原館遺跡発掘調査打合せ
- 5月5・6日 浪岡城跡歴史散策事業（中世の館）
- 5月7日 川原館遺跡発掘調査開始
- 5月14日 弘前大学の藤沼教授・関根助教授、細野遺跡等を視察
- 5月25日 高屋敷館遺跡保存による国道7号バイパスのルート変更に関し地元住民へ説明会開催
- 6月4日 平野遺跡発掘調査開始
- 7月10日 町指定文化財「旧坪田家住宅」を八戸工業大学月館教授・県文化財保護課調査
- 7月11日 茨城県教育財団職員、浪岡城跡出土遺物調査
- 7月12日 全国史跡整備市町村協議会東北支部総会・研修会（青森市）
- 7月30日 埼玉県熊谷市教育委員会・浅野課長補佐、浪岡城跡出土遺物調査
- 8月7日 野尻（4）遺跡（特に馬の刻画を有する擦文土器）・平野遺跡合同記者発表
- 8月10日 文化庁岡村主任調査官・平野遺跡視察
- 8月26日 広島県立博物館友の会、浪岡城跡・中世の館見学
- 9月8日 県指定文化財「吉野田獅子踊」のビデオによる記録保存撮影を行う

- 9月10日 福島大学教授工藤雅樹氏町内遺跡見学
- 9月13日 浪岡城跡新館発掘調査作業開始。筑波大学学生20名浪岡城跡・中世の館見学
- 9月27日 東北芸術工科大学学生30名浪岡城跡・中世の館見学
- 10月14日 「歩き・み・ふれる歴史の道」東北ブロック大会（米沢市）参加（木村・小田桐）
- 10月24日 平成元年開催の「中世の里シンポジウム」基調講演者・石井進氏逝去
- 10月30日 文化庁岡村主任調査官・平野遺跡出土遺物等視察
- 10月31日 浪岡城跡新館発掘調査作業終了
- 11月11日 こども伝統芸能東北大祭典（青森市）に野沢小学校吉野田獅子踊クラブ出演
- 11月14・15日 青森県埋蔵文化財担当者会議（青森市）参加（木村浩一・小田桐勝昭）
- 11月29日 全国史跡整備市町村協議会臨時総会（東京）参加（常田生涯学習課長）
- 12月1日 平成13年度青森県埋蔵文化財遺跡発表会発表（平野遺跡：木村浩一）
- 12月2日 平成13年度青森県埋蔵文化財遺跡発表会発表（野尻（4）遺跡：村上章久）
- 12月9日 文化庁・坂井調査官浪岡城跡視察

訂正のお願い

「平成12年度浪岡町文化財要目Ⅰ」の中で、下記の部分を訂正くださるようお願いします。

訂正箇所・頁数	行数	誤	訂正内容
例言	1行	平成11・12年度	平成10・11年度
96頁	23行	縄文時代後期	弥生時代
111頁	27行	あおり	青森

平成13年度
浪岡町文化財紀要Ⅱ

発行日 平成14年3月29日
編集 浪岡町教育委員会生涯学習課文化班
発行 浪岡町教育委員会
〒038-1311
青森県南津軽郡浪岡町浪岡字稲村101-1
TEL 0172-62-1111 FAX 0172-62-9368
印刷 高金印刷株式会社
〒038-0015
青森県青森市千刈二丁目1-31
TEL 017 (781) 2244

